62-310

帝國圖書館藏

講師 池谷一孝講述

日本文學史

附錄日本文學年表

完

東京專門學校刊行

日本文學史

目次

總論

第一章　文學史の要務……一

文學に關する諸說　思想感情及び想像の變遷　文學に影響を及ぼすもの　人種　境遇　時勢　個人　文學史の要務

第二章　地勢、人種及び年代の區分……八

江山の風景　動植物の美　人文の發達に適する國土　日本人種の特性　文學史年代の區分

第一期　奈良朝以前の文學

第一章　言語……一六

語系　國語と國文學との關係　上古の正確なる言語は知り難きと上古言語の特質　我國言語の變遷を少からしめたる理由

第二章　上古文字……二三

上古文字の有無に關する先哲の所說　外國との交通　漢字　神代文字
第三章　歌謳……二九
上古文學の概況　最古の歌謳　短歌　長歌　相思の歌　國民的性格　贈答の歌　連歌　歌垣
第四章　散文……四二
和漢混和文　假字文　纛詞　祝詞　其の想　其の文躰
第二期　奈良朝の文學
第一章　總論……五七
年代の範圍　奈良朝文學の概況
第二章　漢學、佛教及び其の影響……六〇
漢學の渡來　其の發達　佛教の渡來　其の傳布　我國惟神の道　儒佛神の差異　漢學及び佛教の社會並びに人心に於ける影響　留學生　唐風の摸倣　大化の革新

第三章　歌謳……七五
第一節　總叙……七六
第二節『萬葉集』……七八
題號　撰者及び其の年代　歌の部類　歌躰　歌詩　萬葉假名　歌の性質　漢學及び佛教の影響　敬神忠君崇祖の念　自然美の詠歌者　物語歌
第三節『萬葉集』中の歌人……九八
柿本人麿以前の歌人　柿本人麿　山上憶良　山部赤人　赤人前後の歌人　大伴家持
其の一　柿本人麿以前の歌人……九八
其の二　柿本人麿……一〇〇
其の三　山上憶良……一〇八
其の四　山部赤人……一一四
其の五　赤人前後の歌人……一一九

其の六　大伴家持……一二一
第四章　散文……一二八
第一節　散文界の概況……一二八
歌文の發達を異にせし所以　宣命　修史　風土記及び氏文
第二節　宣命……一三一
名稱　其の作者　書方　性質　語　儀式　文武天皇の宣命　宣命中の傑作
第三節　修史……一三九
修史の由來　稗田阿禮『古事記』の編修　太朝臣安萬侶『古事記』の文体並びに書方　其の文例　本書の性質
第四節　風土記及び氏文……一五二
風土記の性質　文体　作例　高橋氏文
第五章　片假名及び印刷術……一五八
假字　漢字の特質　片假名の製作せられし由來　五十音圖　吉備真備　印刷術

第三期　平安朝の文學
第一章　總論……一六四
年代の範圍　平安朝文學の概況　言語
第二章　社會の概況……一六七
皇室と藤原氏と　縉紳華奢の風　地方の騷擾　男女の戀愛　佛教　漢學
第三章　平假名……一七九
平假名製作の由來　僧空海　いろは歌
第四章　歌謳……一八二
詩賦の流行　和歌の勅撰『古今集』の撰進　其の歌思及び歌体『萬葉集』との比較　歌序　歌人『古今集』以後歴代の勅撰歌集　歴代勅撰歌集の合評
其の一　『古今和歌集』……一八九
其の二　重要なる歌人……二〇三

其の三　『古今集』以後歴代の勅撰歌集……二二六
其の四　古今集以後重要なる歌人……二四一
第五章　散文……二五〇
第一節　總説……二五〇
宣命文　假名書の文章　歌序の文　日記及び紀行の文　物語の文
消息の文　草子の文　歴史の文　飜譯の文　説明の文
第二節　物語の文……二五七
小説的物語　史的物語　『竹取物語』『伊勢物語』『空穗』『落窪』等の物語
『源氏物語』其の餘の物語
其の一　紫式部以前の物語……二六一
其の二　紫式部……二七三
其の三　紫式部以後の物語……三一一
第三節　歌序の文……三一八
歌集の序　歌の小序　『古今集』並びに『大堰川行幸和歌序』其等の文

跋　『古今集』以後諸歌集の序
第四節　日記及び紀行の文……三二二
日記と紀行と　『土佐日記』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『更科日記』
『讃岐典侍日記』
第五節　草子の文……三三五
草子と隨筆と　清少納言　其の閲歴及び性行　『枕草子』其の略評
第六節　歴史の文……三四六
史的物語　『榮花物語』『大鏡』『水鏡』『今鏡』『宇治大納言物語』
第四期　鎌倉時代の文學
第一章　總論……三六三
年代の範圍　鎌倉時代に於ける文學の概況　言語文章
第二章　社會の概況……三六六
武門並びに皇室　鎌倉武士の質樸　京都縉紳の奢侈　武士道　佛
教の復興　漢學の衰弊　擬漢文

第三章　歌謳……三七七
第一節　歌界の狀況……三七七
歌謳の奬勵　『新古今和歌集』の撰定　其の歌思及び歌林　『新古今』以後の勅撰歌集　家集及び歌學の書
第二節　當期の重要なる歌人……三八九
西行法師　藤原定家卿　全家隆卿　源實朝將軍　花山院爲兼朝臣　二條爲世朝臣
第四章　散文……四二〇
第一節　散文界の概況……四二〇
鎌倉時代に於ける散文の特質　佛教思想若しくは厭世的觀念　武士道並びに儒學思想　文詞の進歩　作者・著書
第二節　物語附消息文……四二七
小說的物語の衰微　『秋夜長物語』『鳴門中將物語』歷史小說　『法經記』『曾我物語』
第三節　隨筆……四四一

鴨長明　其の閱歷性行及び著作　『方丈記』『發心集』と『發集抄』と　佛教思想並びに厭世的觀念　『沙石集』
第四節　雜史……四五五
雜史の變遷　擬古林雜史　軍記物語の流行　『保元』『平治』『平家』の物語等並びに『源平盛衰記』
節五節　日記及び紀行……四七五
『辨內侍日記』並びに『中務內侍日記』源光行の『海道記』と其の子親行の『東關紀行』と
第五期　室町時代の文學
第一章　總論……四八一
年代の範圍　室町時代に於ける文學の概況　言語文章
第二章　社會の概況……四八五
南北朝の兩立　應仁の亂　戰國　將軍及び諸侯の奢靡　士民の困弊　武士道　宗教及び教育

第三章　歌謳……四九八
第一節　歌界の概況……四九八
歴代の勅撰歌集　和歌の衰微　連歌の發達並びに流行　謠曲の創刱
第二節　重要なる歌人……五二六
頓阿法師　和歌の四天王　宗良親王　東常縁
第三節　重要なる連歌師……五三八
當時高名なる連歌師　二條關白良基　宗祇法師　荒木田守武及び山崎宗鑑
第四章　散文……五五八
第一節　散文界の概況……五五八
第二節　草子……五六〇
『徒然草』　吉田兼好　兼好の經歴並びに性行　『徒然草』の性質及び文體
第三節　正史並びに雜史……五六八
『神皇正統記』　源親房　『增鏡』　『太平記』

第四節　御伽草子……五八一
絵卷物の發達　御伽草子の材料並びに趣向　『横笛草子』の梗概　御伽草子の性質　草双紙の萌芽　物語類
第六期　江戸時代の文學
第一章　總論……五八七
年代の範圍　江戸時代に於ける文學の概況　言語文章
第二章　社會の概況……五九二
政治上の異動　武士道　俠客　元祿の奢侈　元祿以降の困弊　佛教耶蘇教及び神道　漢學國學並びに洋學の振興
第三章　歌謳……六一一
和歌の復興　國學の研究　古書の註釋　狂歌　俳諧の變遷　其の流行
第四章　散文……六二三

日本文學史目次完

日本文學史

池谷一孝講述

總論

第一章　文學史の要務

文學に關する諸說　思想感情及び想像の變遷　文學に影響を及ぼすもの　人種　境遇　時勢　個人　文學史の要務

日本文學史を講述するに當りてまづ文學史の定義を與へ文學史の定義を與ふるに先だちて文學の何物たるかを簡單に說明せんとす。蓋し本書を講了する頃には讀者はおのづから文學の何なるかを解し文學史の如何なるものなるかを知了するに至るべきは勿論なり。然るに尙之れが講述の當初に於て其の解釋と定義とを與ふる所以のものは豫め讀者をして本書の講述すべき事柄の大要を會得せしめみづから以て攻究の準備を爲さしめんがためなり。

さて文學といふ辭は古より廣く世に用ひられ輓今に至りては往々通俗の談話に

も此の辭を耳にするほどなれば苟も文字を解する程のものは誰人も其の意義を解せざるものなきが如し。然れども若し其の正確なる意義は如何にぞと問へば却つて不明にして古今東西の有名なる學者も未だ曾て文學の絶對不易なる定義を與へたるもの絶えて無かりき。之れを西洋に徴すれば其の昔遠く羅馬の學者タシタスが希臘文學といふ句を以て希臘文字の形をあらはさんが爲に用ひクインチリアンが文法を文學と呼び又シセロが廣く學問の意義に此の辭を用ひたりしを始めとして近くは英國の史家ストッホード、ブルックが「文學とは聰明なる男女の思想及び感情を秩序よく記述して讀者を娛ましむるものなり」といひ或はトマス、アヽノルドが「文學とは特殊の社會を爲したる人にのみ訴ふるにあらで總べての人々に與ある主題を採り唯事物の符號としてのみに詞を用ひず思想を傳へ且表彰するものとして詞を用ひ普通の智情に訴ふるもの是れなり」といへるに至るまで文學の定義を與へたる學者古今其の人に乏からず。然りと雖も其の與へたる定義は何れも一時代の文學的現象に偏せされば一國のに僻し古昔の文學的領域を蔽ふかと見れば必ずしも今日の現象を盡さゞるところあり。今姑く上に掲げたる諸家の

定義を査究せんにタシタス。クインチリアン及びシセロ等が與へたる文學の意義の不完全にして到底今日の事實に適せざるは勿論ブルックの解釋アヽノルドの定義はた古代の社會には適せざるなり。それ科學と文學と各〻其の領域を分かちたるは萬事分業の行はるゝ近代の現象にして古代の社會には絶えて此事あらざりき。故に古代の社會には今日の如く文學中の文學なりと許さるゝ詩歌さへもブルックが云へるが如く啻に娛樂にのみ供するに止まらず。又アヽノルドが云へる如く普通の智情にのみ訴ふるものにもあらず。快樂に供すると共に或は教誨と啓發とを兼ね而も往々特殊の社會を爲したる人にのみ與あるべき植物學若しくは星學若しくは形而上學に就きて其の詩題を採擇しき。希臘の哲學者エンペドクルスの『理學詩』の如き又はプラトーの『問答誌』の如き蓋し是れなり。然ればブルック。アヽノルド等の定義の當らざる以て想見するに足らん。否當らざるもの啻にブルック及びアヽノルドに限らず。古往今來文學の絶對不易の定義を與へんと試みたる學者は皆一樣に失敗の歴史を反覆するに過ぎざりき。之れを支那及び我が日本に見んか。支那は早く古代より學術文藝の開けたる國なれば隨ひて文學といふ辭もまた早

くより用ひられて史籍の上に散見せり。然れども其の正確なる意義に至りては彼の國にてもまた一定せず。或は古聖先王の道を講ずるを以て文學の本領と考ふるものあり。或は文章技藝を以て其の本分となすものあり。我が邦にありては武に對して文といへるが如く單に學問を指して文學と心得るものあり。而して其の中には支那の學說を繼承し治國平天下の術を講ずるを以て文學の要務となすものと詩歌小說のみを以て其の本分となすものとの別を含むが如し。要するに我が邦に在りても又支那にありても文學といふ辭の中には記錄若しくは言辭の快樂に供するものと敎誨又は啓發に供するものとを包羅する極めて漠然たる意義を表明するに過ぎず。然れば文學の意義の一定せざるや古今東西其の揆を一にすと謂ふべきなり。

斯の如く文學といふ辭の意義は一定せずと雖も凡そ文學は其の目的と其の方法とには異論あるにも拘はらず。所詮人間の思想感情若しくは想像を或目的の爲に或方法によりて攄べたるものなるや明らかなり。或男女が天地山川に對する、動植物に對する、社會に對する又は一個人に對する感想を發表したるものなり。

然るに其の思想感情及び想像は常に感觸する事物が心裡に生ずる映象の如何によりて變化し行くものなればひとり人によりて異なるのみならず。おなじ人にありても境遇の異なるに隨ひてまた其の趣を異にするものなり。換言すれば內外の森羅万象は互に因となり緣となりて常に個人の思想感情及び想像の上に幾多の影響を與へて此等のものゝ變動を喚起するものなり。故に此等の思想感情及び想像に依賴する文學も亦常に諸因緣の如何によりて特殊の現象を呈するは當然なり。佛の學者テーンは其の文學に及ぼすべき影響を大別して三個の勢力に歸したりしが英のアルフレッド、エルシエは更に一個を加へて四個の勢力なりとなしぬ。即ち四個の勢力とは人種境遇時勢個人を謂ふ。

第一人種　人種とは或一國民が其の躰軀と共に祖先より遺傳繼承せる獨特の氣質を指せるにて世に之れを國躰國風若しくは國粹といふ。我が大和魂の如きは即ち是れなり。是は人間の發生以來幾千百年の間養成し來りたるものなれば世を易ふるも消滅することなく地を移すも失ふことなく其の人種のあらんかぎりは常住不滅の痕跡を永く人心の上にとゞめて一國民を結合する無形の綱索とな

り殊に一國の文學を他國の文學と分別する主要の目標たらしむ。

第二境遇　然れども人の生を受けて此の世に在るや獨り存するものにあらず。常に諸〻の現象によりて圍繞せらるゝが故に生存の必要よりして四周の事情に適應せんと務む。故に人は天地山川氣候動植物社會制度等およそ周邊の事情又は境遇によりて多少の影響を蒙らさる事なき能はず。

第三時勢　時勢とは當代の精神氣風等をいふ。もと此のものは人種及び境遇といふ內外二個の勢力の互に相因緣して生じたる結果に過ぎざれども一度此のものゝ生じたる時は人は皆其の上に立ちて働かざるを得ず。故に人間の思想感情及び想像は幾何か當代を貫通する精神氣風の支配を受けざるを得ず。

第四個人　以上の三勢力は常に人心を支配して止まずと雖も人によりて是等の勢力を感受すると一樣ならず。隨ひて其の反動力もまた表彰力も一樣ならざるなり。世に謂ふ所偉人傑士若しくは大文豪は最も著く個人の現はれたるものなり。

以上の四大勢力は互に因となり緣となり果となりて孰れの時孰れの處を問はず

すべて人間の製作物殊に文學の上に莫大の影響を與ふ。而して是等の勢力の人心の上に活動するや其の一部を異にする時は其の文學をして全く相異りたる風姿を有せしむるに至る。是れ各國の文學其の形質を別にし又過去の文學現今のと其の趣を異にする所以なり。

文學史は是等の殊別なる文學の現象を稽査して其の變遷の因緣を蹤跡するものなり。此の故に制度文物等すべて社會の外部に現れたる事物の變遷を敘述するに止まる客觀的歷史に對しては主觀的歷史とも名づくべく一國民の思想感情及び想像の變遷を推究するものなり。蓋し人の思想感情及び想像の現れたるものはひとり文學に限らず。繪畫、彫刻、建築等美術に關するものは勿論、宗教の如き其のものの尠からずと雖も文學は人間生活の全部を最も敏活靈妙に表明するものなれば其の國民眞正の發達變遷を知らんとせば之れに若くものなかるべし。

文學史の要務果して斯くの如しとせば正當に一國の文學史を稽査せんとするものは將に人間心裡の堂奧に立ち入りて其の國の文學を組成する所以の事情は如何なるものなるかまた其の人種境遇時勢個人の如何なる由來及び關係が之れを

生するに至りしかを探討推究し或は天地山川の狀勢風土氣候の變化を詳述して其の國文學の特質に論及し或は國民の系統風俗習慣を尋ねて時文の精神を明らかにす。まかのみならず制度文物の變遷各時代の精神各偉人の事業等苟も人心に影響を與ふべき萬般の事情は其のものが社會の外部に表れたると否とに拘はらず仔細に稽査して文學上に及ぼせる關係を詳敘せざるべからず。然れども斯くの如き事豈に成し易からんや。況や客觀的歷史すら尙充分ならざる今日に於てをや。されば予が日本文學史を講述せんとするに當りても亦初めより斯かる重大なる望みを抱かず。唯日本文學の上に現れたる精神的現象(思想感情及び想像)の要領を敘述せんと欲するのみ。故に講說するところは重に其等の點にありと雖も而も因緣果の三つのものは各別に引はなして討究し得べきものにあらざれば時に或は其の關係あるものに涉ることあるべし。殊に詞意と詞形とはさながら心身の如く必然的に相關聯するものなれば又必ずしも一方をとると共に他を捨てざらんとを期す。

第二章　地勢、人種及び年代の區分、

江山の風景　動植物の美　人文の發達に適する國土　日本人種の特性　文學史年代の區分

我が日本國は到るところ江山の美あり。先づ北海道より起る樓牙たる山脈は東山道に移りて美濃飛驒の堺に盤踞し遂に畿內を過ぎて二派に分かれ蜿蜒として一は山陰山陽の間を馳せ直ちに九州に至り一は南の方紀伊に赴き四國の諸山を成せり。其の他小支派の諸國に崛起するものまた枚擧するに遑あらず。其の古生紀山派に屬するものと火山質山派に屬するものと互に相交錯して名山奇巖を點出しおのづから天工の壯美を誇るに似たり。特に富士の山は名山の標準として人の嘆賞するところ噴火口今は瀲灩たる鏡湖をたゝへて太古の雪消ゆる時なし。蓋し秀麗の氣此處に鍾りて自然の妙工を盡せるものか。古往今來風懷を寄せしもの幾人ぞ。此の山あるによりて敬神の念を鞏固にせしものと愛國の志氣を涵養せしものと天來の詩思を發展せしものとはた尠からざらん。寔に我が邦人が美術の念に富み自然美に對する觀念の更に他の邦人に優れるも想ふに是等の山のあるによるめり。況や溪水の流れは碧玉を瀉ぎ江河の浸蝕は巖石の上に

神斧の奇跡を留むるをや。尙況や諸種の植物盛に發育し芳草異木薜苔の類に至るまで其の數鮮からざるをや。一度陽春に向ひ梅花先づ香を送れば百花爛熳として開き互に其の艶を競ふ中に就きて櫻花は特に日本の花として其の美名世界に鳴り邦人以て我が心となせり。若しそれ夏に至りては卯の花の雪を欺き濁りにまぬ蓮の花、葉におく露さへ玉と見ゆるなど少からぬ景致あり。秋の八千草菊の花、花よりあかき櫨紅葉、冬の水仙寒紅梅若しくは常盤樹の翳鬱として其の間を點綴する何れも審美の心を養ひ詩興を促かすに足れり。更に尙景物の俊逸なるものを求むれば或は淡霞を穿ちて童子の菜畦に胡蝶を趁へる或は萬頃の新秧翠綠を連ぬるうちに一點の白鷺悄立する或は夕陽西山に春かんとして餘照暮雲に映ずるの際塒に急ぐ烏の三々五々相連りて樹林を求むる或は孤猿の寒月に叫ぶ或は旅雁の友をまたひ、山の鹿（カセギ）の妻呼ぶ聲、更科の月、比良の雪數へ來れば四季折々の風物賞すべきもの極まりなく優婉なるあり凄絶なるものあり奇なるもの雅なるもの交互相踵げり。想ふに我が國の地勢たる幅狹き島山にて北より南に亘り其の長さ千餘里西北は大陸の寒風に觸れ南は黒潮の温氣を受く。加ふるに國內各處に高山崇峰の聳ゆるありて氣候の差異獨り南北の兩端によりて異るのみならず同一の位地にありても高低にしたがひて温度を異にす。此の故に多種の植物の發生に適し又多種の動物の生育に適し殊に人文をして發展するに適せしむ。

そも〳〵熱帶の地方は動植物の發育速かなるを以て人民の生活隨つて容易なりと雖も氣候温熱に過ぐるが故に怠惰に流るゝ傾きあり。又寒帶の地方は衣食の道に乏しきのみならず氣候寒冷に過ぐるを以て心身共に萎縮するの弊あり。ひとり温帶の地方のみは兩者の弊を免れて能く其の中を得。動植物の發育は以て人民の衣食を給するに足り氣候の温和は以て心身を活潑ならしむるに足れり。然れども若し國土の位地地平線的に連亘する時は寒暄の差異少く隨つて動植物も一樣なるか故に人文の消長に關すること尠からず。故に温帶の地方に在りても縱線的に延長するものこそ最も多く諸種の變化に富みて人文の發達に適するものなれ。我が邦の如きは即ち是れにて氣候海流風位動植物の變化悉く其の宜きに合ひ土地また肥沃古より瑞穗の國の稱あるにても明なる如く米穀の產出甚た

多く且地中には金銀銅鐵石炭等凡百の鑛物を藏めて人工の要材一も欠くることなく海中には夥多の魚介あり捕るに任せて人民の食料を供せり。是を以て人は衣食の資に追はれて萬事を抛棄せざるを得ざる憂ひなし。されば天與自然の產物は座して獲らるべきにあらざれば怠惰に流れしむるに至らず唯相當の勞苦を以て得んと欲するものゝみ能く裕かに之れを收むるを得べし。されば生活の狀態は目下の衣食を給するに餘りありて人智特に文學の發達に最も必要なる條件と認められたる閒暇と金錢とを併せ有するを得。自然美に富むところ多くは生活の簡易なるところなりとはいへども天下また我が日本の如きあらんや。

美國の名實に當れるかな。

まかく我が邦は天地山川の美を有しかねて生活の狀態其の宜しきを得たり。顧みて我が邦人は如何にといふに是れはた此の美國の人たるに耻ぢず。萬世一系の皇統を戴き敬神忠君の念に富み氣質快活智力豐富にして美を愛し文學を好むことさながら天禀の性に基けるが如し。其の昔國いまだ開けず天神なほ高天原にいます時すでに歌を詠ぜしもの史に見えたり。而して爾來殆ど三千年時に盛衰あり物に興亡ありて文學はた多少の波瀾屈折なきにあらずと雖も未だ曾て絕無の世を見ず。蓋祖遠考より繼承せる好尙は自然の絢美に養はれて一層の光彩を放ち以て今日に至りぬ。是より講究せんとするは即ち其の間に於ける我が文學の變遷なり。講述の便宜に從ひ其の年代の區分を爲すと次の如し。

第一期　奈良朝以前の文學　神代より始まりて崇峻天皇の御世を終ふる頃までに至る。此の期の文學として史に見えたるは和歌及び祝詞の類なり。共にいまだ外國文學の影響を受けざるが故に文質何れも素樸にして幼稚なるを免れず」

第二期　奈良朝の文學　推古天皇御即位の頃より桓武天皇都を平安に遷したまふまでをいふ。漢學佛敎の影響すでに見えて和歌極盛の時期なり。散文には宣命及び敘事の文あり。

第三期　平安朝の文學　桓武天皇平安遷都の頃より後鳥羽天皇の御代[illegible]朝右府、府を鎌倉に開きて政權武門に遷る頃までを含む。名媛才女頻に出でゝ世は華さに散文隆盛の時期なり。和歌また見るべきもの少からず。

第四期　鎌倉時代の文學、頼朝右府の頃より後醍醐天皇の御代尊氏將軍の頃

までをいふ。佛教の影響漸く著く和歌散文共に多少の厭世的趣味を帶び漢學の影響また少からずして文躰の變革いちぢるし。戰記物語隨筆の類あり。

第五期　室町時代の文學　尊氏將軍の頃より後陽成天皇の御時德川家康公大將軍となりし頃までをいふ。此の期の文學は多く緇流の手に成りしとて佛教思想を含むと極めて多し。謠曲連歌御伽草紙の類大に行はる。蓋し平民文學の萌芽は此に兆せり。

第六期　江戸時代の文學　家康將軍の時より始まりて孝明天皇の御代前將軍德川慶喜公大權を奉還し王政復古する時に終る。和學漢學共に古學說を攻究するもの多く儒教の道德主義榮えたり。各種の文學一時に發生して社會上また各種の階級擧つて文學を有せり。特に平民の手に移りしもの最も隆盛を極めしは日本文學史上空前の事なり。

第七期　維新後の文學　慶喜前將軍大權を奉還せしより以來明治今日の文學をいふ。佛教漢學のみならず泰西學術の影響を受くること甚し。

以上年代を以て區劃を定めたれども文學の變遷は必ずしも斯の如く截然として區劃あるものにあらず。若し仔細に其の特質を比較して區分を立てたらんには以上の區劃の中にても又數期に分かるゝものあるべし。然れども予は通常世間に呼び馴れたる政治上の區分に從ひて其の大躰の變遷に依れり。是れ區分の細小に過ぐるは却りて煩雜の憂ひあるとまた斯かる小區分はおのづから本文を攷究し行くうちには知らるべきを信ずればなり。

第一期　奈良朝以前の文學

第一章　言語

語系　國語と國文學との關系　上古の正確なる言語は知り難きと　上古言語の特質　我が邦言語の變遷を少なからしめたる理由

我が日本語の形質を研究して其の語系を辨明するは言語學の領域にして文學史の關聯するところにあらず。況や言語學の發達いまだ不完全にして我が國語に關する精細なる定說なきために之れを揭ぐるとの更に難きをや。之れをウラル、アルタイックと稱する一大語系の中に列すべきものとするも此の語系の區域は極めて廣大にして蒙古を始め朝鮮、滿州、土耳古、芬蘭、匈牙利等殆どすべて亞細亞諸州を包容するものなれば之れのみにては尙茫漠として摸索すべからず。之れを支那語若くは朝鮮語に屬すべきものとするも其のたま〳〵類同するところあるは彼我の交通ありて後に生じたる結果なるやも知るべからざれば必ずしも我が國語の根源を彼等の國語に歸すべからざるや勿論なるべし。此の故に予は我が國語

が何れの語系に屬するやを究めず唯高天原より傳へ來れる神代ながらの言語なりといふに止どめ。さて其の特質の著明なる點を擧げて上古より今日に至れる言語の變遷の次第をば簡略に語るべし。之れ國文學の形質は其を形成する所以の要具たる國語の形質に負ふところ尠からずと信ずればなり殊に言語と文章上の用言と未だ乖離せざりし時代の文學に於て然り。彼の雅醇なるは此の雅醇なるに基き此のものゝ平板なるは彼のものゝ平板なるを致す。就中詩歌の形を決定するものは此の國語の形質にあり。即ち英詩の形を決定するものは英語にして漢詩の形を決定するものは漢詩なるが如し。まかのみならず言文の離合も亦此の國語の形質に存するなり。故に予は先づ國語の根源たる上古の言語より序を追うて之れを講せんとす。

然れども改めて我が上古の言語は如何にといふに至りては予は其の正確なる智識の得がたきことを憾むなり。そも〳〵其の世の言語を載するもの古事記及び日本書紀の如き貴重なる史書なきにあらずと雖も此等の書は何れも上古を距ること遙かなる後の世に出でたるものなれば縱令其等の著者は語部（かたりべ）と稱する職にあり

けるものか往昔より語り傳へたる言語のまゝを書き覓めたるものなりとは云へ永き年月の間には誤りつたへたるも多かるべく又は著者が意に任せてわざと改竄したるも尠からざるべし。是は同じかるべき歌の記紀によりて異れるにても容易く推しはからるゝなり。故に是等の書に錄したる言語を讀みてやがて當代の語氣を其のまゝに寫しいだせる正確なる言語なりとは云ふべからず。然れども其の世の言語を知らんと欲せば是非とも是等の書による外はなく又其の錄するところとても强ちに輯錄したる當時にのみ行はれたる言語なりとも限らざるべく幾何か神代ながらの語氣を存せるもあるべければ採りて其の概略を窺ふ料にはなりなん。讀者唯其の心して見るべきなり。先づ古事記の中より抄錄して今日普通に用ふる言語と幾何の差ありしかを見ん。

こゝに須佐之男命其の河上に人ありけりと以爲して尋覓上り往ましゝかば老夫と老女と二人ありて童女を中に置ゑて泣くなり。汝等は誰ぞと問ひ給へばその老夫僕は國つ神大山津見神の子なり。僕が名は足名椎。妻が名は手名椎。女が名は櫛名田比賣と謂すと答す。亦汝の哭くゆゑは何ぞと問ひ給へば我が女はもとより八稚女ありき。こゝに高志の八俣遠呂知なる年毎に來て喫ふなる。今それ來ぬべき時なるがゆゑに泣くとまをす。其の形は如何さまにかと問へば彼が目は赤加賀知なして身一に頭八尾八あり。亦其の身に蘿また檜榲生ひ其の長谿八谷峽八尾に度りて其の腹を見れば悉に常血爛れたりと答す。

（此の赤加賀知といへるは今の酸漿なり）

是れはこれ須佐之男命が天神の勘氣を蒙りて高天原を追はれ遙かに出雲の國なる肥の河上に降りける時に國神足名椎といふものに逢ひて應答し給へる言語なり。素より古語の一斑を示すに過ぎざれば讀者或は其の全豹を察するには難かりなん。尙其の他を參照して考覈するに上古は言語の發音今日に異りていとも正しく今日の人か辨別するを得ざる隱微なる差別さへ咿かも混亂するとなく分明にものしたるが如し。堀秀成翁曾て其の著書『言靈妙用論』において上古の言語の雅しかりし證を擧げて伊以章有宇衣延慧於遠の十音は五十音の中にて其の差別甚だかすかにて今日の世となりては曉りがたきものなるを古へはいさゝかも亂るゝとなくいと明白なりしとは古書共に假字用格貫きて一つも紛はしきと少

きを以て辨ふべし。又仁賢天皇顯宗天皇は御同胞にましますに兄御子を弘計王弟御子を袁計王と申奉り開化天皇の皇女御同胞にて意祁都比賣、袁祁都比賣と申奉る。此等今世の如く言語みだれ音聲訛りたる上にては弘計王と申奉るも袁計王と申奉るも全く同じ言の如く聞えていとも紛はしきものなるを古へ常の言語の上に此等の差別いと正しく分れたればこそ御同胞の御兄弟にてかくの如く申奉るもいさゝか紛れなかりしものなれ。是を以て其の世の言のたゞしかりしを推しはかり思ふべきことなりといひけるも實に理りにぞありける。されば又隨ひて其の世には活語の格助字の法おのづから定まりて亂るゝとなく音便拗音半濁音又は濁音及び入聲の音を頭とせる變音は一つもあるとなく何れも原形のまゝの言語にてなか〳〵に直く正しく優美なるものなりき。加ふるに文章上神名人名國名等の固有名詞には殊更に枕辭を冠らせ序詞を加へ若くは對句疊語を置きて一層優美なるものとならしめたり。遮莫上古には人智いまだ精微ならず事物を仔細に判別すること能はざりしかば萬の事にも物にも細かなる名稱を附けずして事足りき。故に言語の數の少かるべきは自然のことわりにて到底複雜なる感想を表明するに足らざりき。是を以て漢學渡來せしのちとなりては呉漢の語忽ち輸入せられ佛法流行する世となりては梵語甚しく加はりぬ。是に於てか我神代なからの原形の言語は稍〻其の趣を異にせりと雖も第一期にありては尚いまだ其の語格を變ぜんまでには至らず能く外國の言語を融合して我がものとなし之れを句中に挾みても別に異樣なる感を惹きをこさしめざりき。然るに其の期の末つ方に至りては漢學佛法の隆盛既に久しきに亘りかねて朝庭には務めて是等を奬勵する傾きありしかば漸く漢文を以て物かく風も起らんとす。

第二期以下の世となりての言語は第一期のゝ發達增進して成りたるものなれば稍〻異りたるところあるは勿論なりと雖も而もまた第一期の言語中に含まれたる特質を有したるや云ふまでもなし。例へを設けて云はゞ千百年を經過したる松柏の如し。外形は年につれて變れども髓は長へに同じ。前に掲げたる古事記の一節に就きて之れを見るに今を距ること既に三千餘年に渉れば其の言語の今日の言語に同じからぬは云ふまでもなく特別に古學を研究したるものにあらずばさながら外國語の挿入せられたる文章を讀むが如き心地すらん。是れ世と共に幾

何の發達變遷ありしによれると上にいへるが如し。然れども我が邦は建國以來人種の移動絶えてなく而も中古に至り萬事漢文にものする習ひとなりておのづから古語は廢れ行く世となりても天地の神祇を祭り給ふ祝詞又は朝廷の儀禮公事その他の重大なる事柄を書かしめ玉ふ宣命の如きに至りてはさすがに尚上古の文章を用ひ玉ひしと後世に至り古文を摸擬するとの行はれしとによりて神代ながらの言語弘く一般に行きわたりしかば此等の事なかりし諸外國のに比べては我が邦の言語は變遷少きものなるべし。尚委しき事はまた他の章において叙ぶる時あればとて今は略しつ。さて今前に掲げたる言語の中に就きて全く今日の俗語に異れるものを擧ぐれば「てにをは」と固有名詞とを除きては僅かに以爲、尋覓、往まし、老夫、老女、童女、汝等、僕、妻、八稚女、遠呂知、赤加賀知、なして(如くにて)、峽八尾、悉、爛等の十六言に過ぎざるなり。否是等の中にても通常今日の俗語にこそ用ひぬ普通の文章中には往々散見するものもあれば全く廢語となれるは尚鮮し。又其の廢語となれるものも強ちに上古にのみ限りて用られたる言語にもあらざるなり。

第二章　上古文字

上古文字の有無に關する先哲の所説　外國との交通　漢字神代文字

前章に於て予は國文學と國語と相渉る所以を述べて我が邦上古の言語の特質を略陳せり。顧みて此の言語を有形に表彰する文字の有無は如何にといふに古より學者の所説區々として一ならず。今其の中に就きて重もなるものを擧ぐれば或者は古語拾遺の序に「蓋し聞く上世の世には未だ文字あらず貴賤老少口々に相ひ傳へ前言往行存して忘れざりき」とあるを根據として專ら上古の世には文字なかりしものなりと唱へ或者は釋日本紀の「和字は其の起神代に在るべきにや此の紀一書の説に天神太占を以て之れをトへ給ふと。文字なくば豈トをなすべきや」といふ語を引證して其の世にも尚或種の文字ありきと主張す。而して有字論者は古語拾遺の序に文字といへるをば漢字の事なりと説きておのが所説を破らざらんと務め無字論者は古へ中臣氏が慶言を奏するに語部と稱する職にあるものに任じて文字に頼らざりし事あるを引きて自説を固うせんとせり。其の外神代

文字こそ上古の文字なれといふ有字論者又は其の世に出來し典籍あらざるこそ文字なかりし證據なれと云ふ無字論者共に或は上古の風俗より或は諸〻の傳說より種々の說を立てゝ相爭へり。今一々に是等の雜說を羅列せんはいとも煩はしく且はさまで文學史上に益ありとも覺えねば大方は略しつ。何とならば古來の學說さかく多端なりといへども要するに孰れもひとしく臆說に過ぎずして明確なる徵證あるにあらず。其等の紛然たる雜說を揭げて紙面を埋めんよりは寧ろ直に有無の判定をなすの優れるに如かざればなり。

我が邦神代は百事創搨に屬せりと雖も高天原より降りし民族はすでに鐵材を使用して劍戟家財の類を製作し木材を採りて高屋を築き舟檝を修めて航海の用に供へたりしと史に見えたれば早く山野に獵し河海に漁りてのみ其の日を送る所謂水草移住の俗を脫して耕耘稼穡する文明の或階級に達せりしが如し。降りて人皇の世となりては更に其の見るべきものあり。專ら神祇を敬し祖考を追憶し或は意を民治に注ぐ等人智の發達を證せざるはなし。殊に神代の詩歌として今に傳はるものゝ殆ど皆想戀の情を寄する優美の作にあらざるなき一事は明らかに當時世の中太平にして生活に餘裕ありしことを想はしめ隨うて文事にもおのづから心を用ひしことあるべきを想はしむ。これ蓋し高天原より降りし民族が天稟の特質なるべしとはいへどもまた大陸に隣接して早く周末の文明を呼吸したる三韓と交通ありし結果に依らずんはあらず。按ずるに我が邦と三韓との交通は須佐之男命の新羅に到りしを始として鵠鷲草不合命の皇子稻飯命の彼の國に到りて王となりませる又は孝靈天皇の御頃にや新羅の皇子天日槍の歸化したる崇神天皇の朝に任那の使蘇那曷知といふものゝ來れる其の他なほ我が國史にもれて彼の國史に見ゆるもの少からず。然るに三韓には既に支那の學術を傳へて制度文物の稍見るべきものありしかば彼の國々よりまた其を我が邦に傳へたりしと明らけし。況や我が邦と外國との交通は單に三韓に止まらずして遙かに支那に及べるものあるをや。蓋し上古は政事粗大にして邦人のひそかに外國と交通するとを禁ぜざりしかば開化天皇の頃或は景行天皇の朝などには僻遠なる西陲に住する國造等私に交通したる由往々前後漢書等に見え又我が邦においても其の證となるべきもの後世に至りて發見せられたり。此の故に神功皇后の三韓を

征服したまひし頃までには三韓は勿論支那とも少からざる年月の間互に相往來したると疑ふべくもあらず。我が邦が早く文明に向ひしは此の交通にこそよりけめ。されば爭でか交通の最大要具たる彼の國々の文字のみを知らざる理あらんや。皇后攝政の三十九年に使を魏に遣はし後又晉に遣はして書を贈り玉ひしとあるにても分明に當時既に支那の文字を聯ね得しもの(たとひ歸化人なるかにせよ)我が朝廷にさへありしを知るに餘りあり。

然れども上古は教育の制定なく自然の播布に任せたる世の事なれば全國を通じて一樣なる文字を使用せんとは難しとする所なり。或は文字を知りたる地方もありしなるべく或は全く之れを知らざる民もありしならん。其の知れりし者の中にても或者は漢字を知り或者は他の文字を用ひ又或者は兩者共に知りたるもありしならん。所詮全國一樣の文字こそ用ひね。所に從ひて或種の文字を用ひしと其世のさまよりぞ知らるゝ。往昔より云ひ傳へたる神代文字と稱するものも或は其の世にありて或一部に行はれたる文字にてありしなるべし。

そも〳〵神代文字といふは即ち世に謂ふ日文(ヒフミアヤ)、天名地鎭(アナイヂヅメ)、秀眞(ホツマ)等をいふなり。當代の器物に刻せられたるもの稀に尙舊社古墳等より發見せられて今に傳はれり。字躰共に稍同うして恰かも今日の五十音の如く五の母韻と九の父音とあり。父母の音韻相結合して三十六の子音を構成す。而して其の字躰は朝鮮文字の諺文に似たり。そも是等の文字はわれより彼れに傳へたるか。彼れより此れに傳はりたるか。三上參次氏等の日本文學史にも此の事を論じて我が神代文字と朝鮮諺文との構造は全く梵字と同一方法なることを明かし。此の三種の文字は同一起源より流出したると疑ふべからずといひ次に年代の順序より考察して彼れより我れに是等の文字を傳へたりといふ結論を與へたり。想ふに神代文字及び朝鮮文字の起源を梵字に歸したるは至當の見解ならん。然れども年代の順序を考察しながら尙神代文字を諺文より出でたりと斷言したるは何の故ぞや。史に徵するに朝鮮文字の吏道といへるは彼の神文王の時始めて世に出でたるにて其の頃は我が持統天皇の朝に當れば之れより先きの代に出でたる神代文字を傳へたるいはれあらざるべし。まして諺文の始めて作られたるは其れより又數百年を經過したる彼の世宗の世にして我が後小松天皇の御代なるをや。神代文字の諺文

より來れるにあらざると想見すべし。さらば如何にして出で來りたるか。察するに其の昔一種の文字ありて神代文字と朝鮮文字との起源を爲し朝鮮にありては吏道となり終に諺文と變じ我が邦に在りては神代文字となりしものなるべし。語を換へて云はゞ是等の文字は是れより彼れに傳へたるにもあらず。又彼れより是れに傳はりたるにもあらず。同一起源より出でゝ二派に分かれ異樣の發達をなして此に至れるものなるべし。而して其の一種の文字は梵字ならんかなれども今日に於てはいまだ正確なる學說を得ず。殊に傳はりたる年處は共に明らめがたし。

かくの如く我が邦上古には神代文字と漢字と相並びて僅少の部落に行はれ未だ全國を通じて一般に通用したる文字はなきも是れといふ程の不都合も覺えざりしに三韓征服後彼我の交通愈頻繁に赴くにつれて文字の使用益必要を感ずるに至りけり。而して漢字は彼の國々にても用ゐらるゝものなれば彼我の交通を圓滑ならしめんには他の文字に比して一層適宜なるところあるが故に此の文字を使用すること日を追うて多きを加へぬ。且朝廷に於ては頻に漢籍を講習し諸〻の言事は悉く此の文字にのみ依りて記錄せられしかば其の勢は延いて全國に蔓衍し終に簡便なる假字の發明ありし時までは我が邦唯一の文字として通用せられしなりけり。

第三章　歌謠

上古文學の概況　最古の歌謠　短歌　長歌　相思の歌　國民的性格　贈答の歌　連歌　歌垣

諸般の歷史は元始に溯れば遂に暗黑の裡に沒了せらるゝ如く又たま〳〵摸索せられたる事實も到底茫漠たる概念を形成するに過ぎざる如く我が國文學の上古史も亦漠然たる智識を與ふるに過ぎざるなり。そは當時を錄する史籍の不完全なるに依るは勿論なり草昧の世の事なれば又傳ふべきほどの文學を欠けりしにも依れり。上古の文學として今日に傳はれるは只『古事記』と『日本書紀』とに散見したる歌謠及び『日本書紀』『延喜式』等に記載せられたる『ノリト』詞、『ヨゴト』祝詞の類あるのみ。孰れも概して散漫なる感想を發露するに過ぎず。されどもさすがに後世にまで傳唱せらるゝ程のものなれば特に其の秀逸なるものゝみや殘りたりけん又は傳

唱の間にあらず〳〵後世の風趣を帶ぶるに至りたるもありけん素朴なる言詞もやゝ面白く悉く諷唱するに堪へたり。されば是等の文學をとりてやがて全く原作のまゝなりとは信ずべからずと雖も尙深く味はゝ以て我が邦上古の人の感想の一斑を知るべく且我が國文學の萠芽は如何にして發生せしかを窺ふに足るべし。

さて史を按ずるに孰れの國の文學も其の淵源は多少律呂を具へたる詩歌を以て起らざるはなし。

支那に於てもヒブリウに於ても希臘に於ても人の感情若しくは想像を抒らしたるものは勿論、道德、法律其の他格物致知の學を解明する文章さへも皆律呂を具へたる歌謳ならざるはなかりき。是れ古代は印刷の器械は云ふも更なり文字だに未だ一般に通用せざりし世の事なれば必要にして記憶すべき事柄あるも記錄の傳ふべきものなきによりて口頭傳唱の便宜に從ふの外はあらず。而して言語の中にて最も傳唱の便宜に適するものは尋常の平板なる言語にあらず抑揚和諧するものにあり。蓋つて古代の言語のさまを考ふるに能く此の目的に合するものあり太古言語の初めて生ずるに當りては見るもの聞くものに就けて直に其の形色聲音を摸擬して之れを作りたり。然るに自然の萬象は其の聲色一樣平板ならずして抑揚變化極まりなきものなれば之れによりて作られたる言語も亦まかく抑揚變化に富むはおのづからなる理りなるべし。加ふるに古代の人は其の言語を發することゝ共して後世の人の如く巧緻ならず唇舌の運用迂緩にして且柔軟なりしこと、さながら嬰兒の初めて言語を習ふが如きものなりしかば、さなきだに抑揚多き言語は一層抑揚多きものとなりたり。古代の言語が其實に於ても其の運用においても抑揚變化に富みて律呂ある歌謳をなすに適したることゝ想ふべし。各國古代の文學が多少律呂ある歌謳を以て其の緒を開きたるも是等の故なるべし。

我が邦の文學も此の例には漏れず歌を以て其の緒を開きたり。すなはち須佐之男命が天より降りまして出雲の國簸の川上なる須賀（今の大原郡熊野神社の所在地）の地に到り其の妃櫛名田姫と相住まん料にとて其の地に宮室を營み給ひける時雲の立騰りたるを見給ひて「彌雲立つ出雲八重垣妻ごめに八重垣つくるその八重垣を」と詠み給ひし歌是れなり。是はやがてまた短歌の嚆矢とす。

或は曰ふ是れより先伊邪那岐命伊邪那美命天の浮橋の下に立ち御柱をめぐりて御面を合せ給へる時に伊邪那岐命先づ「嗟（アナ）にやしえおとめを」と呼ばせ給へば伊邪那美命「嗟にやしえおとこを」と和し給へるを和歌の嚆矢となすべしと、本居宣長、平田篤胤兩翁を始め近世の學者に至るまで概れ此の說に同ぜざるはなし。顧ふに和歌は見るもの聞くものにつけて自己の感情を詠出するものなれば歌の元始の狀態

に溯らば實意兩ながら甚だ簡單にして今日より見れば殆ど歌としも思はれざる程のものにこそありけめ。今二神の唱和を見るに尋常の言葉のさまにあらず嘆賞の感おのづから五音二句の中に籠りたれば前にいふ意味にては歌としも云はゞいふべし。

しかれども正確にいはゞ歌は如何に感情を詠出するものなりとはいへ是は餘りたゞごとめきたれば他の歌と並べては歌とは云ひがたくやあらん。「彌榮立つ」の歌に至りては詞形も詞意もやゝ歌たる本旨に協ひたれば和歌の始めとし特に短歌の始めとして學者の一致する所也。

短歌とは誰人も知る如く五音七音五音、七音五音の五句より成れる一種の歌躰にして通例數十句を重ねたる長篇の歌（即ち長歌）に對して云かいへるなり。是れを上下に分ち略して上の三句を上の句といひ下の二句を下の句と呼ぶ。短歌の格はおほむね是れに定まりて後世歌を讀むもの多く此に其の模範を採れり。然れども此の歌は歡喜の餘、咄嗟の間に成れりしものゝ習ひとて極めて漠然たる想像と甚だ單純なる情感とを反覆したる言詞の中に抒らしたるのみ。是れより六世を經て大己貴命（大國主神とも八千矛神とも又國作大神とも いへり、皆それ〳〵の功に依りて也）の頃に至りては疆土漸く拓け國威大に張り歸化する民さへありしかば智情も次第に其の域を擴め是れがために歌も言意兩ながら著き發達をなして稍〻深き想像の加はりたる長篇の歌も出でたり。例へば大己貴命が越の國（越前越中越後地方）なる沼河姫に婚せんとして出雲の國より彼處へ下り給ひ其の沼河姫の家に到りて

八千矛の　神の命は　八洲國　妻覓ぎかねて　遠々し　越の國に
賢女を　ありと聞かして　美女を　ありと聞こして　結婚に　在りたゝし
結婚に　あり通はせ　太刀之緒も　未だ解かずて　襲衣をも
（上代には男女ともに人に誰と知れぬ面貌を隱せり、襲衣は即ち其の料の衣服也）
板戸を　おそぶらひ推し　吾が立たせれば　ひこづらひ引き　吾が立たせれば
青山に　鵼は鳴き　さぬつどり（野鳥）　雉子は鳴く　庭鳥に　雉子は響む　にはつとり
（庭鳥に冠辭）　鷄は鳴く　慨くも　鳴くなる鳥哉　此の鳥も　打病めこせぬ
こせぬは希求の意　急飛ふや　天馳使　事の　語り言も　是をば

（一首の大意は八千矛神はいまだ大八洲國（即ち日本）に其妻を得ざるが故に路も遙けき越の國に賢にして美なる女ありと聞き給ひ之れに婚せんとして其の家門に到りつきて立てる間に鵼は山に啼かず、雉子は野邊に鳴かず、襲衣も いまだ除かず、刀も いまだ解かず、板戸を推しつ引きつして佩ける劍も いまだ除かずして明けなんとする長鳴鳥よ、汝は打病みて斃たてこそ希求の意なれ。急ぎ告げて鳴け。鳴呼如何にせん、此の一首甚だ急ぎ告げたしといふ程の意なるか解くもあり。）

どうたひ給ひしを始めとして沼河姫並びに須勢理姫（大己貴命の嫡妻）等の唱和し給へる歌どもを見ても知るべし。孰れも數十句を重ねて切なる戀愛の意を表し其の詞はた精細周到、對句をさへ巧妙に用ひたり特に須勢理姫の歌の中に

八千矛の　神の命や　吾が大國ぬしこそは　男に在せば　うち見る
島のさきゝ　搔き見る　磯の崎おちず　若草の　妻もたせらめ
吾はもよ　女にしあれば　汝をきて　男はなし　汝をきて　夫はなし

といへるは以て當代に於ける女子の心操を知るに足れり。是等を長歌の始めとす。

長歌は當時に在りては一定の格律なく只、句拍子をとりて諷詠に適せしむるに止まり今日の長歌の如く五音七音を繰りかへして更に其の終末に七音を添へて結べるのとは太く異れり即ち三音四音五六七八九音などありて其の音の數をば限らざりき。然れども大己貴命の御詠を始め五音七音の句多きによりても大かたは推察せらるゝが如く後世おのづから五七の音に定まるべき傾向はほのかに見えたり。又詞を重ね句を對して文を成せることも此の頃より始まりぬ。法かのみならず押韻の痕跡さへありげに見えたれば或は後世に至り我が邦上古の歌には既におのづから押韻の法具はりきと唱ふる學者もある程なり。（或學者の說に依れば和歌の韻の踏みざまに凡六種あり即ち一に同句なる脚とせしもの、二に同語なる脚とせしもの、三に同字、四に同韻、五に五十連音の行、六に同十く列の内にて踏みたるもの是れなり。其の中の一例を示さば「朝づく日向ひの山に月たてる見ゆ遠づまなもちたる人し見つゝしぬばむ」の「ゆ」と「む」との如し。是は連歌なれど長歌のもまた相同じき也。）さはれ所詮當時の歌は折にふれ事に應じて喜怒哀樂の實感を其のまゝに平生の通語の上に打出でゝ曲節を附したるに止まり、恰も今の俗謠の如く風姿の上にはさまで重きを置かざりき隨うて諷詠の容易なるべかりしは言を俟たずして明らかなり。

故に以上に述べたる神たちの外に天神國神にして歌を詠じたるものまた少からず其が中に下照姫（一名高姫命）の歌は『古今集』の序によりて殊に人口に膾炙せり。姫は大己貴命の御子にして天稚彦（アメワカヒコ）神の妃なり御兄を味耜高彦根（アヂシキタカヒコネ）神といふ。或時高彦根神其の友天稚彦の死を聞きこれを弔はれけるに天稚彦の父又妻、其の容姿さながら天稚彦に似たるを見ておもひ過ち「我が子は死なずてありけり我が君は死なずてましけり」といひて取縋りて哭きかなしみ給ひぬ。こゝに高彦根神は其の死人に比せられたるを怒りて歸り給はんとす。折柄下照姫は其の場にありけるが

是れを見て取りあへず

天在るや　美織女の　頸懸せる　玉の御統　御統瓊　嗟玉はや　眞谷　二亘らす　味耜　高彦根の　神ぞや

（一首の大意は天なる美しき機織女の頸にかけたる美麗なる玉の如くに光りかゞやきて二谷まで照亘る味耜高彦根神なるぞよとなり）

と詠み給ひて御兄の御名を顯はし諸神の疑惑を解かせ給へり。後世是れを夷振といふ樂府にて呼べる名稱なり。『日本書紀』に此の歌と並べ戯せる「あまさかるひなつめの」といへる歌の夷の言を取りて假に其の曲に名けたるに濫觴せり。（此の「ひなつめ」の歌は『日本書紀』に下照姫の歌と並べ戯せたれど下照姫の歌にあらず、たゞ上古の戯歌なるなり其の奏ぶる振の同じきものから誤りて同時の作として其處に入れたる也。故に「あめなるや」の歌を夷振といふは「ひなつめ」の歌に引かれたる名、「ひなつめ」の歌の共に戯れるは「あめなるや」の歌にひかれて出でたるなり。尚委しくは古事記傳を參照せよ。）此の一首の歌を除きては神代の歌はすべて單純なる男女相思の情を言表せり。おもふに相思の情は人間の自然にして且元始の美情なるものから歌の濫觴をこゝに開きたるも怪むに足らず其の情の單純質朴に止まりしは草昧なる世の致すところ是れはた當然の理のみ。

去る程に神武天皇東征の師を起したまひて既に五年、世は干戈に馴れて君臣共に武勇の氣象に富み人々敵愾の氣旺盛なるに至りては神武天皇の御製を始として諸々の詠歌ことゝく武的精神を帶び歌思やゝ一變したる趣あり。其の一例を示さば神武天皇登美長髓彦を討たんとして戊午の年（紀元前三年）十二月大和に入り先に孔舍衛坂の戰に皇兄五瀨命流矢に中りて斃し給ひしを想起し憤慨の情に堪へずして詠みたまはく

稜威々々し　久米の子等が　粟生には　臭韮一莖　其根之莖　其根芽繋ぎて　擊ちてし止まむ

（一段の意は武威するごき久米部等が伯父祖父の如く根なも芽なも一に合せて遺さずと根は登美彦に、芽は其の黨與に譬へて皆殲さず滅さず盡く討滅してむと云ふ意なり。）

に　植えし　獨椒　口疼く　朕は忘れず　討ちてし止まむ

（一段の意は武威するごき久米部等の垣の下に植えし獨椒の實を食へば後までも口の疼く如く朕は大御兄五瀨命の此の登美彦の痛矢串を負ひて崩れ給ひし事の慨きは何時までも忘れずあれば珍滅してむ。）

又同年十月道臣命神武天皇の密旨を奉じて盛饗を忍坂に設け虜八十建を誘ひ我が猛卒をして之れを刺さしめんとせし時に起ちて謠ひし歌に

忍坂の　大室屋に　人多に　來入り居り　人さはに　入りをりとも　みつ〳〵し　久米の子等が　頭椎　石椎持ち　擊ちてし止まむ　みつ

みつし　久米の子等が　頭椎　石椎もち　今うたぬ善し

といへる共にこれ士氣を感奮せしめ軍師の勇を鼓舞する今の軍歌のさま見えて樸野なる言詞の中に不撓不屈の精神充溢し著く國民的若しくは部族的性格を現じたり。是等を久米歌といふ大久米命が劒を持ちて舞ひたるに基けり久米舞といふもの是れなり今日の劒舞の如く以上の歌どもに合して舞踏せしにや是等の歌の雄壯なることと以て想像するに足る。皇后媛踏鞴五十鈴姫も亦歌を能くせしが其の詠當時の風を帶びて柔弱なる女性の趣なかりき。

斯くて時移り世代り人智ます〳〵開くるに及びて歌もまた次第に進みぬ。歷代の天皇を始め皇后群臣みな多少の詠あり就中景行、應神、仁德、允恭、雄略、顯宗、武烈等の諸帝及び菟道稚郎子、磐之姫、衣通郎姫、髙媛、勾大兄皇子、平群鮪等最も巧みなりき。而して當時は貴顯なるものゝみ歌を詠みたるにあらず崇神天皇（自紀元五百六十四年至六百三十一年）の朝には微賤なる童女すらなほ歌を詠みて大彦命を諷せしことあり或は古事をひき出でゝ今を祝へるもありき。また景行天皇（自紀元七百三十一年至七百九十年）の朝に至りては連歌といへるもの出で來て日常の用事を歌もてものすることと行はれたり。日本武尊（景行天皇の第二子）東征の途次甲斐の國なる酒折の宮に憩ひ給ひける折柄歌を以て「にひばり筑波（地名）を過ぎていく夜かねつる」と問はせたまひけるに「夜には九（ココ）の夜日には十日を」と火燒の翁が答へし歌ぞ是れが始めなる。但し是れより先神武天皇の御世に贈答の歌あり日常の用事を辨へし事のさま、さては歌の風やゝこれと相似たり。されども其は上下二句を合せて一首の歌となるにあらず各〻おのが意をもて贈答せしにて連歌の其の意つゞきて一首の歌と成れるものとはおのづから異れり。又旋頭混本の歌といひて五七七音を繰りかへして六句となせる歌は應神天皇（自紀元七百三十一年至七百九十年）の朝より出で來にけり。而して此の御世の頃より我が邦と三韓との交通（後章に詳述すべし）漸く頻繁に向ひき。是れが爲めに未だ外國思想の直接なる影響を受くることとそなけれ人事は益〻複雜に赴き智見はいよ〳〵髙まりぬ。隨うて歌の風姿風情も一段の進歩を加へ同じくありふれたる情緒をうたへるものも若しくは國民的、部族的性格を言表したるものも共に單純素朴の域を脫して稍〻緻密複雜の境に入れり。例へば菟道稚郎子（應神天皇の皇子）の異母兄大山守皇子の叛けるを討ち給はんとて兵を宇治の河上に伏せて

千早人（枕詞）宇治の渡（ワタリ）に　渡瀬（ワタリセ）に　立てる　梓弓（アヅサユミ）　眞弓（マユミ）　射發（イキ）らんと
心は思へど　射取らんと　心は思（オモ）へど　本方（モトベ）は　君を思ひ出で（大山守の父は即ち御身の思ひ出づる也）　末方（スエベ）は　妹を思ひ出で（大山守の妹は即ち御身の妃なるを思ひ出づる也）　いらけなく　其こに思ひ出で　悲しけく　此に思ひ出で　射發らずぞ來る
梓弓　眞弓

とよみ給ひたる歌の中には太子が義理人情の衝突に逢ひて心緒萬端おぼし煩ひ給へるさまの明らかに現じたるを見ても其の一斑を窺ふに足るべし。雄略天皇（自千百五十九年至千百五十九年）の朝には歌を詠じて死刑を免れしものあり。武烈天皇（自千百三十七年至千百三十七年）の朝には歌垣（又歌かがひ）といふものあり男女うち雜り歌よみかはして戀愛の意を寄することさへ行はれたり。武烈天皇いまだ太子たりし時歌垣の場に立ちて平群鮪（時の大臣平群眞鳥の子）と影媛（物部麤鹿火父の女にて歌詠に巧なりき）を爭ひたまひしは其の事世にいと高し。斯くて世々の天皇及び皇后群臣は更にもいはず庶人に至るまで往々歌を詠ずるもの漸く多く推古天皇の頃より漢學の影響又人々の思想を支配するに至りしかば其の進歩は次第に著く第二期なる奈良朝に入るに及びては絶代の繁盛を極むるに至れり。

要するに當期にありては歌謳は後世の如く題を設けて思を搆へたるにあらず眞心より起れる實感を折に觸れて詠出したるなり。歌の種類もおほかた此の期に於てみな現れたり。わきて長歌は他の諸種の歌にまさりて尤もおほく行はれ却つて短歌は極めて稀なりき。若しそれ歌思の變遷は普く東西古今に通じたる性情を歌へるもの先づ現れて或境遇に於ける特殊なる團躰の人々にのみ適合すべき國民的若しくは部族的性格を表白したるものは次に見えたり、進みてはまさに全く他と混ずべからざる個人的性格を表白せんとするに至れり。是れを譬ふれば人心の漸を追うて發達しゆくさまにも似たりけらし。人の初めて生るゝや心性甚だ漠たり男女の殊別は全く沒了してまた見ゆることなし而も漸く長するに及びては啻に其の別を明かにするのみならず他とまがふべからざる特殊の性質を具有するに至る。第一期の歌謳は未だ明らかに個人的性格を表したるものなく又前工者も絶えず交々現れたりと雖もやゝ早く見えたると稍〻後れて出でたるとを比較すれば其の風姿風情ともに多少の發達變遷あるを認む其は上に記載し

たるが如し。さはれ當期に亘れる年代を通算すれば神代を除きてもなほ千二百年に餘れり。是れを思へば多少の發達變遷も此の悠久なる年月の間に起りたる結果としてはあまり遲々たるにあらずや。況や『古事記』『日本書紀』に散見したるを採りて之れを第三期なる『萬葉集』に載れる歌謳と對するに形質共に著きげぢめの見分けがたきものあるをや。殊に其の風姿に於て然り。是れおもふに傳唱の間にあらず〳〵轉訛したるもあり或は筆錄の際わざと引直したるもありて遂に後世の風趣を帶ぶるに至りたるものなるべし。かゝれば當期に於ける歌謳の變遷すくなげに見ゆる所以もものつから明瞭なるべくや即ち由來變遷の尠少なりしにあらで傳唱の間筆錄の際何時となく其の迹を消盡して唯今日に至りて討究しがたきのみ。

第四章　散文

和漢混和文　假字文　奏詞　祝詞　其の想　其の文脉

第三章に於て述べたる如く我が邦の上古には國內一般に通用せる文字なかりしからに歌文は共に記すべき便なくなべて口頭の傳唱によれりき。故に上古の散文は如何なるものなりしか徵すべき由なし。さるに三韓の交通次第に頻繁に向ふに及び神功皇后の攝政三十九年には書を裁して魏に遣はし後また晉に遣はしたることあり。これ我が國史に文章の事の見えたる始めなり。其の書は如何なるものなりけん傳はらねば知るよしあらねども蓋し國文ならざるは勿論なり。其の後應神天皇の御代に至り皇太子菟道稚郎子はじめて漢籍を博士王仁に受け學び給ひしより漢字の用法漸く弘く日常の言事は何れも漢字を藉りて物かくなりぬひとなりぬ則ち其の朝より一百餘年を經て履中天皇の頃には史(フヒト)の官をおきて言事を記さしめ四方の志を達せしこと『日本書紀』に見えたり。之れぞ我が邦に文字成文のある始めなるべき。まかれども其の體裁は如何なりけん是れはた今は知るに由なし。さはれ小中村博士の說に從へば

おもふに『古事記』の書體に類せるものならん。其は歌詞の如く官詞のまゝを皆から文字に寫し出しては殊の外に文の長くなれば大かたは漢文の格に從ふものから或は官詞のまゝを存せざれば文意を誤るべき恐れあるところは久羅下那洲多陀用幣流(クゲナスタヾヨヘル)『古事記』の文さやうに記せるものにして其漢文も成るべく邦語に訓むべく作りて讀者に便ならしめたるものなるべし。其は『古事記』よりも撰者の時代古かるべしと思はるゝ『上

宮記』は聖德太子の邪なる記せるものなるべし、今は大方亡佚して唯一部分のみを殘せり。の文体の全く『記』に『記』と書せるは『古事記』の事と知るべし。

に同じくして漢文の格にては讀みがたきを見てもか思はるゝなり

と、然らば其の頃は主として漢文體を以て我が邦の言事を記し其のなしがたきをば、また漢字の通音轉音によりて假りに我が言詞のまゝを寫したるものなるべし。是れ漢文のみをもてせんには自在に且正確に其をものし得るものすくなく又通音轉音よりなれる假字のみをもて邦語のまゝを綴らんには冗長に失する弊あり此の故に漢文體に假字の邦語を交へて成るべく簡略に物しうるやうにこそ務めたるものなるべけれ。但し是は前にもいへる如くもと〳〵現物の徵すべきものの存するにあらねば正確に斷言し得べきにあらず唯當時に近き記錄の後世に傳はれるものによりて其の一斑を類推したるのみ。上古の散文としては全く通音轉音の假字をもて邦語のまゝを綴りたるもの却りて稍正確なる證跡を世に存せり

壽詞祝詞の類即ち是れなり。

壽詞とは吉言（コト）の義にて祝詞とは宣說言（イリトキコト）の義なり。孰れも神前に告白する詞にして或は古く神代よりの事迹を述べ或は神祭に就きて其の所以を陳じ或は事物を讃し神德を稱ふ。要するに其の本旨は罪穢を祓ひ災禍を祓ひ而して圓滿なる幸福を希求するにあり。されば只管言詞を修飾して句節を整へ冠辭を加へ對句疊語を設くるなどをさ〳〵歌謠の姿にも讓らず聲調のうるはしからんことを勉めたるものなり。是れ蓋しまた口傳相承の古例に依れるにて當世に於ける自然の勢なり。壽詞の中にて最も古きは出雲國造の交替する時繼續者參內し朝廷に於て神代の故事幷に種々の神寶を奉獻する事等を陳べて御代を壽ぐ詞なり。祝詞にしては祈年祭（ゴトマツリオホハラヘ）、大祓（オホハラヘ）、大殿祭（オホトノホガヒ）の詞など古きものにて且其の詞うるはしく調ばた高雅なり。孰れも延喜式の『祝詞式』に錄せられ國文の純なるものなり。然れども是等の詞の中には太古の言詞ならめど幾分かは改作せられしもありけん昔ながらの詞とも覺えぬもまた多かり。思ふに古は神を祭るにも後世のゝ如く一定したる式はなくて其の時々の適宜に定めてものし給ひしかば隨うて祝詞も亦其の時の宜しきにかなへて白したりと覺ゆ。加茂眞淵翁はいはく

かくて其の皇神かたゝへ申せし詞等の後の御代々々に有りしを延喜の御式の文に學

げ給ひ其もまた上中下の世々のさまの相違なもある。まづ出雲の國造の神賀の詞は飛鳥岡本の御代舒明天皇の言なるべし。言葉まさしくしてみやび心、巧にしてゆたかなり。巧のこまやけきはいと後によれいどちらべのゆたかなるぞ上つ代の殘れるなる。次に六月十二月の大祓の詞は、大津淨見原の御代天智、天武、天皇の朝の辭なり。言おもしろく雄々しく心巧みにしてさいのへるものゝゆたならず、かたらに聞ゆるはつとめて古ゆ寫せばなり。その次に祟神を卸くる大殿祭の詞と藤原の宮皇持統天の朝の來に作れるならむ。今一きざみおとりたり。新年、廣瀬、立田の祭の詞は奈良の宮皇元明天の朝の始つころいへるにておやし古言もてすれど文ちふもの心得ていひなせしなられば又一きざみおとりにたり。つぎ〳〵の詞はいやくだちにくだち、まよわりに弱らひつゝ更に論けべくもあらず

といひて祝詞の後世になれるを說き本居宣長翁はこれを難じて

こは孰れも〳〵古きものにて其の時に臨みて其を申す人のいかにもノ〳〵ふるしきさまにこそ申しつらめ。然るに定まれる事などはその年々の趣も同じければ申す詞もさま〳〵の例によりておほかたいつも同じさまなるべければおのづから定まれるやうになり來にけん。さてそれを書き記して年々用ふることゝいせるは何時の頃か分からざれど今式に殘れることゝなりたるは大寶令の頃文武天皇の御代にてかはた天智天皇の御代の頃か

といはれたり。兎角は『神代紀』『日本書紀』中の神代紀といふを略したる也。以下何々紀といへる皆是れに同じ。に天照大神の

天の窟戸に籠りましゝ時天兒屋根命が太諄辭白しけるに大神是れを聞きたまひて「この頃人多に申せどもいまだかく言のうるはしきはあらず」と宣ひしことあるを思へば是れ言詞の文章にして祝詞の起源なるらん。されば本居翁のいへる如く上代よりおほかた其の形はありけるを年を閱みするに及びて或はおのづから時と處とに適はずして不用の文詞も出で來けんを改作もしつらんが則ち今の文の如くなれりしならん。故に昔ながらの祝詞は今は其のまゝ傳はらずと雖も能く其の眞意の存する所を探らば一は祭政一致の上代に在りては敬神の念、祭祀の制如何ばかり篤く嚴かなりしかを知るに足るべく一は我が邦散文の發達し來れる由緣を推測するを得べし。されば引ふるしたる例にはあれど中に就きて最も古く且其の詞の殊にうるはしき出雲國造神賀詞を掲げて其の一斑を示さんとす。さて出雲國造は天穗日命の子孫にて代々出雲の大社の祭祀を掌る官なりきといふ。

八十日日波在止毛今日能生日能足日爾出雲國國造姓名恐美恐美毛申賜久挂麻久毛畏岐明御神止大八島國所知食須天皇命乃大御世乎手長能大御世止齋

止者後際時爲氏出雲國乃青垣山内爾下津石根爾宮柱太敷立氏高天原爾千木高知坐須伊射那岐乃日眞名子加夫呂伎熊野大神櫛御氣野命國作坐志大穴持命二柱神乎始天百八十六社坐皇神等乎某甲我弱肩爾太襁取挂天伊都幣能緒結天乃美賀祓冠利天伊豆能眞屋爾麤草乎伊豆能席登刈敷支氏伊都閉黒益之天能廻和爾齋許母利氏志都宮爾志靜米仕奉氏朝日能豐榮登爾伊波比乃返言能神賀吉詞奏賜波久登奏

出雲の國造菜（此の詞を奏する其の時の國造が自身の姓名を申す也）謹みて大八島國を統治し給ふ天皇の御代にかけて申さんも恐多き現神（イキガミ）にまして大八島國を統治し給ふ天皇の御代にかけて申さんも恐多き現神（イキガミ）に永く榮ゆる御大代にあるやう願きいはふわざとして出雲の國の若竈たる山の内に宮造りして鎮りまし、伊邪那岐命の特に愛し給ひし御子即ち神祖熊野の大神櫛御氣命（須佐之男命の御名にて其御靈は熊野に在り又櫛御氣野と申す故は命が樹木を培養し給ひし寄しき功を稱へて云ふ也）及び此國土を經營し玉ひし大巳貴命の二神を始めとして此の國に鎮坐まします百八十六社の神々たちを、菜が刀に雜なかけ祓ひ清めたる木綿を結びて頭に冠り、新しき草を刈り採りて鎮まりて清淨なる殿舍に敷き設け嚴瑞（イツベ）の底に火を燒きて神饌を調理し天の甕に神酒を作らんとして伊豆の眞屋の内に引き籠りて靜かなる宮に神々を齋ひ志づめ御祭典を爲し終て今日の吉日の朝日登る頃に滑りなく御祭をなし卒へたる復命のたふ神賀の吉詞を奏聞す言いふめ神賀の意也。

祝詞の式書は以上の例にて略諒じたるべければ次なる句なば唯讀み易からんなる旨とはかりて假名交り文に改めて掲げん。

高天の神王高御魂神魂命の皇御孫の命に天の下大八島國を事よさし奉らしゝ時に出雲の臣等が遠祖天穗日命を國體見に遣はしゝ時に天の八重雲を押別けて天翔り國翔りて天の下を見めぐりて返事申し給はく豐葦原の水穗國は甚は五月蠅なす皆沸き夜は火瓮の如光神在り石根木根立ち靑水沫も事問ひて荒ぶる國なり高天原にまします神祖高產靈、神御產靈命の皇孫に我が國を治むる事を委托せさせ給ひし時に、出雲の臣等が先祖の天穗日命なる此の國の樣子を見に下し給ひたる時に、幾重も重りたる雲を排き別けて空を翔り國なる翔り天下を見廻りて產靈神に復命なされて申すには葦間は荒ぶる神達が五月頃の蠅立ち騷く如く皆起り立ち夜は瑞の中にて燃す火なごの如く光る放ち飛び廻はる荒ぶる神等あり、加之岩や木の頻水の沫に至るまでも言なる放ちて荒れみだれたる國なり。然れども鎭平けて皇御孫命に安國と平けく所知坐しめんと申して己れ命の兒天夷鳥命に布都怒志命を副へて天降し遣はして荒ぶる神どもを撥ひ平げ國作らしゝ大神をも媚びしづめて大八島國現事顯事事さらしめき國驅なれども鎭らせ從へて安經の國として皇孫に統治せさせ申さんと產靈神に奏して我が（即ち穗日命が）子天夷鳥命に布都怒志命を副へて此の國を鎭定せしめんために降し遣はして立驅き居たる那神共を追ひ拂ひ從へ國土を經營し給ひし大巳貴命をも機嫌とりて平和に靜まらせて此の大八島國を始め世を統治する業をも皆皇孫に讓り給ひしめき。乃ち大穴持命の申し給はく皇御孫の命の靜坐さん大倭國と申しておのれ命の和魂を八咫鏡に取託けて倭大物主櫛瓊玉命と名をたゝへて大御和

の神奈備にませ、己れ命の御子阿遲須伎高孫根命の御魂を高木の鳴の神奈備にませ、事代主命の御魂を宇奈提にませ、賀夜奈流美命の御魂を飛鳥の神奈備にませて皇御孫の命の近き守神を貢りおきて八百丹杵築宮に靜まりましき

乃ち大穴持命の大倭國は皇孫の天降りませし玉ひて御自身の平和の德あ御魂か八咫鏡に寄り憑かせ其のつけし御魂を倭大物主櫛瓊玉命と名づけて葛木の鴨神社(カンナビ)に鎮まらせ、同じく事代主命の御魂を宇奈提の神社に鎮まらせ、同じく賀夜奈流命(下照姫命ならん)の御魂を飛鳥の神社に鎮まらせ、同じく事代主命の阿遲須伎高孫根命の御魂を宇奈提の神社に鎮まらせ、同じく賀夜奈流命の御魂を飛鳥の神社に鎮まらせて皇孫の近き守護神として祭りおき御自身は出雲の八百丹(冠辭)杵築宮に遠き守護神として御鎮坐し給ひたり。こゝに親神魯伎神魯美の命の宜りたまはく汝天穗日命は天皇命の手長の大御代を堅石に常石に伊波比まつり伊賀志の御世に幸へまつれと仰せ賜ひし次のまに〳〵供齋ば(若し後の齋時なれば「後」の字を加ふ)仕へまつりて朝日の豐榮のぼりに神の禮自利、臣の禮自と御禮の神寶獻らくと奏す(こゝに皇孫の親しき神祖の告げたまはく汝穗日命は天皇の御代を萬年までも變りなく隆盛なるやう齋ひまつり幸ひあらせよと仰せ給へり、故に其の仰せのまゝに御代の隆盛なる業を行ひて今日の吉日の朝日の登る頃に出雲の神の禮物、國造の禮物を天皇に獻上せん)白玉の大御白髮坐し赤玉の御阿加良比まし青玉の水の江玉の行相に明御神と大八島國志ろしめす天皇命の手長の大御代を御横刀廣にうちかため白御馬の前の足の爪、後足の爪踏み立つることは大宮の內外の御門の柱を上つ岩根に踏みかため下つ岩根に踏み凝らし、振りたつる事は耳の彌高に天の下をしろしめさん事志太米白鵠の生御調の玩物と倭文の大御心も多親に彼方の古川岸此方の古川岸に生ひたてる若水沼間のいや若蔵に御若蔵まし須々伎振遠止美の水のいやをちに御袁知まし麻蘇比の大御鏡の面を意志波留して見そなはすことのごとく明御神の大八島國を天地日月と共にやすらけく平らけく知行さんことの志太米と御禮の神寶をさゝげ持ちて神の禮自利、臣の禮自と恐みかしこみも天津ついでの神壽の吉詞まをしたまはくと奏す(今獻る玉の白さが如く天皇は御髮の白くなるまで生きながらへましく赤玉の赤きが如く天皇の御顏色美はしく壯健に坐しまして給ふ天皇の日出度御世なる瑞々しき青玉の正しく並び連りたる如く明御神さして大八島國を治め給ふ天皇の日出度御世なる太刀の刃の廣きやうに所廣く、その踏み立てる太刀の打ちきたはれて堅くある樣に動きなく御世なるまで立てる天皇のまして大宮の內外の御門の柱なる堅固にせんが爲なり、又獻る白馬が地なの耳を振り立つるは其の耳の高きが如く御代の隆盛になりて天下を統治し給ふべきなるし、又白鵠なる生きながら獻るは其の耳の高きが如く御代の隆盛になりて天下を統治し給ふべきなさんため、縞機の布なる獻るは其布の筋目の正しきが如く天皇の御心も亂れなく確に古川の此處彼處の岸に生ひたる栗の林の若く榮えたるが如く益々若やかにまして、また振りそゝぎて淀みとゞまりたる水の如く天皇の御年齡の若きに返りまし明鏡の上面を拭ひ清めて見給ふことの如く才智明らかに天皇の此の八島國を天地日月のあらんかぎり平安に治め給はんの吉兆と御祝ひの神寶を持ちさゝげて神の禮物、臣の禮物として獻りて恐れつゝしみて神代より定り來れるまゝに御代を祝賀する詞を奏上すといふ意也。

此の外顯宗仁賢二帝の稚うまし〳〵し頃難を避けんため播磨國なる忍海部造細目の家の僮となりて在はしける時に來目部小楯の彈ける琴の音に合はせて舞ひつゝ歌ひ給ひたる新室壽の詞は『書紀』に殘りて有名なり。又上古の人民の神代の故事を記憶して人に語りきかするをも壽詞といひき。舊くは中臣氏の必ず奏したるにより一に中臣壽詞ともいへり。中古までも大嘗の節會に語部が朝庭に於て中臣壽詞と稱する舊辭を奏せしは其の遺風の傳はれるなりとぞ。其の壽詞の數古へは許多ありけんを年經るに及びて亡佚し今は僅かに保元の頃の大嘗會に奏したる一章のみぞ其の時の左大臣なる藤原頼長公の『台記』と名つけたる日記の別記に殘りて傳はれるのみ。

かく壽詞は御代を壽ぐ詞なれども尙神代若しくは皇祖の故事を陳ぶること多し。祝詞もまた其の旨とする所は罪穢を祓ひ災禍を却け幸福を希求するにあれども其の冒頭にはおほむね神代の事歷或は建國の由來を表明せり。例へば大祓の詞にも

高天原に神づまり(はづまりの約なる也)ます皇親神漏岐神漏美の命もちて八百萬の神たちを神集へにつどへ給ひ神議りはかり玉ひて我が皇御孫の命は豐葦原の水穗の國を安國と平けく知ろし召せと事よさしまつりき。かくよさしまつりし國中に荒ぶる神どもをば神問はしに問はし給ひ神拂ひに拂ひ給ひて語問ひし磐根木根立ち草の垣葉をも語止めて天の磐座はなち天の八重雲を稜威の千別にちわきて天降しよさし奉りき

といひまた大殿祭の詞に

高天原に神づまります皇親神魯岐の命以ちて皇御孫の尊を天津高御座にまさしめて天つ璽の鏡劍をさいげ持ち賜ひて葺萱き宣りたまはく皇我が宇都の御子、皇御孫之命此の天津高御座に天津日嗣を万千秋の長秋に大八島豐葦原の瑞穗の國を安國と平けく所知食と宣寄さし奉り賜ひて天津御量り以ちて事問ひし磐根木根立ち草の可岐葉をも言止めて天降り給ひし

といへるありて天孫降臨ましゝて天壤無究の皇基を定め給ひつる由來を語らざるなし。されば是等の祝詞はもと、神に告白する詞なりとはいへ間接には祭祀に參與する群臣は云ふも更なり遠隔遐陬の下民に至るまで亦漸々相承し爲に建國の基本を明らかにする便宜となりたるなるべし。加之古代の人は身の不淨汚穢を以て罪惡災禍を招く基と考へ殊に神明の厭惡し給ふところなりと思ひなし

いかば祝詞の中には必ず清淨を貴び汚穢の厭ふべきをいひ只管神明の御心に習ひて潔白ならざるべからざるを說けり故に又自然の結果として人心をして正直公明ならしむる便りとこそならしめたれ。而して今日となりては更に是れによりて上代の書籍に漏れたる史上の事迹を窺ふ助となりぬ此の事に就きては平田篤胤翁嘗て

古さ祝詞に見えたる事實はその御傳へませる御故事にて故事の本にしあれば『古事記』『神代紀』の傳はあれど古傳のあるが中に彩更に尊み重すべき物なりける。さもあらば祝詞なる故事の『古事記』『神代紀』なる傳に勝りて正しき由は如何にして知るといふに總べて古傳說ばしも古は更なり今にも通りて神隨なる道の實事は違ふとなく萬の事物の理に符へるを以て正しき傳說と知ることなるを祝詞なる傳々はよく實事の旨に符ひて萬の理にかなはざることなきゆゑに眞に正しとは知らるゝなり(中略)さて同じ神世の傳說なるに祝詞なるは正しく傳はり『古事記』『神代紀』なる傳には混亂たる事の多く交れることは上にいへる如く神皆岐神皆命の神の御故事を傳へませることは皇美麻命の天降りまして御世始め給はむに神祭を主と爲し給はん事をよさし賜ふとして教へませる御傳なる故に皇美麻命の御世々々その大詔命のまにまに神祭ごとに大切に嚴重に行はしめ給ひけん故に此上なく正しく傳はり『古事記』『神代紀』にしるさにたる傳々は彼の千五百座多かる神の御裔家々に傳はりたる或は世に弘く盲ひつたへたる說等をも聚めあつめられたれば自然に紛れ混れたる傳の多く交るべき謂なりける

と祝詞なる傳說の極めて正確にして信憑すべき所以を說きぬ。此の說或は誇張に過ぎたる嫌なきにしもあらねど全く架空の臆斷にあらで多少の確徵ありて存す。實に善詞祝詞は上代の人の思想感情若しくは想像の狀態を窺ふに此上なき材料なるべし。其の世の人々の敬神の念厚く淸淨を貴びしことは既に述べつ。祈年祭の詞には「天の壁立つ極み、國の退き立つ限り」「靑雲の棚引くきわみ、白雲のおり居むかぶすかぎり」「船の舳の至りといまるきわみ、馬の爪のといまるかぎり」「又谷蟇の狹わたる極み、潮沫のといまる限り」などいひて際涯なき邊境の意を表示せり。是れ素と全く詩歌的言詞、是等を以て感想の如何を評せんは無理なれども其の一斑を知らんには妨げあらじ。更に大祓の詞に罪の消えゆく狀を物せるあたり

皇御孫之命の朝庭なは下めて天の下四方の國には罪といふ罪はあらじと科戶の風の天の八重雲を吹き放つことの如く朝のみ夕のみ彌夕の朝風夕風の吹き拂ふとの如く大つべに居る大船を舳ときはなち艫ときはなちて大海の原に押はなつことの如く彼

かたの繁木がもとを燒鎌の敏鎌もて打拂ふことの如く遣る罪はあらじと祓ひ給ひ清めたまふことを

とあるを見んには如何にも其の想像の面白くして秀絶なる長歌を讀むらん心地す且篇中許多の對句疊語又は冠辭の暦々として相聯り務めて其の意を永うせんの結構ほの見えたり。然れども上代の人の習ひとして思念想像するところ往々散漫無稽に過ぎて稍〻妄想たらんとする傾あるを覺ゆ。特に諸〻の謠詞祝詞の言詞は相同じきが多く文脉は一律にして變化の妙に乏し。是は神代ながらの太諄辭等を摸倣して後世折々毎に改作したる結果として余儀なき次第ならん。さは此等の辭は尚言文一致の文脉として且我が邦散文の萠芽として見らるべきものなれば後の散文を研究せんとするものは須らく注意して見るべきなり。

第二期　奈良朝の文學

第一章　總論

年代の範圍　奈良朝文學の概況

歴史上の實際より云へば奈良朝と稱するは紀元一千三百六十八年元明天皇の第三年より一千四百卅八年桓武天皇の延暦三年に至るまで八代七十年間帝都の奈良に在りし程をいふ。されども此には今一層其の範圍を擴めて一千二百年代推古天皇御即位の頃より桓武天皇平安遷都に至る凡そ十七代一百九十餘年間を總括すべし。蓋し文學の發達は截然區劃すべからずと雖も漢學の影響の稍〻いちじるく見えそめたるは推古天皇の朝より始まり、また所謂奈良朝盛時の文學といふものも其の頃より是れが萠芽を現じたればかくは定めつ。

さて前期の平坦なる世態は此の期に至りて全く破れぬ。久しく振はざりし漢學は頭を擡げて長足の進歩を爲し夢にだも想はざりし佛教は一衞千里の勢をなして人心を驚破せり。或は佛寺の建立となり或は唐學生の派遣となり或は唐風の摸倣となれり。大化の革新は國家の面目を一新し壬申の亂は前代未聞の變動を

生じぬ。其の間自然と人智の發達を促したるや昭々たり。かるが故に素樸なり し歌謡は書策を脱して文華燦然たる域に進み簡單なりし思想は一轉して富贍の境に入りぬ。是れを前代に比すれば梅花の春蕾を破つて一時に煥發したらん趣あり是れを後代に較するに桃李のたがひあらじと覺ゆ。散文にしては『古事記』『宣命』『風土記』の類あり歌謡にしては『萬葉集』あり。前者は未だ幼稚なるを免れずと雖も散文の體用略具れり後者に至りては空前絶後の偉觀と稱せらるゝところ、世人或は此の期の文學を指して文學上歌謡の時代なりきといふものあり。妥當の見ならん。げに歌聖として後人の追慕すなる柿本人丸と山部赤人とは共に『萬葉集』中の歌人なりけり。其の他山上憶良、高橋蟲麿、額田王、大伴旅人、仝家持等高手の歌人尠からず孰れも景に逢ひ情に觸れて許多の秀歌を詠出せり。

言語には前期の末つ方より漢學佛教の流行漸く盛なりしかば外國語の混交隨うて多かりき然れども其の音韻稍〻變じて我が邦固有の言語と能く融合せりしことと前期に於けるが如し。但し漢學の講究はゆくりなく文章上に影響を及ぼし從來假字の邦語をもてせしものも次第に漢文をもて物かく風となりき。故に此の期の初頃より一方には固有の言語と固有の言語に融合したる外國語とを以て物する歌文あり他方には專ら漢字もて聯ねたる漢文ありて双々相對立する光景を呈したり。而して其の漢字もて聯ねたる漢文は唯漢籍又は佛典を學びたる人々の間にのみ筆にするに止まりて常人の間に行はれたる言語を聯ねたるものとは別なりき。されば言語と文章上の用語とは此の頃より分離の兆を現じたりと謂ふべきなり。また漢文ならざる文章も漢語を多く交ゆるによりて此の期の末より漸く普通の言語と離隔するに至れるものありき。

要するに此の期の文學は外國思想の影響によりて發達するところ鮮少ならざりき。故に予は其の發達變遷の順序を細叙する前に先づ誘因たりし漢學と佛教との我が邦に於ける由來の大略を語るべし。讀者若し前二者の人情、風俗、政治、社會の上に及ぼしたる影響の如何ばかりなりしかを知了し而して後其等の反映たる文學の現象に意を留めなば此の期の文學の出つる決して偶然にあらざるを知るべきなり。

第二章　漢學佛教及び其の影響

漢學の渡來　其の發達　佛教の渡來　其の傳布　我が邦惟神の道　儒佛神の差異　漢學及び佛教の社會並びに人心に於ける影響　留學生　唐風の摸倣　大化の革新

そも〳〵漢學の我が邦に渡りしは紀元九百四十六年應神天皇の御宇なる十五年に百濟の王族阿直岐といふもの來朝して『易經』『論語』『山海經』等の書籍を貢献したるを始めとす。是れ我が國史に錄するところにして且學者の一般に唱道するところなり。さはれ是れより先神功皇后三韓を征討せさせ給ひけるとき彼の國に於て府庫を封じ圖書を持ち歸へられしこと、さてはまた其の後魏と晉とに使を遣はして書を賜ひしこと見えたり。之れを思へば早う其の頃にありて彼の邦の學に通せりしものありけんこと疑ふべからず。然らば漢學の渡來したるは應神天皇の朝にはあらで外交開けて程なく此處かしこに擴まりたるものならんか。神代の太古にありて既に須佐之男命は新羅に到り鳥髮草嘗不合命の皇子稻飯命は其の邦の王となり其の後人皇の御世となりては邊疆の民或はひそかに交通往來し或は公に歸化來住せしことは彼我の史に散見したれば其の交際の要具たる文字は必ず早く我が邦人の知るところとなりしなるべしとは既に述べたり。然るに文字のみひとり傳はるべき理由なければ書籍もまた必ず是れと共に傳はりたるや明らかなり。然れども上代は百般の事物倫に簡樸を貴びたる事なればさまで熱心に之れを講讀研究すべき必要いまだなきからに放任して自然の發達に委ねたるならん。外交開けてのち一千年を經るまでには其の歲月短きにあらねども彼の邦の文學として邦人の心の上に殘したる痕跡は些の認むべきものなかりき。然るに星霜を閱みするにつれては人智次第に加はり事繁雜に趨くは自然の勢なるに更に三韓征服の擧ありしかば我が邦內外の事業も一層繁くなりゆきまた昔ながらの簡樸なる狀態を持續すること能はずなりぬ。是に於てか應神天皇は阿直岐の百濟より來るに會し其の經典に通曉するを幸とし太子菟道稚郎子をして師事學習せしめ給ひ後また使を百濟に遣はして博士王仁を徵させ給へり。同十六年王仁『論語』十卷『千字文』一卷を携へて到る辰孫王といふもの亦到りき共に文學を以て名聲あり太子並びに師として諸の典籍を學ばせ給ひぬ。是れ我が邦

に於て漢籍を讀み經義を講習せし始めなり。太子頗る英才にして通曉するところ尠からず十三年を經て同天皇の廿八年高麗國王が獻ぜる表疏の文辭無禮なるを知りて是れを詰責し給ひき其の經義に通曉し給ひしは禮讓を守り孝悌を盡して友義を全うせしを以ても推知すべきなり。又仁德天皇の勤儉にして民の疾苦を恤み給ひしが如き聖德の高きによれゝど漢學を學習せさせ給ひし効果絕えて無からずとせんや。さはれ其の頃は學を修むるもの尙極めて稀なりしかば其の効果の及ぶところ未だ普からざりき。若し夫れ異俗の譯を重ねて來朝するものは此の頃より漸く多かり同天皇の御代のみにても其の主なるものを擧ぐれば十六年には秦氏の祖弓月君百廿七縣の民を率ゐて來り廿年には倭漢直の祖阿知使主十七縣の民を統べて歸化し、なほ卅七年には工女兄媛弟媛等召に應じて吳國より來朝せり。而して是等は孰れも文華燦然たる國土の民なりしかば是れが爲に我が邦の文化をして進捗せしめしこと知るへしと雖も其れより百餘年の間は是れとしも揭ぐべき程の進歩は文學上には表はれざりけん文筆の職は永く歸化の民かゝらずば其の子孫の手にのみ管せられたり。履中天皇の四年に史の官を諸國におかるゝに當りても專ら其の官に任ぜしは高麗より歸化せる阿知使主の裔と百濟より來れる王仁の裔となりき。王仁の子孫文氏は河內に住み阿知使主の後裔史氏は大和に居りて世々文筆の業を掌り或は史官となり或は博士となりて他の蕃別の史官を督し以て東西の史部（ヤマトカフチフヒトベ）と稱したり。後の世となりても或は諸國の記錄を掌り或は漢土に使し或は文藝を傳習せしむる等文筆に於ける業務は云ふまでもなく事苟くも外交に關するあれば必ず用ひて協辨たらしめき。蓋し文字を解するもの未だ多からざる時に當りては最も至要の官職たりしなり。雄略天皇の代には三藏を分ち史部をして大藏の出納を勘錄せしめ欽明天皇の朝には船の賦（ミツギ）を錄せしめ津の史を設けて其の出入を記せしめ又田令（タツカヒ）をおきて戶籍を檢し田部丁籍を作らしめ給ひき是に至りて漢學の効果稍〻擴まりたるが如し而も皆多くは史部の人を用ひ給ひぬ。然れども我が邦當時の風としてすべて官職は世襲なりしからに史官も稍年經るに及びては其の子孫の中或は業成らずして職に堪へがたきものあり且つ我が朝廷の公事年を追うて繁劇に赴き是れがために文藝に通ずるもの〻必要いよ〳〵增加せしかば博士を外國に求むることと御世毎に

多く繼體天皇の七年には百濟より五經博士漢ノ般楊爾を貢し十年同じく高安茂を貢りぬ。又欽明天皇の十五年よりは諸〻の博士等數年毎に交代して來朝せり五經博士、易博士、曆博士、醫博士、採藥師、樂人等是れなり。其他技藝の師にして渡來せしものまた尠からざりき。かゝれば我が文明は當時著々進歩の運に向ひたるや知るべきなりさはれ前にもいへるが如く我が上代の風俗は上下共に世職にして更に他に轉ずること絶えて無かりしかば漢字を以て萬般の言事をものすべき世となりても一切の記錄は來朝の外人若しくは史部の人々に一任して顧みるものさへ尠く稀に上流の人有志の徒に限りて講習したるのみ中以下の士民は却りて口々に相承する古風を以て便なりとし煩雜なる漢學を講習して言事を記さんとも思はざりしか如し。故に漢學始講以後年を經ること久しく且歸化の民は諸國に分れておの〳〵其の業を執りしかば是れによりて知らず〳〵我が民人の腦裏には幾多の新智見を與へたること必然なりと雖も未だ著るく其の効果の見るべきものなく却つて世襲の史官にして其の職を曠うするものさへ輩出したり。例へば敏達天皇の朝に高麗より表疏を上りたる事ありき。天皇執りて之れを大臣に授け諸史を召聚して解釋せしめ給ふ三日を經れども尚讀み得るものなし時に船の史の祖に王辰爾といふものあり獨り能く解釋して奉りしかば天皇深く賞讃し給ひきと傳ふ。史官にして猶かくの如し其の職にあらざる士の學術の程はおほかた是れによりても推し測らるべし。更にいはゞ我が邦の學術文藝は多く朝廷より擴まれるに朝紳にして此の如し一般士民の狀態また思はるべくや。然るに此の頃に至り大に漢學の進歩を促して其の隆盛を助長したるものあり佛教の流行すなはち是れなり。

佛教の始めて我が邦に渡來せしは紀元一千百八十二年繼體天皇の十六年に南梁の人司馬達等（ダツト）といふもの渡來して大和國阪田原に居りて佛法を信奉したるにあり。されども當時我が邦人には未だ之れを信ずるものなきのみならず却つて異邦の神として排斥したりき。其れより三十年を經て欽明天皇の十三年に至り百濟の聖明王使を遣はして釋迦佛の金銅像一軀及び幡蓋經論等若干を奉獻し又表を上りて其の由來と功德とを説明せり。曰く「此の法は諸法の中に於て最も殊勝のものにて解し難く入りがたし周公孔子と雖も尚知ること能はず。此の法能く

無量無邊の福德果報を生じ無上の菩提を成辨す。およそ願望すること情のまゝならざることなし。且遠く天竺より爰に三韓に及び尊信せざるなしと。此の時渡りたるは重に大乘にして小乘も亦是れに附隨したりとかや。さて佛敎には大小諸種の法門あり或は戒律を修めて有形の福善を祈るあり或は禪定を主として無形の佛果を求むるもあり。其の別によりて多少敎旨を異にすと雖も概して曰はゝ苦患の生死を脫離し常樂の涅槃を證せんが爲に無上正覺を求むるにあり。故に其の說くところは現世よりも未來に屬し形而下よりもむしろ形而上にあり儒敎の唯現世を把住して人道を說くに對すれば遙かに幽玄にして高妙、能く人生の弱點を破して來世を危む不安の心を救拯せんとす。是を以て智の未だ圓熟せざるものにありては或は其の初め入りがたく解しがたからん而もこれを久うすれば歸依する心生じ竟に全く樂つるに忍びざらんとす。然るに我が邦には古來惟神(カンナガラ)の道あるありて永く人心を支配せり禍福吉凶おほよそ人意の外にあるものは常に神慮に出づるとせり。乃ち災禍を被ひ幸福を求むるに必ず神祇を祭りて其の冥助を祈り曲直を裁斷するに探湯の式ありて神明の判決にまかすが如き神祇の威德を敬すること厚く隨うて是れを懼るゝことも大なりき。而して神佛二敎の旨義を考察するに彼は天地の始道を說きて報本反始の意を明かにし是れは人生の終道を說きて重に世の禍福を云ふ。かく兩者其の軌を異にすれば全く衝突の悞なきが如しと雖も佛法を信ずることは古來絕えて無きところ神代の儀に悖る觀なきにあらざるなり。故を以て欽明天皇百濟王の表疏を得て喜び給ふこと限りなしと雖も顧れば衷心また疑悞するところ無き能はず。終に群臣を集へて奉佛の可否を問はせ給ひぬ。天皇に於て既に然り群臣豈に然らざらんや。廟堂の意見はおのづから二派に分れ崇佛論者には蘇我氏あり排佛論者には物部氏及び中臣氏あり。互に私黨を樹てゝ相爭ひぬ。故に三十餘年の間は佛法の興廢も隨うて常なかりしが紀元一千二百四十六年用明天皇の御宇に二派の紛爭其の極點に達し遂に干戈に見ゆるに及び崇佛論者勝を制し佛敎はた頓に興隆の運に會しぬ。此の間蘇我氏は常に之れを尊奉し寺院を建立し且私に三韓に命じて佛像經論を貢せしめ僧徒をも徵して絕えず弘敎に從事せしめしかば民間に於ける傳布の狀態は一層强烈なるものありしや必せり。崇佛論者の勝利蓋し偶然にあ

らずと謂つべし。守屋の居宅田園資財を沒收して四天王寺に納めしより佛法の興隆は旭日の昇るが如く寺院の建立は春草の萠ゆるにも似たり。佛像の鑄造はた是れに讓らず僧尼の數また日に月に增加せり。天皇より初め奉り下臣庶に至るまで爭うて之れに趣けば佛法始傳の時よゝ僅に七十二年にして寺は四十六ケ、寺僧は八百十六人、尼は五百六十五人ありきとぞ聞えける。さて又佛寺の競ひ興るに付ては高麗百濟の僧俗歸化するものいよ〳〵多く寺工、佛工、鑪盤工、瓦工、畫工、樂人等前後踵を接して來住し曆數、天文、地理、遁甲、方術の書さては紙墨、碾磑製作の法一として傳はらざるはなかりき。されば此の頃に於ける人心の變動は如何ばかりなりしぞ。是れを無形にしては幽玄高妙なる佛氏の聲耳を驚かし、これを有形にしては宏壯輪奐たる佛寺雲表に聳へて眼を眩せしむ。由來質樸簡單にのみ慣れたりし邦人の豈に驚嘆なくして止まんや。擧措すべて夢路を辿るが如く呆然として顚倒を覺らず啞然として順逆をも忘れたり。馬子人をして崇峻天皇を弑せしむ聖德太子其の情を知れども是れ宿世の報なりとして咎め給はず聖武天皇戒を唐僧より受けて沙彌勝滿と號し禪位の後は三寶の奴と稱し給へども人更に怪まず。萬乘の君も今は僧尼に下り報本反始の意も終には滅びなんとす一意專念佛あるを知り世を擧りて後世の安樂を樂ふ「篤く三寶を敬へ三寶は四生の終歸、萬國の極宗なり」とは聖德太子が憲法の中に制定せしところ、また以て當世の人心が佛法に對せし傾向の一斑を卜知するに足る。

それ人心の傾向すでにかくの如くなりき。是れに伴ふ諸般の技藝のみいかでか獨り停滯すべき。我が邦の畫法は佛畫師なる黃文の繪師、山背の繪師、簀秦の繪師、河內の繪師、楢南都の繪師によりて始めて其の定形を得たり。佛像の彫刻を業とする佛師此の頃より世に出でそめ、建築術はた寺院の建立によりて漸く美術の中に列せらるゝに至れり。又傳はりたる經論は概ね漢文なりしかば佛敎の流行は隨つて漢學の必要を來しひさしく振はざりし漢學をして隆盛なるを得しめたり。就中聖德太子の如きは內敎を高麗の僧惠慈に習ひ外典を博士覺哿に學び給ひて才學非凡なりきとぞ。其の自ら草せる所の漢文にして今に遺れるもの十七憲法あり十七憲法は氏族制度の弊あるを知り血統上の威權に換ふるに信敎上の威權を以てせんとするものなりき。換言すれば佛法の勢力を藉りて從來の朝綱を一

變せんとするものなりき。佛法の人心に於ける影響の程知るべきなり。然れども太子の計畫竟に成らずして止みにしは惟神の道尚一層人心に浸染したりしを知る。伊豫の道後温泉の碑文、大和法隆寺なる藥師光佛の背銘、釋迦佛銅像の背銘等何人の撰なるを知らずと雖も稍漢文の躰を得たるもの、皆今日に傳はれり。太子が島大臣蘇我馬子等と共に撰定せられし天皇紀、國紀、臣、連、伴造、百八十部並びに公民等の本紀の如きも其の文章はまた漢文の如き躰なりしならん今は悉く亡佚して知るに由なし。

此の時さらに漢學をして益隆盛に導きしは隋唐と直接の交通を開きたるにあり是れはた當初は佛教流行の餘響なりとす。從來我が邦は三韓の諸國と交通來往したりしが素と三韓は支那の中樞を距ること遠ければ開化の度遙に劣れりき。故を以て我が佛經を講究するもの初めこそ三韓の媒介にも安んじたれ漸く進歩するにつれては不滿の念おのづから起らざるを得ず竟に直に使を支那の帝都に派して佛經を求めんとするに至れり。推古天皇の十五年に小野妹子を隋に遣しゝは即ち佛經を持ち來らしむるためなりき。翌年歸るに及び更に遣し給ひ同時に學生倭漢因、奈羅惠明、高向玄理、新大國、學問僧旻、南淵請安、志賀惠隱、漢人廣齊等八人を隋に留學せしめき。是れ隋唐の文物を輸入せんとする始めなり。諸氏留り學ぶこと十數年歸るに及んで盛んに彼の國の文物制度の善美なるを賞揚せり。是れより先内には冠制、服制の新定せらるゝありて參朝の禮古へに異れば道路目を側てゝ其の整然たるに驚きしに唐風の善美を聞くに及びてます〳〵景慕する念を養成するに至れり。而して其の結果は唐風の摸倣となりて政治上並びに社會上に一大變動を與へて更に人心を驚破せしめたり。其を大化の革新とす。此の革新は從來地方分權の制なりしを一變して中央集權の唐風に摸したるものなり。朝廷には八省百官を設けて冠位を定め地方には國司を置きて民戸を檢し班田の制を布き租庸調の法を定められたり。是れを孝德天皇の御代とす。事既に斯くの如くなれば漢學の必要益増加すべきは勿論なり。孝德天皇の御宇には高向玄理、僧旻を以て博士となし次て又留學生を唐に派遣せし事續きて二年、年毎に其の員數を増加せられき。天智天皇の時には學校を興し學職頭を任命し四道の博士を置きて學生の養成を務め給ひぬ。四道の博士とは記傳、明經、明法、算道の四

科をいふ。是れより歴代の天皇これが整頓に意を留めまた普く諸國に國學を置きて學事を奬勵し給ひしかば其の學生の資格には一定の制限ありて一般人民には及ばざりしかども其の進歩は大に見るべきものありて學者彬々として輩出したりき。彼の壬申の變は一時官民の恐慌を起せしと雖も却つて政治上及び社會上の舊制を打破して新令の施行を易からしめ、また百濟の滅亡は屬地を失ひたる觀なきにあらずと雖も新羅舊慣に依り臣と稱して年々朝貢を缺かず、百濟滅餘の民はた陸續歸化して諸國に分散せしかば文物技藝自然に下民の智見を開發するよすがとなりて我が文明の進歩を資けたり。而して天智天皇の制定し給ひし近江の律令は歴代の改訂を經て愈〻完備し大寶の律令となるに至りて殆ど永世不磨の大典となりぬ。

かゝれば元明天皇の朝よりは是れまで政治上にのみ注がれたりし力はおのづから他方に向ふことゝなりぬ。制度改革の必要よりして養はれたる學問は今は學問其のものゝために講究せらるゝに至りぬ。是に於て我が邦文藝の見るべきもの漸く多く又今に傳はれり。『古事記』の勅撰は元明天皇の御代にして和銅五年に完成し、『風土記』は同六年に撰進せらる。『日本書紀』又元正天皇の養老四年に修定せられたり是れ元明天皇の勅を奉じて一品舍人親王總裁となり太安麻呂、紀清人、三宅藤麻呂等共に議りて撰進せし所なり。故老の口碑により世間の傳説に採りなほ舊紀を參照し漢文にして漢土の史躰に倣へり但し神代以下の歌謡のみは假字の邦語によりて口誦のまゝを寫されたり。記事は天地の開闢より起りて下持統天皇の御代に至る文躰の整備せるなか〳〵推古天皇の朝なる漢文の比にあらず。『書紀』成りて翌年天皇博士を召し朝廷に於て講筵を開き之れを講讀せしめ給ひき。其の後『書紀』を講ぜしめ給ふこと世々の儀式となれり。次々の御代に撰定せられたる『續日本紀』『日本後紀』『續日本後紀』『文德實錄』『三代實錄』と併稱して世に本朝六國史といふ。我が上代の事迹を研究するもの以て重寶とす。『古事記』と『風土記』とは後章に於て叙ぶべきをりあれば略しつ。

さて奈良朝の文化は日に進みて聖武天皇の前後にありて隆盛の頂點に達しき。此の御宇に吉備眞吉備留學二十年にして唐より歸りぬ。元正天皇の靈龜二年遣唐使多治比縣守に從ひて彼の邦に渡りしものなり。折柄唐は玄宗皇帝の代にし

て其の朝の文運最も隆盛なる時なりき。長安の都は華美の中心として時樣の流行人目を驚かし絶代の學士星の如く當代の粹を競ふ朝臣に張九齡、郭子儀の徒あり文人に李白、杜甫、高適、岑參、王昌齡、孟浩然の輩あり書には顏眞卿、張旭等妙手千古を歷し畫には王維、李龍眠等芳名四表に溢れき。されば我が遣唐使僧侶學生等の此の偉觀を目擊し若しくは私淑して歸朝するや大に我が文運の進歩を益せしことまた昔日の比にあらざるべし。漢學者にしては以上に掲げたるもの〻外越智廣江、鹽野古麿、淡海三船、僧侶にしては道慈、玄昉、鑑眞、行基等最も盛名ありき。孰れも直接或は間接に文化の進運を贊翼せし事迹史上に顯著たり。

かく聖武天皇の前後には碩學高僧輩出して奈良朝の文化其の極盛に達せしと雖もよく察すれば衰微の兆はまた其の頃よりぞ起りける。持統天皇より元正天皇の朝にかけては專ら前代の化を受けて而もます〳〵政令の實施を務めしかば文武並びに進み上下富饒を歌ひたりしに聖武天皇の御宇にしては天皇を初め衆庶ひとしく心を佛事に傾けしより漸く國庫の空耗を告ぐるもあり隨うて律令の施行次第に弘み朝廷の威信又減ずるに至りぬ。而して佛法其のものゝ弊もまた稍〻此の頃よりぞ起りける。人民往々怪異を喜び異端を學習ふ幻術を行ひ魘魅咒詛を事とするものさへ出で來にき。殊に嬖臣僧侶の中に出でしが如きは其の弊もまた極まれりと云ふべく上下人心の浮靡想像すべきなり。

初め漢學の渡來せしや我が邦人の思想上には些の動變を現ぜざりき。是れ其の影響絶無なりしにあらず儒教の思想の却りて惟神の道に合ひたるに因る。さかるに佛教の興隆は平等の感念を人々の腦裏に扶植し幾多の變動を人情風俗習慣等の上に及ぼし皇室の威嚴を損じ權臣の專横を招き若しくは勇往精進の志氣を挫折せしめたり。されども漢學の隆盛を誘致し間接に唐風の摸倣を促し大化の革新を成就し隋唐の交通を奬勵したる績の如きは決して拙ふへからず。要するに奈良朝の盛時は儒佛の一致運動によりて形成せられ又破壞せられたりと謂はんも敢て謬言にあらざるなり。然れども千古を徹する神代ながらの我が固有の精神は遂に消磨すべからず。おのづから其の中に一貫して隱見するを見る。以下奈良朝の文學に就きて仔細に是等錯綜したる思想の痕迹を討尋せしめよ。

第三章　歌謳

第一節　總叙

太古より千數百年の間自然の發達に委ねたる歌謳も時勢の進歩に隨ひ此の期に至りて未曾有の進歩を現したり。是れ前章に記載したる如く漢學及び佛教の東漸が太く人智の發達を促したるに依るなり。今まで見えざりし思想も逐次散見し是れまで定まらざりし形式も遂に略〻定りつ。ふ然かはいへども舒明天皇の頃までは尚未だ其の進歩明かならず此の天皇の時よりぞ漸く其の形跡は認むべかりける。殊に持統天皇の朝夫の有名なる柿本人麻呂、山部赤人等の續出せるに及びては正に是れ和歌極盛の時期に到達せるものと謂ふべきなり。多くは前期の歌謳の如く事に觸れ物に應じて自然の感情を抒べたるものなれども後には稍〻題詠めきたる事も行はれつ。額田女王が春と秋との優劣を判じたる歌の如きは即ち其の一例なり。現存せる歌謳の中には時に或は拙劣なるものなきにあらねどなべては前期のに比して思想は精緻、想像は深刻、人間の性情を詠ぜるものさへほの見えたり、用語の雅馴なるは云ふまでもあらじ。上は天皇より下は野人に至るまで歌を詠まざるはなかりき。其の歌どもの筆錄せられたるもの一部の集書となりて今に傳はれり、蓋し當期に於ける歌謳の精粹を蒐めたるもの、是れを『萬葉集』といふ。是れ、我が、邦、歌、集の、權、輿なり。余輩が當期の歌謳を知るは唯此の一部在るに因るのみ。然れば奈良朝の歌謳を評するはやがて『萬葉集』を評するに均しく『萬葉集』を論ずるはまた奈良朝の歌謳を論ずるに同じからん。故に余輩はこゝに總叙の筆をどゝめ直に『萬葉集』に就きて其の評論を試みんとす。

眞淵翁が和歌の變遷を論じたる條に曰はく「いとしも上つ代の歌は人の眞ごゝろの限りにして其のさまなごくも硬くも強くも悲しくも四の時なす立ちかへりつゝ前ふりへ定め云ひがたし。やゝ中つ代にうつろひて高市岡本宮の御時(即ち舒明天皇)の頃よりをいはゞ三冬つき春さり來て雪氷の解け行くが如し、是れは初のうつろひと云はん。藤原の宮となりては大海の原に氣色ある島どもの浮べらん樣して面白き勢ぞ出來たる是れぞ二度のうつろひなりける。奈良の宮の初めには此の勢を學び移しゝまゝに己かものともなくうら狹くなりぬ、これぞ三度のうつろひなりける。其の宮の中つ頃にはゆかしき限もなき海山を風早き日に見んがごと荒びたる姿となりぬ、是れぞ四度のうつろひなりける。其れより後の歌は此の集(『萬葉集』)には載らず『古今集』に讀人知らずとふ中の古き調なるぞ此の宮の末より今の都(平安)の初の歌なりける。そは彼の荒びたりしが表裏になりて清らなる庭に山吹の咲き撓めらん風してひたぶるに妹に似たる姿となりにたり是れぞ五度の終りの變なりける」と。全くは諾ひがたき點もあれ

ど參考にもとてかくは掲げつ。

第貳節　『萬葉集』

題號　撰者及び其の年代　歌の部類　歌躰　歌詞　萬葉假名
歌の性質　漢學及び佛教の影響　敬神忠君崇祖の念　自然美の
詠歌者　物語歌

『萬葉集』の題號に關しては古説さま〳〵にして一定せず一には後世の歌集に『金葉集』『玉葉集』または南朝の『新葉集』などすべて葉を辭の義にとれるによりて論を立て萬葉とは萬の言の葉の義なりといひ又一には之れを駁して萬代の意なりといふ是は『文選』顔延年が三月三日曲水詩序に「招世貽統囿萬葉」(下略)とありて其の註に葉は代なりと見えたるを據とせるなり。孰れ當れるにかあらん。さはれ前説は本集によりて後世の人の名づけたるを據とせるものなれば縱令『金葉集』『玉葉集』等の集は言の葉の義なりとするも到底薄弱の説たるを免れず。まして本集の頃には言の葉といへること未だ聞えず却りて萬代の意に用ひたる例は仁明天皇の『令義解』を天下に施行し給へる詔に「宜頒天下普使遵用盡一之訓垂於萬葉」とあるを初め其の他にも許多見えたれば先は後説に從ひて萬代の意なりとせん方妥なるべし。殊に何事も其の摸範を唐風に採れりし當時の狀態より推考するもまた解するの至當なるを知る。『古今集』の序に「今もみそなはし後の世にも傳はれ」(下略)とあるも此の意より云へるにて能く萬代の義に合へり。

撰者と撰定の時代とはた一定せず或は橘諸兄公、諸卿大臣等と共に議りて撰定したりといひ或は大伴家持卿の編輯に係ると云ひ或は此の二卿の集錄せるものとせり時代は聖武天皇の御代とするものと孝謙天皇の御宇とするものとあり。孰れも古傳を根據として立説したるもの、集中また其の迹あり。されども此の集の體裁首尾の一貫せざると且一人の集錄せるものとすれば時代の違へるとは勅撰ならざるは勿論一人にて撰定せるものにあらざることを明かせり。さらば諸兄公是れを撰びしに中途にして薨去せられしかば家持卿之れに紹ぎて增補完成したるものならんか。今日普通の學説は概ね之れに決定せり。但し今本の一、二、十一、十二、十三、十四の六卷は撰定したるものらしく其の餘は大方見聞に隨ひて集錄したるものとおぼし、前者の體裁は稍〻整然たる區分を具ふれども後者はなべて雜

雜なる躰なり。而して其の時代は一に聖武天皇の御代とし一に孝謙天皇の御宇とするものゝ孝謙天皇は聖武天皇の皇女にまし〳〵て且聖武天皇御即位の後まで(天平勝寶元年より八年まで)おはしたれば何れの御時とするも大差なかるべし。諸兄公の遺業を家持卿の紹ぎたるものとすれば畢竟は聖武天皇の御代よりかけて孝謙天皇の朝に完了したるものと見做し得べければなり。此の集、蒐錄する所の歌上は仁德天皇の御宇より下は淳仁天皇の天平寶字三年正月に至る上下通じて凡そ四百餘年なり。中に就きて仁德天皇の御宇より舒明天皇の御代に至る三百餘年間は其の錄する所甚だ稀なり。其の最も多きは天武天皇以後およそ九十餘年間にあり。歌の數は長歌二百六十二首、短歌四千一百七十三首、旋頭歌六十一首すべて四千四百九十六首、わかちて二十卷とせり。此の集より長歌、短歌、旋頭歌等の名目を附することゝ初めて見えき。前に述べたる如く前期に於て既に此の種の歌體ありしと雖も未だ斯かる名目を附することはあらざりしなり。此の集また歌思によりて部類を分ちぬ雜歌、相聞、挽歌、譬喩歌、四季雜歌、四季相聞の六種即ち是れなり。雜歌は後世の歌集に雜の部といへるものにしてやや其の領域を廣うせり行幸、肆宴は云ふまでもなく羇旅、問答、其の餘くさ〳〵の歌の他の部類に屬しがたきをばすべて此の中に收めたり。かくて四季相聞等の部に入るべきものゝ往々此の中に見えたるは例の雜糅なる部分は草稿のまゝにて傳はればなるべし。相聞は後の所謂戀歌といへるものにしてそれよりは稍、汎し男女の間よりして君臣父子兄弟朋友等の間に至るまであらゆる贈答唱和の歌を網羅しつ。さて又挽歌は後の哀傷の歌にして人の死を傷む悲哀の情を抒べたり。次に譬喩歌とは物に寄せ事に托してそれ〳〵の感情をほのめかしたるものなり。而して短歌は三十一音をもて限りとすること『記』『紀』の歌に於けると相同じく長歌旋頭歌はた其の體前期のに似たり。後世ならば五音にいふべき處を三音四音または六音にし或は七音にすべきを六音または八音などにせしもありて其の格一定せず。されども前期のに比ぶれば五音七音の句世の降るにつれて漸く多く時代の後れたるは大方それに定まりておのづから後世の格に合ひぬ。さて舒明天皇の頃となりては長歌には反歌といふありて或は一首或は二三首必ず其の終尾に副はることゝなりぬ。反歌稀にまた反詠ともいひき。通常短歌の體にして

本歌なる長歌の意の足らざるを補綴するか或は其の全意をすべて約言するかの用をなせり。蓋し其の名は前意を折りかへして歌ふてふ義に依れるなり。是れ『記』『紀』の歌には見えざる所漢學講習の結果より『文選』等に見えたる彼の賦の亂辭(一に反辭)といふものゝ風を擬したるなりと云ふ本集の詞書のなべて漢文なるに合せ考へても必ずさかありけんことゝ思はる。此の頃漢文には『文選』いたく流行し唯一の寶典として到る處に講習せられたればなり。或は歌を稱して詩といひ詩詠と呼び長歌を賦といひ短歌を短詠とも呼び短歌一首短歌三首とあるべきを一絶二絶とやうに書したるなど集中其の例いと多し漢學の摸倣行はれしこと知るべきなり。尙漢學及び佛教の影響に就きては後々の項に至りて更に之れを論ぜん。

歌詞はなほ前期に於けるが如く當時普通の言語なりし事云ふまでもなし。されど此の頃隋唐の往復いよ〳〵繁く爲に吳漢の音は勿論梵語さへ其のまゝに入りにしもの次第に多かりしかば普通の言語も幾何か亂れけめど中に就きて最も都雅なるを擇びしならん。防人の歌若くは東歌の如きやゝ異常なる躰もまれ〳〵見ゆれども其は俗謠の然からしむるところ而も古雅なること都人士の作に讓らざるものあり以て用語の平語ならざりしを窺ふへし。狂言綺語の奇妙なる口氣より進ると森嚴莊重なる感想の都雅なる言詞より溢るゝとは此の集をして愈〻變化多からしむる所以却つて一段の趣致あり。偏見好古なる『萬葉』論者の讃辭を學ぶにあらずと雖もつとめて雅ならず殊更に俗ならず雅俗各〻其の適宜の感想を表示すること此の集の特色なりとす。外國の言語をもまた能く融和して之れを用ひたるあるは更に妙なりと謂ふべし。孰れも枕辭を冠し疊語對句を設けて語調を整へ風姿を修飾せり。

書方は漢字を用ひたれどもおのづから一種獨特の風あり。『記』『紀』なるは專ら字音にのみよりて記載し祝詞式はてにをはを細書して其の體用の別を詳にしたり。此の集の書方は全く此等のと異りて遙に漢字の用法に就きて進歩を現しぬ。これを世に萬葉書と稱へ其の漢字を總稱して萬葉假名といふ大別して四種となす。曰はく假字、曰はく借訓、曰はく正訓、曰はく義訓是れなり。假字とは漢字の音訓を假りて國語を寫すものをいふ其の中に字音を假れるを音假字といひ字訓をかれ

るを訓假字といふ。音假字とは安已烏延憶、可吉求鷄居の類にして漢呉の音を用ひ訓假字とは日木來巽兒、猿石渚背苑の類にして其の訓を用ふ孰れも其の音訓を通約したるものなり。故に假字の中にはまた自然に正略の別あり已烏可求居の如きは正音假字にして安延憶吉、鷄の類は略音假字なり。而して日木來巽兒の如きは正訓假字にして猿石苑の類は略訓假字なり。訓假字にはまた二字一訓なるあり嗚呼、馬聲、羊蹄の類即ち是れなり。借訓はた二種あり字音を借りて他意を表すものと字訓を借りて他意をあらはすものとをいふ是は共に二音以上のものとす。例へば現身を鬱瞻、獵男を蘆雄、袋を福路と書けるは字音を借り葷を六倉、海苔を法と書けるは字訓を借れるなり。而して月をツキとよみ丈夫をマスラヲと讀ませたるは所謂正訓にして或は言の意により或は字義をとりたり。次に山上復有山をイデ(出)、十六をシヽ(猪)、戀水をナミダ(涙)と讀ませたる類は義訓にして其の事の意を汲みて用ひたるなり。

右の外なほ字畜を省けると文字を略せるとあり起を已とのみ書し弦を玄とのみ書ける類は前者の例とすべく山下出風とすべきを單に山下または下風と書き左手とすべきを左右とのみ書ける類は以て後者の適例とすべし。就中其の用法の極めて面白きは前に出だせる馬聲の如き又は山上復有山の如き戲書なり。此の事少なりと雖も或はこれによりて當時漢字を用ふること漸く巧妙なりしを察すべく或は以て好尚の一斑をも卜するに足る。（因に云ふ、萬葉集の体裁に就きては尚後の引例に其の二三首を掲ぐるを要す。）

此の集詠ぜる所また自然の發情に任せて些の考察を求めざりき。故に其の風姿おほむね自然に、風情はた雄渾なり。さはれ其の雄渾偉大なるは天眞なる思想が偶〻外界に觸れて得たる聲なりしを以て時に或は拙劣たゞ文字を羅列せるに止まる如きものなきにあらず。蓋し其の故は當期の歌人等が歌謳の美文なるべきを知らず隨うて又其の想の撰擇に意を注がざりしに歸すべし。さはれ此の時我が邦詠歌の行はるゝ事既に久しく且漢學佛教の影響も著く加はりたれば前期に較すれば其の思想も其の想像も共に複雜なり。殊に長歌は此の集特殊の絶技にして恐らくは後世これに比すべきものあらじ。素樸なる言詞は自然の美に觸るゝが如く天眞なる想はおのづから絶妙の調をなせり。歌として稍〻拙劣なるものも

概しては至誠の眞情籠りたれば率ね神韻の縹緲たるものありて存するを見る。

そも『萬葉』歌人の共有せる特質は如何に。既にも記載したる如く奈良の朝は漢學沖天の勢を以て勃興し佛教はた堤を決したる如く藝術したりしかば人心の動搖は殆ど其の頂點に達し其の影響は多少延きて歌謳の上にも見えき是れ必至の勢なればなり。此の集を繙くものは入唐の僧侶及び漢學者は勿論また然らざるものも其の詠ずるところ幾何か是れが影響を蒙れるを認むるならん。此の集の詞書に大方漢文を用ひまた集中往々詩賦の式を擬したるよしは既に述べたり。なほ二三の例を擧げん漢學には大伴旅人卿か酒を讃する歌の中に

酒名乎聖跡負師古昔大聖之言乃宜左
古之七賢人等毛欲爲物者酒西有良師
中中二人跡不有者酒壺二成而師鳴酒二染甞

此の三首な前の解説と參照せば大方萬葉書の眞意は知らるべければ以下の引例はすべて讀みやすからんな圖り平假名交りの体に改むべし

と詠めるが如き又或人の七夕を詠める

機ものゝふみ木持ち行きて天の川打橋わたす君が來むため

の如きを始め或は夜光の玉をとりてよるひかる玉と詠じ或は七珍の寶をなゝくさの寶と詠むなど其の他無有何の里、藐姑射の山、龍馬、仙藥等故事故典を漢土に求めて詠ぜるもの少からざりき。さかるに佛教の影響もまた是れに讓らざりきなほ

なほく旅人卿の

價なき寶といふとも一つきの濁れる酒にあにまさらめや

と歌へるは無價寶珠といへる經論の句に據れるなり。家持卿の

現身の世は常なしと知るものを秋風さむみまぬびつるかな

と詠ぜるは無常寂滅の想より脱化せるもの、更にさる人の世間の無常を悲める歌にいへらく

天地の遠き始めよ　世の中は常なきものと語りつぎ　なからへ
來れ思ひ來れると云ふ天のはら　ふりさけ見れば　てる月も　みちかけ去けり　足引の枕詞山の木ぬれも　春されば卷にな花さき匂ひ　秋つけば露去も貧ひて　風交り　紅葉散りけり　現身も　かくのみな

らし　紅の　色もうつろひ　烏羽玉の　黒髪かはり　朝のゑみ　ゆ
ふべかはらひ（榮枯盛衰の習ひを云ふ）吹く風の　見えぬが如く　行く水の　とまらぬ
如く　常もなく　移らふ見れば　流るゝ涙　止めかねつも

と。蓋し宋之問が「有所思」の歎とおなじく又佛教思想にあらずや。かゝる例尙い
と多し。是れによりて觀れば當時僧侶漢學者また常人に至るまで一般に漢學若
しくは佛教思想の影響を感受せることあるを察すべし。但し其が中には强ち心
より這般の思想を喜ぶにあらざるも恰も輓近洋學流行の際に於て妄りに其の思
想を喧傳せし如く一時の好奇心に驅られてまか爲まゝもありぬべし。されば此
の集に載れる歌の趣はさま〳〵なれども讀みし人の數は多けれど仔細に全集を
貫通せる思想を繹ぬれば漢學思想にもあらず勿論佛教の旨義にもあらず所謂日
本民族が以て常の心となせる國民的性情にあり。茲に國民的性情とは敬神の念、
忠君の志氣さては崇祖の情をいふ約言すれば我が建國の基本とせる惟神の道彝
倫の教是れなり。實に此の性情は全集を貫流せり。孝謙天皇が遣唐使を餞し給
ふ御製に

空みつ（枕詞）倭の國は　水の上ゆ　地往くごとく　船の上は　床に居る如
大神の　鎮在る國ぞ　四の船（大使、副使、判官、主典の船也）ふねの舳ならべ　平らけく
早く渡り來て　返事（カヘリゴト）奏さん日に　相飲まん酒ぞ　此の豐御酒は

と歌ひ又山上大夫憶良が好去好來の歌に

神代より　言ひつてけらく　空みつ　倭の國は　皇神（スメガミ）の　いつくしきく
に　言靈（コトダマ）の　さきはふ國と　語りつぎ　言ひつがひけり（言ひつぎの延言）今の
世の　人もことゞ　目の前に　見たり知りたり　人さはに　滿ちて
はあれども　高光る　日のみかど　神ながら　愛（メデ）のさかりに　天の
下　奏（マウ）し給ひし　家の子と　撰び給ひて　勅旨（オホミコト）戴きもちて　唐の遠
き境に　遣され　まかりいませ　海原（ウナバラ）の　邊（ヘ）にも澳（オキ）にも　神集（カムツマ）り
うしはきいます（鎭座まします意）もろ〳〵の　大御神たち　船の舳に　導きまを
し　天地の　大御神たち　倭の　大國靈　久方の（枕詞）あまのみ空（從）
あまかけり　見渡し給ひ　事了り　還らん日には　又更に　大御神（ヨリ）た
ち　船の舳に　御手打かけて　墨繩を　延へたる如く　もてかへし

血鹿の崎より（肥前松浦郡の海邊なる岬をいふ）大伴の　三津の濱邊に　直はてに　御船は泊てん（船の直に着くを云ふ）恙なく　さきくいまして　早歸りませ

と歌へる如きは共に神祇を賴み給ひし好例とす。憶良は元來後に論ずる如く心性も文章も大かた漢土の風を愛せしものなりしに心底より湧出する自然の聲は尙かくの如く外教の思想にあらずして國風なりき。是れ後世に見えたる神道者流の外國の事とし云へば一向之れを排けて我れをのみ飾らんとするものゝ言ならば知らず心から外教を信ぜるものにして此の詠ありし事深く注意すべきなり。斯くの如きもの想ふに外國の思潮は此の頃既に人心を風化して其の勢力を現ずること甚しかりきと雖も惟神の道は未だ全く消滅することなく尙洽く民人の腦裏に浸染して其の思想の大部分を占めたりしに依るならん。此の外旅行の安全を祈り疾病の平癒を祈請する等の趣歴々集中に散見せり。

さて次に皇室に對する感念を觀察せんに其の關係は神に對すると些の異なるところなかりき。夫の大伴佐伯二氏の辭立に「海行かば水つく屍、山ゆかば草むす屍、大君の邊にこそ死なめ徒には死なじ」といへるは古より人口に膾炙して何人も知るところ、能く君臣の關係を說明せるものなり。さる人の歌に

高御座　天の日嗣と　天の下　まらしめしける　すめろぎの　神の命の、畏しこくも　始め給ひて　たふとくも　定め給へる　み芳野の　此の大宮に　在りがよひ　めし給ふらし（見させ給ふらんの意）武士の　八十伴の緒も　おのが負へる　おのが名負ひて　大王の　まけのまゝ（其の任命のまゝに從ひ）　此の河の　絶ゆることなく　此の山の　彌つぎ〳〵に　かくしこそ　仕へまつらめ　彌遠長に

とあるもまた能く臣たるものゝ義を盡くせるものと謂ふべし。是れ一には是等の人々の忠誠なるによれゝど概して云はゝ我が國民の性情之れを然らしめたるなり。而して此の性情や其の由來するところ遠く上古に在りき。按ずるに皇祖が皇孫に依し給ひし聖詔に胚胎し歴世服膺して永く臣民の彝訓となり、やがては變じて性情となり日本國民と此の性情とは離るべからざること恰も先天的に規定せられたる如くなりたるなり。されば古より天皇の爲に死生を顧みざりしもの擧げて數ふべからず。今著明なる一二の例を擧げんに垂仁天皇の御世に擧津

別皇子のために鳥取造天の湯河板擧が鵠を取りし事さては雄略天皇の御宇に小子部栖輕が勅命を奉じて雷神を捕へし事等は上世の事と去て姑く云はず推古天皇の御代に河邊臣が勅命によりて船舶を修造せし事迹等は我が上古の臣民が皇命を重んじたる狀態の一斑を窺ふに足るものなり。「推古天皇紀」に曰はく

是年遣二河邊臣(闕名)於安藝國一令レ造レ船。至レ山竟二船材一便得二好材一以名將レ伐。時有レ人曰雷靈木也、不レ可レ伐。河邊臣曰其雖二雷神一豈逆二皇命一耶、多祭二幣帛一遣二人夫一令レ伐。則大雨雷二電之一。爰河邊臣案レ劍曰雷神無レ犯二人夫一當レ傷二我身一。而仰待レ之雖二十餘霹靂一不レ得レ犯二河邊臣一(中略)遂修二理其船一。

と。河邊臣は皇命ならんには凡そ天地の間之れに抗すべき物なしと信じたるなるべし。是はまた明かに我が國民の常の心なり。天皇を神裔なりとする確信より起れるものなれば孰れの時代を問はず此の心なきはあらねども前に引ける歌にてもあるけき如く『萬葉』の歌人ほど此の心を言詞に表せるはなかりき。天皇を神裔なりとする例は「現つ御神」といひ「大君は神にしませば」といひ「遠つ吾が大君」とも「吾が大君神の命」ともいへる語集中に充ちたるにても知らる。天皇の行はせ給ふことをば神右隨といへる如きも亦其の類とや見つべし。されば此の確信は延いて萬事の上に現れ自然の山水を詠ずるにも大方此の心より觀察し禽獸も草木も山河谿谷も皆大君のために發生せるものと思惟し金銀米粟もしくは八百萬の神さへも多くは天皇のために存在せるものと觀じたりき。持統天皇吉野離宮に行幸の砌、人麻呂隨從して歌ひけらく

八隅しし　わが大君　神ながら　神さびせすと　吉野川　たぎつ河内に　高殿を　高知りまして　上りたち　國見をすれば　たゝなはる　青垣山の(枕詞)　青垣山の如き云ふ　山神の　奉るみつぎと　春べは　花かざしもち　秋たてば　もみぢ葉かざし　夕川の　○○○○神も　大御食に　つかへ奉ると　上つ瀬に　鵜川を立て(鵜に魚を取下すこと)　下つ瀬に　小網さしわたし　山川も　よりて仕ふる　神の御代かも

山川も　よりて仕ふる神ながらたぎつ河内に船出せすかも

又家持が陸奥國より金を出せる時之れを賀せる歌に

すめろぎの御代さかえんと東なるみちのく山に黄金花咲く

と詠めるが如き以て其の一斑を見るに足る。

斯く『萬葉』の歌人等は眞心より神祇を敬し君上を尊ぶこと厚かりしが此の心はやがて又祖考を崇敬する心ともなりて歌謳の上に現れたり。所謂君に忠なるものは其の父祖に孝なりといふ如く情の甚くところ相同じきに依れるか。「人の子は祖の名絶たず」とも「むなとも祖の名絶つな」とも詠ぜるは即ち追考の意を表せるものなり。

要するに『萬葉集』の歌人等は能く國民の精神を發揮せるものなり。神祇を敬するも君上を尊ぶも祖考を追崇するもすべて古來我が國民が精神として貴びしところなり。而して其の聲大なること『萬葉』歌の如きはあらず其の眞摯なること『萬葉』歌人の如きはあらざりき。眞に豐富なる想像と忠誠なる眞情とを以て其の聲に活氣を與へたるは獨り此の集の歌人あるのみ。偶〻漢學佛教の思想を交ふるものなきにあらずと雖もそは恰も晨星の寥々たるに似て未だ比するに足らざるなり。故に『萬葉』歌人の見るべき思想は此の國民的性情を以て充されたりと謂ふべき也。さか云へばとて誤解する勿れ單に國民的性情の發揮者たりしに止まりきと。『萬葉集』の歌人ほど自然の美を喜び人生の哀樂を心から歌へるもの未だ曾てあらざる也。彼等の自然美を觀ずるや多く直覺し彼等が人生の哀樂を目擊するや常に同情したりき。後世題詠によりてのみ作歌する比にあらず秀拔なるものにありては自然の妙力を其の中に見るが如く直に現場に在るが如く趣味言ふべからず。赤人が「不盡山を望める歌」憶良が「貧窮問答歌」の如きは衆口一致其の妙を稱せざるなし。また此の集の歌はなべて勇壯活潑の風を帶ぶとは既に先輩の唱道する所なり。

此の節を終るに臨み一言の添ふべきあり。此の集には全く主觀を離れて專ら客觀の旨のみを詠みたる歌ある事是れなり。沒主觀の歌として寫景狀物の歌も見えつれどなほ特筆すべきは物語歌の數首見えたる事とす。元來我が邦の歌謳とし云へば大抵主觀的なるに限られたるが如くたま〳〵客觀の旨を詠ずるものも單に寫景狀物に止まれるが多き中に專ら敘事を主とせるものゝありしは注意すべき件にあらずや。其の歌とは即ち某人の「水江浦島子」を詠みて

春の日の　霞める時に　住の江の　岸に出で居て　釣船の　とをらふ見れば　古の　事ぞ思ほゆる　水の江の　浦島の子が　堅魚釣り

鯛釣り誇り　七日まで　家にも來ずて　海界を　過ぎて漕ぎ行くに
わたつみの　神の少女に　たまさかに　い漕ぎはしり　あひかゝらひ
事なりしかば　かき結び　常代に至り　わたつみの　神の宮の　内
のへの　妙なる殿に　携はり　二人入り居て　老いもせず　死にもせ
ずして　長き世に　ありけるものを　世の中の　うつつけき人の　吾
如兒に　告げて語らく　「暫くは　家に歸りて　父母に　事も語らひ
明日の如　我も來なむ」と　言ひければ　妹が言へらく　「常世べに　又
歸り來て　今の如　逢はむとならば　此の櫛笥　開くなゆめ」と　そこ
らくに　堅めし言を　住の江に　歸り來りて　家見れど　家も見かね
て　里見れど　里も見かねて　怪しと　そこに思はく　「家ゆ出でゝ
三年がほどに　垣もなく　家消えめや　此の箱を　開きて見てば
本の如　家もあらむ」と　玉櫛笥　少し開くに　白雲の　箱より出でゝ、
常世べに　棚引きぬれば　立ちはしり　叫び袖振り　こいまろび　足
ずりしつゝ　忽ちに　心消失せぬ　若かりし　肌も皺みぬ　黑かり
し　髮も白けぬ　ゆな〳〵は（果てはの恐）　息さへ絶えて　後つひに　命死
にける　水の江の　浦島の子が　家どころ見ゆ

といへるを云ふ是れ集中に見えたる物語歌の重なるものなり。是はかの浦島太郎の事迹を古傳說によりて詠めりと覺ゆ。されば格別此の歌人が想像に奇拔なる所あるにあらねども物語歌もまた我が長歌體に詠じ得べかりしを知るべし。但し健全なる發達をなさずして中途に止みにしはかへす〳〵も惜むべきことにこそ。

以上を『萬葉集』の全躰に關する說明とす。なほ漏れたるもあるべけれど其は別に此の集の重要なる歌人に就きて論ずる條下に見よ重複を恐れて此にはわざと省けるもあればなり。そも重要なる歌人とは誰ぞ柿本人麻呂、山上憶良、山部赤人及び大伴家持をいふ。これらの歌人は孰れもやゝ年代を異にして出でたれば若し仔細に其の特質を査察せば併せて此の期に於ける歌謳の變遷を精密に知了するを得ん。予輩が此の四人を擇べる所以も一は此の點にあり即ち啻に彼等が卓出せる故のみにもあらず各自獨特の長所を具有せるゆゑのみにもあらず要は此の

四人が最もよく奈良朝全期の歌人を標致せりと思惟するに依れるなり。

第三節　『萬葉集』中の歌人

柿本人麻呂以前の歌人　柿本人麻呂　山上憶良　山部赤人

赤人以後の歌人　大伴家持

其の一　柿本人麻呂以前の歌人

當時代の歌謳の『萬葉集』に載れる中にて最も早きは聖德太子の詠歌なりとす。太子は推古天皇の御宇にまし〳〵たれば其の歌は當に此の期の初つ方に屬すべきものなり。されども傳はれる歌極めて拙く且かゝる略史にて評論を試むべき程の價値ありとも覺えねば今は略しつ。學者須らく前期の歌謳に比してさしたる進歩なかりきと見れば大差なかるべし。さかるに舒明天皇の頃よりは稍〻進歩の勢をあらはして天智天皇の頃にはあはれ後世に誇るべきほどのものも見え初めき。額田女王の如きは特に其の卓越せるものなりけらし。天皇或時藤原鎌足に向ひ春山の花の艶（ニホヒ）と秋山の紅葉の彩（イロ）といづれかまされると問はせ給ひし時に女王が

冬ごもり　春さり來れば　鳴かざりし　鳥も來鳴きぬ　咲かざりし
花も咲けれど　山をしみ（山の草木の茂くしての意）入りても取らず　草ふかみ　手
折りても見ず　秋山の　木の葉を見ては　紅（ベニ）づをば　取りてぞしぬぶ
青きをば　置きてぞなげく　そこし面白し　あき山われは

と詠みてことわりたる歌を見よ用語も格調もいちじるく進歩の趣を現ぜり。前に題詠めきたるものも出でつといひたるは即ち此の歌の事なり。さてまた天武天皇の御代に至りては天皇を初め歌を詠ずるもの次第々々に多かりき。中につきて鏡女王、紀皇女、大津皇子等最も高名なり。天皇嘗て吉野山御幸の砌歌ひ給はく

よき人の勝地（ソヒト）よく見てよしといひしよしのよくみよよき人よく見つ

と、是は既に詞花を弄するの迹ありと謂ふべし。かゝれば一般の進歩はいやいふまでもあらじ。天皇崩御のゝち皇后（持統天皇）の追慕し給へる歌にても知らるゝが如く此の頃は尚實感を其のまゝに寫せるからによく各人特殊の性情を發露して、稍〻抽象的性格を離るゝに至りぬ。詞形はた一定の格式を備へて整然たるもの

ありき。然れば歌謳の世界はまさに諸般の準備を完了して一大詞傑の出づるを俟つさまにも似たりけり。さかるに恰もよし此の際嶄然として頭角を詞壇に抽んづるものとそ出で來にけれ。即ち當代を睥睨し併せて後世の崇敬を博したる歌聖柿本朝臣人麻呂是れなり。

其の二　柿本人麻呂

人麻呂は紀元千三百年代天智天皇の御代（或史家は云ふ此の天皇の元年とも）に大和（或は石見ともいふ）にて生れきといひ傳ふ。其の精細なる閲歴はこれを知るに由なしといへども史家の推定するところに從へば朱鳥二年頃齢廿六七歳にて始めて朝に仕へ奉りて草壁皇子の舍人となりしことあるが如し。さかるに其の皇子は明る三年の四月といふに不幸にも薨じたまひしかば舍人の職はおのづから解かれしも其のまゝ朝廷の下官にぞ採用せられける。是れより聖覩に陪從し或は諸皇子に伴ひて近畿諸國の名勝故跡を探り到るところに其の歌ぶくろを充たせりき。朱鳥八年の頃に至り高市皇子に仕へ奉りてまた舍人となりぬ。高市皇子は壬申の役に大功を奏せさせ給ひ終に太政大臣の職にも上り給ひし御方にて歌なども能くせさせ給ひけり。かゝれば人麻呂は此の皇子をば二なき君と頼みまつりしに皇子もまた不幸にして其の十年七月に薨去し給ひぬ。此の時に於ける人麻呂の悲歎は如何ばかりなりけん胸中万斛の涙は滔々百四十九句の一大雄篇となりて溢れたりき。其のゝち再び朝に仕へてまた諸國に扈從し奉れり。其の間知己妻妾のみまかれるもの許多ありしかば忠誠なる心の常に皇德を稱ふるものゝ流石に悲哀の情もだしがたく見聞する物につけつゝ咏嘆の聲をもらせり。後年筑紫に使し歸りて又讃岐へも渡りしが終に石見の國にて逝りぬ。時は元明天皇の和銅二年にて齢はわづかに四十八歳なりきとぞ。

さて人麻呂の歌の『萬葉集』に載れるものはすべて七十八首あり別ちて長歌十七首短歌五十九首とす。其の歌には相思の情を寄せたると哀悼の意を表せると或は遊獵、懐古、旅行、祝賀等自然の題目に接して詠したるものとあり。されば歌思の性質はさま〳〵なれども孰れも其の調雄渾にして高潔の思念至誠の情内に充滿せり。就中忠君の念愛他の情を抒べたるものは句々肺肝より出でゝ迸るが如し。蓋し忠君の念は當時代を一貫したる特相なれば是れありとて敢て珍しとするに

は足らねども人麻呂の如きは當に其の錚々たるものにてぞありぬべき。例せば彼れが近江の荒都を過ぎて懷舊の情を歌へる

玉だすき　畝火のやまの　かしはらの　日知りの御代ゆ　あれまシし　神のことく　つがの木の　いやつぎ〳〵に　天の下　しろしめししを　空にみつ　大和をおきて　あをによし　奈良山をこえ(下略)

さては輕皇子に陪して安騎野に宿れる時に詠める

八隅しし　吾が大王(オホキミ)　高ひかる　日の皇子(ミコ)　神ながら　神さびせすと神の遊びなさるさ　(ゐ)ふふとしかす　都をおきて(下略)

を初め其の詠歌には建國の狀態を敘述せると共に天皇の神裔なることをほのめかせるもの尠からざりき。おもふに至誠の士にあらずして如何でかかゝるべき。實に至誠の心は人麻呂の詠歌をして絶えず生命あらしめたるものなり。乃ち此の心は單に皇室に對して發動したるのみならず私にありても常に躍如たるものありき。嘗て石見の國より愛妾に別れて都に上れる時の歌に

石見の海(ミ)　角(ツノ)の浦まを　浦(ウラ)まは浦の轉　めぐりの轉　浦なしと　人こそ見らめ　潟なしと　人こそみらめ　よしゑやし　よしゑやし　ふとしは助辭也　即ちよしなり　浦はなけども　よしゑやし

潟はなけども　いさなとり(枕詞)海邊(ウナヒ)をさして　和田津(ニギ)の　ありその上に、か青なる　玉藻沖つ藻　朝羽振る(朝夕風の羽振りに譬ふ)風こそよせめ　夕はふる　涙こそきよれ　涙のむた(涙と共に)かよりかくより　玉藻なす　よりし妹を　露霜の　置きてし來れば　この道の　八十隈毎に　萬たび　顧みすれど　いや遠に　里はさかりぬ　いや高に　山もこえ來ぬ、夏草の(枕詞)思ひしなえて　しぬぶらん　妹が門見ん　なびけこの山

といへる何すれぞ其の聲のかくばかり悽絶なる。これにつけても人麻呂の愛情に富めりし一端を卜するを得ん。更に其の嫡妻のみまかりし時の哀悼歌

空蟬と　思ひし時に　たづさへて　わが二人見し　はしりでの(門近きの處)堤に立てる　槻(ツガノキ)木の　此(コヽ)彼の枝の　春の葉の　しげきが如く　思へりし　妹にはあれど　たのめりし　子等にはあれど　世の中を　そむきしえねば　かぎろひの　もゆれあら野に　白妙の　天ひれがくり(殯送)　の旗な　鳥じもの(枕詞)朝立ちいまして　入日なす　かくれにしかば　吾妹子が　形見における　みどり子の　こひ泣くごとに　取りあたふ　物

しなければ　男じもの　わきばさみもち　吾妹子と　二人吾がねし
枕つぐ（枕詞）嬬屋の内に　畳はも　うらさびくらし　夜はも　いきつきあ
かし　なげゝども　せんすべしらに　こふれども　逢ふよしをなみ
大鳥の（枕詞）羽易の山に　吾が戀ふる　妹はいますと　人のいへば　石根
さくみて（岩を踏みさきて）なづみ來し　よけくもぞなきさいふ也　現身と　思ひし
いもが　かぎろひの　ほのかにだにも　見えぬ思へば
こぞ見てし秋の月夜はてらせれどあひみし妹はいや年さかる
ふすまぢをなはよりなり引手の山に妹をおきて山路を往けばいけりともなし

の如き言々句々血肉かと疑はしむる概あり讀者をして覺えず悽愴たらしむ。人麻呂はまた他人に對しても同情を表することさながら我が身上に於けるが如く切なりき。明日香皇女のみまかれるときその夾なる忍壁皇子の一人さびしく日々皇女の墓をとはせつゝなげき給ふを見て人の上とは思はなくに

飛ぶとりの　明日香の川の　上つ瀬に　いはゐしわたし　下つ瀬に
うちはしわたし　石橋に　生ひなびける　玉藻もぞ　絶ゆれば生ふる
打橋に　生ひをゝれる（蘿のいふ）藻の靡く川藻もぞ　枯るればはゆる　何しかも
吾が大君の　たゝせば　玉もの如く　ころぶせば　川もの如く　な
びかひし（臥をいふ）宜しき君が　朝宮を　忘れ給ふや　夕宮を　そむき給
ふや　現身と　思ひし時に　春べは　花折りかざし　秋たてば　も
みぢばかざし　敷妙の（枕詞）袖たづさはり　鏡なす　見れどもあかず
望月の　いやめづらしみ　おもほしゝ　君とをり〳〵　いでまして
遊びたまひし　御食（ミケ）むかふ（枕詞）木のへの宮を　常みやと　定め給ひて
あぢさはふ（枕詞）めごともたえぬ（相見る事の絶しなを云ふ）そこをしも　あやにかなしみ
ぬえ鳥の（枕詞）片戀しつゝ　朝鳥の（枕詞）通はす君が　夏草の（枕詞）思ひしなへて
夕づゝの（枕詞）かゆきかくゆき　大舟の（枕詞）たゆたふ見れば　慰むる　心も
あらず　そこゆゑに　すべしらまし（今はせんかたなしやの意）や　音のみも　名のみも
絶えず　天地の　いやとほながく　志ぬびゆかむ　御名にかゝせる
明日香河　よろづ世までに　はしきやし　吾が大君の　かたみかこゝを」

と詠みしが如き句格の變化に富むのみならず同感の情溢るゝばかりなり。其の

他吉備津采女の死後に詠める又は讃岐の狹岑島に死人を見其の妻子の悲哀を推測して歌へる等かゝる例尙いと多く孰れも哀惋の情云ふべからず。

かく人麻呂の歌は至情を以て其の句を行れり。志かれども若し彼れが歌にして單に之れにのみ止まらしめば未だ上乘のものとなすべからず。況や歌聖として推重することをや。然らば人麻呂の歌聖たるところは何れにかある。至誠の情に伴ふに豐富なる想像を以てし措辭はたよく緩急に應じて圓滿に其の感想を發露し得たるにあり。勿論壯時の作には往々句法の調和せざるものあり晩年の作にも亦稀に妄想に類せるものなきにあらずと雖も人麻呂ほど我が邦に於て歌謳の要素を兼備し併せて調和し得たるものはあらじ。例へば彼れが感情の熾盛にして想像の豐富なりしことは其の長歌の句數多きによりても想はるべく其の措辭の妙を得たりしことは格調の變化極めて自在なるにても知らるべし。乃ち人麻呂の長歌は最も短きものにして尙廿五句最も長きは百四十九句に及べるもあり。こは彼の高市皇子の薨去を哀悼せる歌にて『萬葉集』中また第一の長篇なりとす。すべて彼れの歌は序詞を用ひ冠辭を挾み疊句聯句を用ふると甚だ多く

繰語はた尠からず。されども其等は各〻聲調をして波瀾多からしめ一も不用なるものあらざるなり。これ彼れが非凡なる才藻を有せりし故にして尋常の歌人と異なるところなり。是をもて或は人麻呂の歌を指して一氣呵成の詠なりといふものあり。巧妙なる歌思の時としては雄渾壯大、時としては優婉細緻、能く意に應じて變りゆくさま、まことに自然にして斧鑿を經ざるが如し。錦心繡腸ひとたび感すれば百千の想像一時に湧き用語はた手に隨ひて出で來り立どころに長篇をなせりしものか。さればにや彼れの歌は長歌こそおしなべて短歌にも優りたれ。蓋し短歌は其の詞足らずして豐富なる想像を包容せしめがたきに依れりしなるべし。

次に又人麻呂の歌は概して現實界に限れり。乃ち彼の悅ぶは現實の境界を喜べるにて彼れの悲むも亦現實の境界を悲めるなりき。故に彼れの歌には決して過現未の界に徹する如き幽玄深邃なる哲理的感想は得て見るべからず。其の想は高潔なり眞率なりといふもいはゞ我が心から普通の人情を深刻に歌ひたりといふに止まるのみ。故に若し此の時代にありて一層感想の幽玄なるものを求めな

ばむしろ或は復に下れる小歌人などをや擧げつべき。然るを世の人後者をおきて專ら前者を稱するものは上に述べたる如く至誠の情豐富なる感想共に非凡にして殊に聲調の妙趣企及すべからざるものあるによれり。兎に角かれが後世の歌界に及ぼせる直接若しくは間接の影響の尠少ならざりしこと想見するに堪へたり。其は尙のちに至りておのづから分明なるべし。

さてかく人麻呂は玲瓏たる光彩を以て當代の詞壇を飾れりしが之れと同時に若しくは稍〻後れて又一種の異彩を添へたるものありき。一は山上太夫憶良にして他の一は山部宿禰赤人なりとす。

其の三　山上憶良

憶良は何處如何なる人の子なりしか又何時の頃に生れていつの年に逝りしか共に明かならず。但し『續日本紀』並に『萬集集』の歌序および左註等の零碎なる記錄によりて立てたる前人の考證に從へば天平五年に齡七十四歲にて逝れりきといふ。さすれば其の生れたるは齊明天皇の六年なるべし。之れを人麻呂の在世に比するに二年先ちて世に出で廿四年後れて世を去りしものなり。憶良が幼時の消息はた知るに由なし。大寶元年正月遣唐少錄を命ぜられ執節使粟田眞人に隨ひて海を航せんとす偶〻海上風波のために遮られ事果てずして筑紫の沖より難波に歸りぬ。後二年を經て改めて彼の地に渡り滯留すること一年にして慶雲元年歸朝せり。和銅七年正月從五位に叙せられ靈龜二年四月伯耆守に任ぜられぬ。養老五年任滿ち都に還りてのちは專ら朝廷に伺候し來りしが神龜三年更に筑前守になされて任處に在る事六年、その頃最愛の妻子を世に先てぬ。天平三年都に還るに及びて兎角氣勝れざりしが越えて五年に至り遂に此の世を辭しきといふ。

憶良は頗る漢學に通じかねてまた佛敎をも信じたりき。詩文の今日に傳はれるもの皆以て彼れの人となりを表明せざるはなし。乃ち其の殘れる詩文に就いて推測するに彼れは漢學並に佛敎の旨義によりて影響せられたる尠少ならざりしが如し。就中漢學の影響は歷々として歌謳にまで其の痕跡を印銘せり。彼の有名なる惑情をかへさしむる歌の如きは最も恰好なる一例なるべし。先づ序していはく

或有人不知敬父母忘侍養不顧妻子輕於脫屣自稱異俗先生。意氣雖揚青雲之上身體猶在塵俗之中未驗修行得道之聖蓋是亡命山澤之民。所以指示三綱更開五教遣之以歌令反其惑。歌曰

父母を見れば尊し　妻子見れば　めぐしうつくし（愛しむ愛く）世の中は
なにしかくぞとわり（以上序文に養し妻子を愛するは世上の通理ぞといへる也）三綱中の二綱とす、父母を孝（ツカヘ）枕詞か
からはじもよ　ゆくへしらねば　うけぐつ（穿ち破れたる沓）を　脫ぎつる如く
踏みぬぎて　行くちふ人は　岩木（イハキ）より　なりてしひとか　汝（ナ）が名のらさね
天ゆかば　汝がまに〳〵　土ならば　大君います　この照らす日月の下は　天雲の　むかふすきはみ　たにぐゝの　さわたるきはみ　はるきこしをす　國のまほらぞ（まは眞にて稱辭、ほは物につゐまれこもれるを古語、らは助辭、要する）
にはに（奥區すいへん程の義）かにかくと　ほしきまに〳〵　まかにはあらじかさはあるまじくこさにては
なき（なを第三綱と意、以上を第三綱とす）
ひさかたの天路はとほしなほ〳〵に（心靜に思ふ事なく）家に歸りて生業（ナリワヒ）をしまさに（生業を營みませ）

畢竟其の意は自序に云へる三綱五教の旨を勸むるにあり。想ふに此の教は古より我が邦人の尊奉したるところ、儒教の傳來によりて始めて得たるにはあらねども憶良の如くまかく正確に表白せん事は彼の教旨を講習したる結果たらずばあらず。さればにや彼れの詠歌は此の歌に限らず其の思想他の同代の歌人に比すれば頗る細密明晰にして秩然たる趣あり。彼れが敬神忠君の念に厚かりしは前に出せる好去好來の歌にてまるく愛情の深かりしは嘗て筑紫に在りて都に留め置きたる子等を思ひいでゝ詠めるまたはある時宴席より罷らんとして口ずさめる歌等にて推しはかられる。況して妻子を失へりし時の詠歌の如きは其の想おさなびたれども愷切なる悲哀の感、人をして泣かしむる妙あり。さるからに此の至情はやがてまた人の上にも及びて同感の情を詠める歌の中には優れたるものいと多し。就中次なる歌は其の最なるものなりとす。

風まじり　雨の降る夜の　雨まじり　雪のふる夜は　すべもなく　寒くしあれば　堅鹽を　とりつゝ（塩なくひたるの意）なめろひ（かたまりたる鹽をかきくひしての意）糟湯酒（酒の糟なる）
湯に浸（ふた）るを云ふ　うち啜（ス）ろひ　しはぶかひ（ふは鼻）ぶき鼻びし〳〵に（啜りて云ふを略して）しはぶかと

あらぬ　鬚かきなでゝ　吾をおきて　人はあらじと　誇ろへど　寒く
しあれば　麻ぶすま　ひき被ぶり　布かたぎぬ　ありのことゝ　着
襲へども　寒き夜すらを　われよりも　貧しき人の　父母は　飢えさ
むからん　妻子どもは　乞ひて泣くらん　この時は　如何にあつゝか
汝が世をわたる　天つちは　廣しといへど　吾がためは　狹くやなり
つる　日月は　明かしといへど　あがためは　照りやたまはぬ　人皆
かわれのみかあかる　わくらはにたまさいふ人とはあるを　人なみに
あれもなれるを　綿もなき　布かたぎぬの　海松のごと　わゝけさが
れる　かゝふ布帛の破れて殆ど無用となれるもの　のみ　肩にうちかけ　伏廬の　まげ廬
曲りよろぼひたる廬をいふ　の中に　ひた土に直に土の上に　藁ときあきて　父母は　枕のか
たに　妻子どもは　あとの邊に　圍みゐて　憂ひさまよひ　かまど
には　けぶりふき立てず　甑には　蛛の巣かきて　飯炊ぐ　事も忘れ
て　ぬえ鳥の　のどよびをるに　いとのきて　短き物を　端きる
といへるが如く　苫杖とる　里長が聲は　閭戸まで　來たちよばひ

ぬ　かくばかり　すべなきものか　世の中のみち

こは題して貧窮問答歌といふ言々句々皆至情をもて充てり。おのが境遇の稍〻足れるに比して細民の貧苦に沈淪するさまを描く双々相對することろ一層貧者の窮苦を思はしむ。憶良任處に在りて親しく貧富の懸隔せるを見、そを慨嘆せるあまりに作りたるものにや。そは兎まれ從來歌謳の大方は貴族の手になれるものから詠ずるところ自然の風光にあらずば通常貴人の間に起れる出來事に限りき。あかるに憶良の此の歌は復に下れる細民の階級を題として詠出したるものなれば正しく當代の詞壇に比類なき一生面を開きたるものとして特筆すべきなり。されど詞形に就いていへば過強の姿ありとは云ひ得べきも粗笨なること勿論なり。是は歌人をもて任ぜざる憶良の事とて素よりさもあるべき處なりとす。但し漢學佛教の意を汲み之れを我が固有の國語に同化してよくもあしくも云ふべき程の事いひ盡して遺憾なかりしはまた賞揚すべし。

憶良の思想は前に述べたる如く主と儒教の上より得たるからに着想の趣くところおのづから多く人事にありて且つ現世的なりき。さはれ稀には花卉草木の自

然美を詠じ或は未來の觀念をほのめかせるものなきにあらずと雖も其等は概して歌としては劣れるものゝみ。自然美を詠じて神に入れるは次に掲げんとする山部宿禰赤人なりとす。憶良に一の著者ありき類聚歌林といひぬ。當時の名歌を集めて坐右に備へ自己が詠歌の手引草となせりしものか。今は絶えたれば其詳細を知るに由なし。

其の四　山部赤人

赤人の傳はた詳かならずされど神龜元年より天平八年までの歌『萬葉集』に見えたれば聖武天皇の頃に盛なりし人と思はる。其の官は舍人などにやありけん御幸に從ひて紀伊、吉野又は伊豫の温泉等の諸勝地を遊覽し詔に應じて詠歌を奉りしことあり。その後東國に下りては駿河の富士に千古の白雪を賞し下總の葛飾に眞間の手兒名の墳墓を訪ひつゝ到る處に多少の詠を遺しぬ。中に就いて不盡山を望める歌の反歌は絶世の名吟として三尺の幼童すら尚口にする所なり。顧ふに『萬葉集』の歌人中最もよく自然の美を發揮して入神の境に到れるもの赤人に若くものなからん。恂に彼れが自然美を詠ぜる歌は音調特に美妙にして想像はた穩健優に景物を寫して激越ならざるうちに尚千鈞の力ありさながら自然のまらべに合せるが如し。換言すれば其の風姿風情共に閑雅にして韻致に富み氣力充溢して生動せるが如きもの是れなり。其の餘の詠歌もまた是れに讓らず典雅の趣を具ふ。されども仔細に觀察すれば其の長歌は概して短歌に劣れることと人麻呂の長歌の率ね短歌に優れると相正反せり。こは赤人の想像人麻呂の如く豊富ならざりしによれるか。前にも既にいひたる如く人麻呂の長歌は長きは百四十九句に及べるもありて言ふべき程の事は悉く具り其の他には一言の加ふべきものなきさまなりしに赤人のは一般に句を聯ぬること短く而もいはまほしきところをもいはで意を轉ずる觀あり。例へば不盡山を望める歌は人々の認めて妙と稱するものなれど往々其の言の促迫せる嫌あるを覺ゆ。學者須く左に掲ぐる二首の長歌を比較對照せよ思ひ半ばに過ぐるものあらん。

不盡山を望める歌一首並に短歌　　山部宿禰赤人

天つちの　わかれし時ゆ　神さびて　高くたふとき　駿河なる　不盡の高嶺を　天のはら　振りさけ見れば　わたる日の　かげもかくろひ

照る月の　光も見えず　雲ら雲も　い往きはゞかり　時ぞくぞ時なら
雪は降りける　語りつぎ　言ひつぎ往かん　不盡のたかねは

田子の浦ゆ打ちでゝみれば真白にぞ不盡のたかねに雪はふりける

不盡山を歌める歌一首並に短歌　よみ人しらず

なまよみの枕辭甲斐のくに　うちよする枕辭駿河のくにと　こちごちの
くにのみなかゆ　出で立てる　不盡のたかねは　天雲も　い往きはゞ
かり　とぶとりも　飛ひもの　ほらず　もゆる火を　雪もてけち　ふ
る雪を　火もてけちつゝ　いひもえず　名づけもしらに　あやしくも
います神かも　せの海と　名づけてあるも　その山の　つゝめる湖ぞ
不盡川と　人の渡るも　其のやまの　水のたぎちぞ　日の本の　倭の
くにの　鎭とも　います神かも　寶とも　なれる山かも　駿河なる
不盡の高根は　見れどあかぬかも

ふじの根にふりおける雪は六月の望にけぬれば其の夜ふりける

不盡の嶺をたかみかしこみ天雲もいゆきはゞかりたなびくものを

共に清適共に莊高、さりながら後なるは復に前なるに勝りて言豊に意展びたり。比較上赤人の長歌の妙域に在らざりしこと想見すべきなり。まかはあれども彼の短歌は此上なきまでに神韻の掬すべきものあり。

和歌の浦にあほみち來れば潟をなみあしべを指してたづなきわたる

いにしへの古き堤は年ふかみ池のなぎさにみくさ生ひにけり

とは其の一例に過ぎされど如何に其の調の高きよ人麻呂の短歌といへども到底此の妙趣には及ふべからず。景致見るが如く感慨はた極りなし。赤人をして高手の名を博せしむるもの蓋し是等の歌ありしによるめり。紀貫之朝臣かつて『古今集』の序に二人を評して「人麻呂は赤人の上にたゝん事かたく赤人は人麻呂の下に立たんことまた難し」といひたるはさることなから彼れは雄渾なる長歌に於いてこれにまさり是れは簡潔なる短歌によりてかれに優れり。是れを近世衆口一致の評論とす。眞淵翁もまた人麻呂を評して「その長歌の勢は雲風に乘りて御空行く龍の如く詞は大海の原に八百潮の湧くが如し。短歌の調べは葛城の曾津彦、眞弓を引ならさんなせり。深きかなしみをいふ時は千早振るものをも泣かし

むべし」といひ赤人を論して「人麻呂とうらうへなり。長歌は心もおらべもたゝ清らを盡くせり。短歌こそこれもひとりの姿なれ。巧をなさず、あるがまに〳〵云ひたるが妙なる歌となりにしは本の心の高きがいたりなり。たとへば横槌の車して大路を渡るぬしのあからめもせぬが如し」といひし事あり評し得てよく各自の特質を道破したるものと謂ふべし。

さて赤人は自然美の詠者として特に其の妙を極めしが彼れはまた萬葉歌人が通有せる特質をも決して缺かざりき。彼の春日野の詠さては聖武天皇の播磨の國印南野に御幸せし時に陪從してよめる歌等はかれが皇室に對する觀念の一斑を窺ふべく次に敏馬浦の詠及び辛荷島の歌などは懷鄕の情を歌へるものから兼て彼れが愛情の一端を卜するに足るべし。人生に對する又は宇宙に對する觀念は素より知るによしなしと雖も其の詠のあらぬによりて察すれば別にかゝる觀念を抱けりとしも覺えず未來に對するはた然り。要するに赤人も現世的なる萬葉歌人のなべての例には漏れぬなりけり。

其の五　赤人前後の歌人

赤人全盛の前後はすなはち當期の歌界の最も盛榮の時期なりしを以て歌人の輩出せるもの彬々として相踵ぎたり。大伴宿禰安麿は文武天皇より元明天皇の頃に出でゝ人麻呂と稍〻時を同じうせり。その子に旅人及び阪上の郎女といへるありき元明元正二帝の御代を年の壯にて經たるものなりけらし。旅人は父に襲きて勇壯の調を唱へ郎女はた女性ながらに雄々しき風あり。而して此の郎女大伴宿禰宿奈麻呂に嫁して田村大嬢、阪上大嬢などいふを生めり。二女また母に劣らぬ才藻ありき。蓋し『萬葉集』中女性歌人の錚々たるもの、詠ずるところ情思纒綿坐ろに人を動かす趣致を具ふ。釋滿誓及び三方沙彌はまた元明元正二帝の頃にありて盛に佛老の旨義を歌ひ志貴皇子、長屋王等も其の頃の能手として後世に數へらる。笠朝臣金村、高橋連蟲麻呂、長忌寸意吉麻呂等はやゝ時を後れて世に出でつゝ皆な斯道の功者として其の名現はれたり。概して云はゝ莊重の音は意吉麻呂の歌に歸すべく毅然たる丈夫の氣魄は蟲麻呂の詠にぞ見るべかりける。金村は其の詞調こそ極めて巧みなれ想は足らぬがちにて韻致に乏しく往々平弱に流るゝ傾あり。されど是等の歌人は尙當代の詞傑たるに耻ぢず其の詠歌いづれも

諷詠に適せざるなし。

そも彼等の詠歌はかく或は平弱に或は勇壯に或は優婉典雅にして其の題目とするところも各〻異なりといへども歸着せる主要の點は例の皇室に對する觀念まづ一貫して主位に居り相思の情一般に第二位を占めたり。或は雪月花鳥の節物を詠ぜるものいと稀にはなきにあらずと雖もしなべては其も或種の感想を寄せんがための料たるに過ぎざりき。若しそれ釋滿誓等が人生の無常變化流轉の相を詠ぜる如きは特に異常として記すべきのみ即ち沙彌なりしがゆゑに斯かる詠歌もありけることゝ思はる。此の故に是等小歌人といへども感情及び思想に於いては決して人麻呂赤人の輩にも寸毫を輸せざりしなり。只〻想像の巧かく豐富ならぬと措辭の自在ならざりし故をもて靈活の力を缺けりし事當代に於ける歌人の地位を輕輕する主因なりとす。

そのうち尙世を下りては聖武天皇の朝よりかけて孝謙天皇の頃に橘朝臣諸兄、同奈良麻呂ありき。諸兄は『萬葉集』撰者の一人なるべしといふと上に見えたり。歌は巧妙なりといふべきほどにはあられども決して拙きものにあらず。奈良麻呂はた然り。次に大伴宿禰駿河麻呂、同池主をはじめ同傳見等ありき。是等は其の歌の數あまりに多からずといへども其の調いみじく想もまた見るべきものあり。されども此の時にあたりて特に傑出せるものを大伴宿禰家持とす。家持は此の期の歌人を殿せるものにして其の歌のすぐれたるもの尠からず、數また極めて多し。更に節を改めて聊か精細に之れが評論を試みしめよ。殊に此の期の歌壇の紹介者として其の功蹟の沒すべからざるものあればなり。

其の六　大伴家持

家持は大納言旅人の子にして安麻呂は其の祖父たり。生涯の年月並に行年を詳にせず。聖武天皇の天平年中より孝謙、淳仁、稱德、光仁の四朝に歷事し桓武天皇の延曆四年(一千四百四十五年)に薨じぬ。家持は父祖共に高位の人なりしかばまづ內舍人に擧げられしが頓に累進して遂に中納言持節征東將軍を拜命し位は從三位にまで進みたり。家持の歌の年序を『萬葉』に記せるは天平八年秋九月の作を首とす。その程は延曆四年薨去の時より逆算すれは四十九年前なりしをもつて彼れ未だ弱年の頃なるべし。其れより彼れの歌の此の集に見えたるもの擧げて

數ふべからぬほどなり。天平寶字三年に至りて終る其の間年を經過する事廿五年なり。家持は、家世々武衞の職にありしかば常に忠誠の心を抽んぢ只管父祖の名を辱めざらんと務められし事自詠の上にまで顯れたり。此の人歿後二十餘日死屍いまだ葬らざるに大伴繼人といふもの族人藤原種繼を殺せしことに連座して官田を沒收せられ官位並に追除せられき。まかるに承和年中伴善男其の無罪を訴へたりしかば佞者の讒惑なりし事實分明となりて官位本の如く復せられたりといふ。

予輩は『萬葉』歌人の特質として敬神忠君の念熾盛なりしよしを繰りかへす事既に數次に及べり。されば今家持の歌評をものするに臨みては殊更にこれを反覆する必要なかるべし。崇祖の情に於ても改めていふべきにあらじ。學者すべからく當期の歌人の特質として其の詞壇に於ける地位高ければ高きほど是等の諸念の强盛なりしとを想へば足れり。蓋し『萬葉集』は明見に應じて集錄したる書なりといへもと〳〵其の編者等の貴族なりしからに其の限界多く貴人の間に存するを以て此の集に見えたるほどの歌人は多少皇室に對する關係を有せざるものなかりしかば勢ひ此の念のあらるく其の歌謳の上に現れしなりけり。家持の如きは殊に然りとす。故に予輩は茲に家持の評には其の思想若しくは感情の那邊に向へりしかを問ふことなく純ら想像並びに措辭の上に就いてをものすべし。されども尙其の前に云ふべき一事こそあれ即ち彼れの作歌の中には前人に比して儒佛の思想の加はれるもの多きこと是れなり。是は山上憶良並びに沙彌滿誓等の之れが思想に富みたるとは稍〻其の趣を異にせるものとす。彼等の作歌に儒佛の思想の交れるは自ら好みて其の道を研究したる結果に過ぎざりしに此は時勢の傾向の作家の上に及ぼせる自然の印象としも見るべきものなればなり。詳にいはゞ當時は儒佛の流行其の極點に達して人心の大半を支配せる折柄なりければ其の思想の歌謳の上に現じたるも寧ろ自然に且普通の事と見做し得べきものなればなり。敬神忠君若しくは崇祖の念に厚きをもて特質とせる『萬葉』歌人も時の降るにつれて多少其の趣を異にせるは趨勢の然らしめしところと謂ふべし。就中家持の如き最後の作家に到りては當初の歌人等に比べては幾何か純粹を缺き儒佛の旨によりて其の信念を形成したりげに見ゆるも當然なりかし。さはれ

流石に是等の信念の他に讒らず熾盛燃ゆるが如きものありしは特に注意すべき點にこそ。

さて家持の想像は深刻なりと云ふべからねど健全にして質實なる風あり。是を以て其の歌ふところは義理精細にして明快なれども事狹くして平板に流るゝ嫌あるを免れず。また感情の熾盛なる割合には縹緲たる神韵に乏し。彼の「防人の別を悲む歌」を初め「族を喩す歌」「勇士の名をあぐるを慕ふ歌」さては「亡き妻を傷む歌」等は最も微妙の詠として人の稱するところなれども尚前に掲げたる三家に比べては其の想像の少しく劣れる點あるを發見すべし。見よ次に掲げたる一首の歌を

久方の　天の戸ひらき　高千穗の　嶽にあもりし（天降りし）すめろぎの　神の御代より　はじ弓を　たにぎりもたし　まかご矢を　たばさみそへて大來目の　ますらたけをゝ　さきに立て　ゆぎとりおほせ　出河を岩根さくみて　踏みとほり　國覓（マトノ）ぎしつゝ　千早振る　神を事平（コトムケ）まつろはぬ（奉仕ざる）人をもやはし（和げ）はき清め　つかへまつりて　秋津島

ま　大和のくにの　橿原の　畝火の宮に　宮ばしら　ふとしりたてゝ天の下　知らしめしける　すめろぎの　天の日つぎと　つぎて來る君の御代々々　かくさはぬ（隱さざる）明（アカ）きこゝろを　すめらべに　きはめつくして　仕へ來る　祖（オヤ）のつかさと　言（コト）たてゝ　授け給へる　うみの子のいやつぎ〳〵に　見る人の　聞りつぎてゝ　きくの人の　鏡にせんを　あたらしき（愛しなしむべき）清きその名ぞ　おほろかに　心おもひて空言（ムナゴト）も　祖の名たつな（譏言なり家名を汚す如き事なり）　言ひ立てられて大伴の　うちと名におへるますらをの友

反歌

志き島のやまとの國にあきらけき名におふ伴の雄（ヲ）ごゝろつとめよ

つるぎ太刀いよいよとぐべしいにしへゆさやけくおひて來にし其の名を

是は前にいへる「族を喩す歌」にして最も傑作の聞えあるものなれども想像の分子は幾だもあらず酷にいはゞ歴史上の事實を借りて或道德的格言を歌詞をもて平叙したりといはんのみ。志かれども感情の烈き、措辭の整然たる若しは格調の雄

壯なるは能く想像の缺乏を補ひて聞者をして覺えず襟を正さしむる概あり。彼れが大伴池主に贈れる書中に「幼年未遑山柿之門、裁歌之趣、詞失乎叢林(藻林の誤か)」といふと雖も素より謙辭、其の幼より裁歌に心を碎きけんこと知るべきなり。彼れの歌には又情思の哀切なるもの悲愴なるもの或は典雅なるものも鮮からざりき。

亡き妾を傷む歌

吾が宿に　花ぞ咲きたる　そを見れど　心もゆかず　はしきやし(愛しき)
妹がありせば　水鴨(カモ)なす　二人ならびゐ　手折りても　見せましもの
を　空蟬の　借れる身なれば、露ぢもの　消(ケ)ぬるが如く　足引の
山道を指して　入日なす　かくりにしかば　そこ思(モ)ふに　胸こそ痛め
いひもかね　なづけもぢらに　跡もなき　世の中なれば　せんすべもな
し

反歌

時はしもいつもあらんを心いたく去(イ)にし吾妹(ワギモ)か若子(ワクゴ)をおきて
いでゝ行く道知らませばかねてより妹をとゞめむ關をおかましを

悲緒未だ息まずして更に作れる歌

世の中し常かくのみとかつ知れどいたき心は忍びかねつも
佐保山に霞たなびく見るごとに妹を思ひ出でゝ泣かぬ日はなし

秋の歌

さを鹿の朝たつ野べの秋萩に玉と見るまでおける白つゆ

是等を其の最なるものとす。姿の長短に拘はらず眞情を述ぶるに妙を得たりし事推度すべきなり。

そも〳〵家持の歌の『萬葉集』に出てたる最後の作は既に記せる如く天平寶字三年なりき。されば歿年までには猶廿六年の長き星霜ありしに其の間の歌は一も傳はらず。あはれ晩年の作には鮮からぬ進歩の在りけんを惜むべき事なり。是れにつけても彼れが此の『萬葉集』を輯錄せし功績の莫大なりしを察了するに足る。

右の外此の集に載せられたる歌人の詠には名歌として錄せらるべきもの尠からず。且よみ人しらずの歌には或は四家にも及ぶべきほど功妙なるものも見えたり。前に赤人の詠と並べ擧げたるは其の一例に過ぎざれど他にもはた是れに比

すべきもの許多見ゆ。蓋し其の名の傳はらぬは強ち劣等なる作者なるが故にはあらで或事情の下に逸したるものなるべし。

『萬葉』以後奈良朝に於ける歌界の消息は漠として更に窺ふべきよしなし。彼の集の如き集書は勿論、『記』『紀』に於ける如き零碎なる記錄の之れを傳ふるものも絶えて無ければなり。想ふに文華燦然たる『萬葉』の後を受けたれば尙幾多誦すべきものゝありけんこと必せり。さはれ此の暗冥なる間にありて歌謳の勢力は次第に衰微したる事疑ふべからず。其は次期なる平安朝初期に於ける歌界の形勢によりてまか知らるゝなり。更に其の期に至りて詳細なる說明を加ふるを俟て。

第四章　散文

第壹節　散文界の概況

歌文の發達を異にせし所以　宣命　修史　風土記及び氏文

以上說けるにて明なる如く奈良の朝は歌謳繁盛の時代にして此のものは風姿風情共に古今に冠絶せる趣あり き。而して散文界は如何にと顧れば此は彼の巧妙富贍なるには似るべうもあらず猶前代ながらの素樸の風を受けつぎて未熟の姿を有せりき。かくの如きもの其の理由なくばあらず。蓋し漢學の我が文學に及せる影響の如何にこそよるべけれ。元來我が上古の歌謳は諷咏するためのものなれば主とする點は純ら姿詞の諷咏に適するにあり。まかるに姿詞をして諷詠に適せしめんには勿論我が古く用ひ馴れたる語格を遵奉する外あらず。此の故に漢學流行すといへども直接に歌謳に與ふべき影響は重に風情の邊に存して語格の上にあらず。隨うて漢學の影響は積極消極の二面より歌謳の發達を促す媒介となりけり。人心の進步を導きたるは積極的に歌謳の內包の發達を來たすべき一原因ともいふべく語格を害するに至らざりしは消極的助力ともいふべきものなればなり。然るに散文は之に反して一面に積極的助力を得たると共に他面に積極的妨害を享けぬ。想ふに散文はもと世上に起れる平素の事件を只ありのまゝに記載するを以て足れりとする者なれば要は簡便に事を處し得るにあり。漢文は我が邦人にとりては容易に會得しがたき者なれども漢字の音訓をもて國語のまゝを寫さんよりは寧に便益なること多し（奈良朝以前の文學節四章參看。）故に片假字の如き簡易なる文字無き時代には漢字を知らざれば止む尚くも是れを學びたるもの

は併せて其の文格までも取り用ひんとするに至るは自然の勢ひなるべし。此の時代も尙まさしく其れにて漢字を知らざる輩は尙口頭の傳唱に依りて日常の用事を處辨し之れを學べる徒は成るべく漢文の格を用ひんことを務めたり。是れ前期の末頃より見えたる金石の銘文にても知らるゝところなり。加ふるに此の朝となりては漢學の奬勵ます〳〵其の効果を收めて縉紳の間には漢文に堪能の聞えあるものさへ往々輩出したりしかば朝廷の記錄制令の類は云ふまでもなく一般の人民に告示する詔勅の類すら漢文にて物せるもありき。かゝれば餘勢の歸するところ國語のまゝを寫せる文章はおのづから顧みるもの少く只漢文もてしがたき場合にのみ限りて用ひられき。散文の發達割合に遲緩なりしも此の故にこそ。さりながら此は只歌謠の發達著かりしに對していへるのみ若しそれ此の朝の散文を以て之れを前期のに比す豈に些少の進歩なからずやは。既にもいへる如く散文が素樸ながらも稍其の體用を具ふるに至りしは主として此の期に於いてあればなり。さて此の朝の散文を分けて宣命、修史の文及び風土記等の類とす。以下節を追うて之れを記さん。

第二節　宣命

名稱　其の作者　書方　性質　譜　儀式　文武天皇の宣命

宣命中の傑作

宣命とは漢文に綴れる詔勅に對して國語に物せる勅語の謂なり。是は持統天皇以後の朝廷に用ひられたるもの、『續日本紀』の中に見えたるを始めとす。さて上古の詔勅も此の文躰の外なかりしを漢學隆昌の頃より萬事隋唐の風を用ひ給ひし程に果てには詔勅をも一向漢文にもし給ふことゝなれりき。是を以て後世に至りては彼此を辨別せんために專ら漢文もて綴れるを詔書、勅書と唱へ國語もてせるをば特に宣命とぞ呼びならはしける。されば『西宮記』に詔書、勅書、宣命の事を區別して詔書事、改元改錢、赦令等類也。臨時之大事爲詔、尋常事爲勅。また勅書事、攝政關白賜隨身、皇子賜源氏姓、內親王准三宮宛封戶等類、可尋註。宣命事、神社山陵告文、立后太子、任大臣節會、任僧綱天台座主、及喪家告文等類也」と見えたるも亦後の制定にやありけん。『續日本紀』の頃には未だ別の名なく、勿論制もなく一概に天皇の命令を記載せる文章を指して詔とも勅とも云ひたりき。そも〳〵宣命といふ

名稱は續日本紀の第十の卷に始めて見えき皇命を宣り聞かする所作を稱するなり。されば宣命とは國語のにまれ漢文のにまれ朝臣の勅命を受け給はりて普く庶民に宣り聞かする所作を指して呼べるにて其の文をさしていふ名稱にはあらざりしなり。さるを後には直に詔勅の文を指して宣命と心得、尙甚しきは宣の字に詔勅の義籠れるが如く解するに至りしなりといふ。

宣命は前にいへる如く持統天皇の御宇より此方の作のみ其の上代のは如何にかありけん『古事記』にも『日本書紀』にも絕えて記さざれば確知せんにすべなし。古人の所說には上代のは皆此の宣命といふさまの文にぞありけむといへり。或はさもありしならん。『書紀』には詔勅の類を載せざるにあらねども悉く華やかなる漢文もて綴られたるものゝみ。蓋し漢文の詔勅は上代のは總て史家の心のまゝに改竄潤補したるが多ければ悉くは元來の意義を傳へたりとは見るべからず。又推古天皇以後のには實際當時の作なからの文章なるもありぬべけれども是れはた眞僞を辨別せんによしなく且國文として見るべきものにあらず。さるに『續日本紀』の本文はすべて漢文なるに拘はらず此の宣命といふものゝみ獨り其のまゝをあるし置きたるは其の功大なりと謂ふべし。啻に當世の狀況を卜知するを得るのみならず併せて散文界の消息を窺ふべきよすがとなりぬ。

宣命中の詞には上代より傳はれるを其のまゝに採用して殆ど定式の成句となりたるもあるべく或は多少取捨して時の便宜に從ひたるもあるべければ概しては其の日附ある時代の創作なりと見做すべからず。されども其の時々の必用に應じて當時の作者が當時の國語を以て綴れるからに大躰の上よりいへば其の世の思想を發露せるものとす。但し其の作者の何人なりしかは今詳かにすべからず。『職員令』などの記せるによれば宣命の文は中務省なる大內記等の起草せしといふことの知らるゝのみ。而して內記の職には儒門の中文筆に堪へたる者を任命したるよし『職原抄』に見えたり。さかるに當時學問といへば只漢學のみを指せるにて皇典等を攷究する事は絕えて無かりしかば年月を經るにつれて漢語を交へ用ふること愈多く或は梵語をさへに挿入せるものもあるに至りき。かゝれば其の外形の次第に當初の風を失へると共に其の意義さへ頗る國體を損するものゝ多かるに至りしは云はでもの事なり。聖武天皇以後のものの殊に然り。是は天皇の

御心に依れるは勿論なれども當時の內記等の國典に暗きに座すること夥し、否時勢のまかく流れたる自然の傾向なりとす。かくて『日本後紀』よりこなたの史籍に見えたる宣命に至りては漢意漢語やうやく加はりつゝ語格さへはた殆ど漢文めくところ多く、中に就きて只古典を引ける若しくは成語を用ひたるあたりのみぞ古文の例にはよれりける。さはれ縱令作れる人若しくは時によりて多少の差異はあれど散文としては漸次進歩の相を現ぜること疑ひを容れざるなり。書方は祝詞の漢字もて國語を寫せると均しく彼の文字の正訓を用ひ且細字もて助辭の假字を添へられたり、讀み易からんが爲なるべし。總て是れらを世に宣命書と稱へて上に見えたる萬葉書と區別す。此の書方を用ふる所以は如何に。それは國語のまゝを寫さんの必要あるによれり。元來宣命の目的たる朝廷の百官並びに天下の庶民に宣り聞かすべきものなれば成るべく多數の人々をして難解の點少からしむるにあり。而して當時漢學の流行著かりきと雖も一般の人民にして悉く漢文を解せんことは夢にだも望むべからざる至難の事なりき。是れ宣命には止むを得ずして漢字を借るものゝ務めて國語を寫すをもて主としたる宣命書を用ひたる所以にぞあるべき。

されば又た其の文詞も始めは極めて通俗の言語を擇び出でゝ用ひけんこと明けし。まかのみならず措辭の上に種々の修飾を施して曲節の美妙ならんことをも務めたり。かくて其の文躰の祝詞に似て稍韻文めきたるも期するところ亦殆ど彼此相おなじく朗讀して聽者の感を惹かんとするにあればなり。尙詳に云はゝ是れは庶民に宣り聞かする詞にて彼れは神前に告白する詞なれども共に對者をして感動せしむることを目的とすればなり。故にまた宣命の文にも對句疊語等好音の語を用ふること尠少ならず。さはれおしなべては其の文眞率にして能く和諧せり。宣命の宣告は其の式具はりて妥りに變更すべからず。『貞觀格式』大嘗祭の條にいふ

內記以二宣命文一進二大臣一、大臣執奏之、訖大臣喚二堪宣命者一議、以上一人上、授二宣命文一、受即復二本座一云々。皇太子立座、東西面、次親王以下共降之立、宣命大夫下殿、進就版宣制。其聞云、云々諸〻聞食止宣。皇太子先稱唯、次親王以下共稱唯、訖皇太子先再拜、次親王以下共再拜。更宣云、云々衆聞食止宣。皇太子先稱唯、次親王以下共稱唯、訖皇太子先再拜、次親王以下小齋再拜。宣命大夫復二本座一、親王以下亦復二本座一。

と。宣命の大夫は朗讀せる人を指せるにて又宣命使ともいへり き。聲音明晰し

て高調なるものの之れを務めぬ。上に宣命に堪ふる參議以上一人といへるぞ即ち是れなる。讀法嚴正にして曲節あり一語といへども亂るべからず師弟相傳へて其の法を修じぬ。宣命譜といふものの是れなるべしといへど今は亡びたり。各段落の終り毎に諸〻聞こし召さへと宣る時は皇太子先づ唯と稱へて親王以下共に唯と答へたる事前文の中に見えたる如し。

以上記せるところにて宣命に就きて云ふべき程の事柄は略〻網羅し得たりと信ず。されども猶學者が參考の便にもとて一例を掲げて目のあたり之れを示さん。是に出せるは文武天皇即位のはじめ下し給ひし詔勅にして今を距ること殆ど千二百年以前の作に係れり。書方は前にいへる如く祝詞のと全く同しきものなれば煩はしからんを慮りて態と假名交りの躰に改めつ讀者之れを諒してよ。

現御神と大八島國しろしめす天皇大命らま「らま」の二字は現御神の大命ぞと證に云ひ明かす詞なるべしと詔りたまふ大詔を集侍群れる集れる皇子等、王、臣、百官人等天下公民も「ろ〳〵聞し食さへと詔る」以上一段最末の「詔る」は宣命使の自ら云ふ辭也。高天原に事始めて座す神の下の「天に坐す」係り也遠天皇祖の御世〻中今當世に至るまで天

皇御子のあれまさん彌つぎ〳〵に大八島國知らさん次ぎての次いでと天津日嗣しろしめす次第なり天津神の御子ながらも天にます神のよさしまつりしまに〳〵聞こし看し來る此の天津日嗣高御座の業と高御座は天の御座さいはんに此は天皇の御座に坐して天下を治め給ふ也現御神と大八島國しろしめす倭根子天皇命へ御世々々の天皇なれども此處にては持統天皇を指して申す也授け賜ひ負せ給ふ貴き高き廣き厚き大命を受け給はり恐みまして此の食す國知しろす國天の下を調へ賜ひ平らけ賜ひ天の下の公民を惠み賜ひ撫で賜むとなる神ながら思ほしめさく思ほしめすと詔り給ふ天皇大命を諸〻聞こし食せと詔る。」是を以て百官人等四方の食國を治め奉ると任け賜へる國々の宰等に至るまでに天皇が朝廷の敷き賜ひ行ひ賜へる國法を過ち犯すことなく明き淨き直き誠の心を以ちて御稱稱んさいふて緩み怠る事なく務め志まりて仕へ奉れと詔り給ふ大詔を諸〻聞こし食さへと詔る。」故此の狀を聞こし食し悟りて歎しく恐仕へ奉らん人は其の仕へ奉れらん狀のまに〳〵品々讃め賜ひ治め賜はんものぞと詔り賜ふ天皇が大命を諸〻聞こし食さへと詔る。」

此の文四個の段落より成る。第一段は殆どすべての宣命に見えたる冒頭といふべきものにて皇命を謹承すべき旨を述ぶ。第二段には皇位の繼承並びに施政の方針を指示す。而して第三段に臣民の守るべき條々を喩し第四段には忠良の臣民には夫れ〳〵恩賞あるべきよしをいへり。中に就いて第二段に於いて皇位の由來を述ふること縷々たるは歴史の欠を補はんが爲にて、やがて皇位の神聖を明かにし進みては忠君の念を振作せんがためなるべし。之れを詮ずるに一は皇位の神聖なるより臣民の畏敬心を皷舞し一は德政によりて彼等が報恩盡忠の念を喚起せんとするもの〻如し。意義の上には君臣輯睦の狀況を窺ふべく措辭の上には平易質實の言語一種の調子をなせるを見る。

右の外元明孝謙二帝の即位の宣命、さては聖武天皇立后の宣命等見るべきものあり。殊に光仁天皇が左大臣藤原朝臣永手の薨去を吊ひ給ひし大御言は更に世に稱せらる。是は前掲文武天皇の宣命を距ること遠く七十年の後にあり當に詞句の流麗なるのみならず哀悼の情溢るゝに似而も他の同代の作と異りて調はたさまで悪しからず。

第三節　修史

修史の由來　稗田阿禮『古事記』の編修　太朝臣安萬侶『古事記』の文脉並びに書方　其の文例　本書の性質

推古天皇廿八年に聖德太子、蘇我大臣馬子と共議して天皇紀及び國紀、臣、連、伴造、百八十部並びに公民等の本紀を錄し給ひき。是れをまさしく本邦修史の擧ありしの嚆矢とす。蓋し是れより先三韓の諸國より五經、醫、卜、易、曆等諸〻の博士來り天文、地理、遁甲、方術等の書を貢獻し且此の天皇の御宇には遣隋使の事ありて親しく彼の國の文物を目擊したるものゝ之れを奏聞したりしかば萬事支那風を移植せられしが太子等彼の『史記』『漢書』等の諸史の完備せるを見て我が史の欠を補はんとての計畫なりしなるべし。されども此の計畫は其の明年太子薨去なされしかば完成に至らずして止みたるらし。かゝるも其の書の幾分は成功したるもありけんを、もと是は皇太子と馬子との私撰にて勅命を承りしものならねば其のまゝ蘇我家の預り置くところとなりけり。さるに皇極天皇の御宇に馬子の孫入鹿を誅せられし時に其の父蝦夷火を我が家に放ちて自殺せしかば其の書も大方は燒け失せ

て只、船史恵尺といふ者の値に取り出でたる天皇紀及び國紀のみ其の災を免れたりといふ。さはれ其等の書どもゝ亦いつの頃にか亡佚したれば躰裁の如何は素より知るべからねど聖德太子の記し給ひきといふ『上宮記』の遺文によりて推考すれば恐らくは假字漢文の混和したる者にて所謂宣命書の文をも交へ記されたるものなるべし。さてのち天武天皇に至り夙に國史編修の啟慮あり深く諸家の賫す所の帝記及び本辭の正實に違ひ虚僞の加はるとを多きを患ひ給ひ其の眞僞を討覈して後世に傳へんとを思ほしめし給ひき。此の時舍人に稗田阿禮（傳記辭かならず）といふものありけり。阿禮年廿八、博覽にして强記、上世の事にも委しきよし聞えき。天皇即ち近く召し給ひ勅して先代の舊辭を誦み習はしめ給ひぬ。『日本書紀』に「天武天皇十年三月丙戌、天皇御于大極殿、以詔川島皇子、忍壁皇子、廣瀬王、竹田王、桑田王、三野王、上野君三千、忌部連大島、平群臣子首、令記定帝紀及上古諸事、大島、子首親執筆而錄焉」と見えたるは此の時の事なるべし。されども此の擧も其の十五年九月に天皇崩じ給ひ又大詔蒙りたる人の中にも事に與りし間に逝去したるもありしからに功を見ずして中止せられぬ。かくてまた持統天皇五年八月十八氏（大三輪、忌部、石上、藤原、石川、巨勢、膳部、春日部、下毛野、大伴、紀、阿部、佐伯、采女、穗積、阿曇、平群、羽田）に詔して其の祖等の纂記を上進せしめし」ことありき。纂記とは諸氏の系譜をいふ。是は先帝の遺志を紹ぎて國史を編修せしめ給はんの準備なりけんを讓位の事ありて果さゝりしは誠に惜むべし。然るに多年の鋤策は元明天皇の御世に至りて漸く熟し此に始めて成果を見るを得たり。即ち『古事記』まづ成り『假字日本紀』『日本書紀』等相踵いて世に出づることとなりぬ。是れより歴朝修史の擧いよ〳〵盛なりき。

『古事記』は三卷より成り我が邦の開闢より推古天皇の御世に至る世々の事跡を輯錄したるもの、元明天皇の和銅五年に太安萬侶に勅して撰進せしめ給ひしものなり。こは勅撰國史の始めにして先に天武天皇の御心によりて舍人阿禮が皇帝の日繼及び先代の舊辭を誦習せしを安萬侶の撰進したるものとす。かゝれば此の書は撰者が妄りに古代の言語を摸擬し又は想像して作れるにあらざるや明けく且これが撰者も安萬侶一人に歸すべからざる事知られたり。『古事記』成功の時阿禮は何歳なりしか記さゝれど天武天皇の御世にして既に年廿八と聞えたれば蓋し未だ六十八歳に過ぎざりしならん。或は云ふ五十三歳なるべしと。太安萬侶

はた誰が子なるを知らず。慶雲元年從五位下に叙し和銅四年四月正五位上に進み勳五等を授けらる。此の年九月十八日詔を蒙りて『古事記』の撰進に着手し翌年正月廿八日事竟へて上奏したりしこと本書の序に見ゆ。其の間僅に四ヶ月半に過ぎず。靈龜元年正月更に從四位下に進み氏の長者となり尋いで又民部卿となれりきとぞ。養老七年七月卒りぬ享年詳かならず只『古事記』を撰進まてより十一年の後なる事知らるゝのみ。

本書の文躰は大方をいへば漢文によりて物せられたり。但し書中に散見せる歌謡の類は皆がら字音を以てし又適當なる漢語なき古語をも之れによりて寫されぬ。故に本書は漢文として見る時は拙劣、殆ど意義の通ぜざるものあるを免れず、されば概しては漢文の格に從ふものから猶往々假字にて語音を寫したるにより て見れば蓋し始めより純粋に漢語に讀み下すべきために作れるものにあらざる事分明なり。まからば後世に專ら行はれたる一種轉讀の法に從ひ半は日本語に半は漢語に讀下すべきものかといふに又さにもあらざるが如し。元來撰者は漢文に長じたること其の自序の功妙なるにても知らるゝ所なるに而もかゝる拙劣なる漢文にものしけん事其の理由なくばあらじ。天武天皇が特に阿禮に勅語して本辭舊辭を誦習はせ給ひしをおもふに古語の格に寫さんの御心なりきと知られたれば本書も期せしところは古語をさながらに寫さんとせらしなるべし。まかるに古語のまゝを寫さんには全然彼の宣命等の書方に倣ひて假字を用ふる外あらざるを其の法にのみ依れば造句おのづから冗長に失する嫌なくばあらず、さればとて訓にのみよるとせんか措辭やゝ簡短となる便利はあれども詞意の如くならざる點あるを免れず。是に於いてか撰者は採長補短の策を採りて兩者の長所のみを併用せり。換言すれば成るべく簡短に古辭のまゝを体ふるを旨とせる故に和漢の文脈を混用し其の巧拙若しくは文格の一致等には毫も意を留めざりしなり。とは本書の自序に徵しても明かに知らるゝ事なりとす。

天皇天武詔之、朕聞諸家之所賫、帝紀及本辭、既違二正實、多加二虛僞、當今之時、不レ改二其失、未レ經二幾年、其旨欲レ滅。斯乃邦家之經緯、王化之鴻基焉。故惟撰錄帝紀、討覈舊辭、削レ僞定實、欲レ流二後葉。時有二舍人、姓稗田名阿禮、年是廿八、爲レ人聰明、度レ目誦レ口、拂レ耳勒レ心。即勅二語阿禮、令レ誦二習帝皇日繼及先代舊辭。然運移世異、未レ行二其事一矣。伏惟皇帝陛下、得レ一光宅、通三帝育。（中略）於レ是惟舊辭之誤忤、正二先紀之經錯、以二和銅四年九月十八日、詔二臣安萬侶、撰錄稗田阿禮所誦之

勅語書辭、以獻上者。隨詔旨、子細採摭。然上古之時、言意並朴、敷文構句、於字即難、已因訓述者、詞不逮心、全以音連者、事趣更長。是以今或一句之中、交用音訓、或一事之内、全以訓錄。即辭理匝見、以注明、意況易解、更非註。亦於姓日下、謂玖沙訶、於名帶字、謂多羅斯、如此之類、隨本不改。大抵所記者、自天地開闢始、以訖于小治田御世。（下略）

されば本書の文脉は大略漢文と假字文となれども尚精査すれば四種の別あるを見る。第一は純ら漢字の音のみを假りて寫せるもの第二は其の訓をも併せ用ふることと宣命書に類せるもの第三は文字の排列こそ轉倒して漢文に類すれ實は我が國語の格と異ならざるもの第四は文字の排列は勿論語格までも全く漢文に依れるもの是れなり。前二者は假字文にして重に歌謠若しくは神話等の漢文に寫しがたきに用ひ後の二者は漢文にして純ら古意を害せざる限りに用ひられぬ。しかれば又文字の用法も隨うて多樣ならざるを得ず即ち漢文に於ける文字の當意に用ひられたるも其の一なれども假字文には猶幾多の區別を包羅せり。縱令へせば久羅下那洲多陀用弊流の如きは字義に拘はらず用ひたる所謂音假字にして天をアメ、師木をシキと讀むたぐひは共に訓假字なり。その他略字とて漢字の偏傍を省ける、借訓とて漢字の意義を採らざる若しは右の數種を併用せる何れも一種の書方と見るべし。又春日、飛鳥、長谷、他田、三枝等は更に特殊の書方なり。次に本書の訓讀は如何にといふに固より正確には知りがたけれど國語の格に讀むべきものなるらし。本書が漢文の中に假字文を混用したるのみならず其の漢文の處も務めて國語の格を維持したる如きは明かに之れを證明するものなり。但し予輩は其の訓讀をば彼の『古訓古事記』（長瀨眞幸其の師本居宣長翁の『古事記傳』の訓を附して版行せし者）の讀方に露違はざるべしと信ずるものにあらず只以上の事實を天武天皇が特に阿禮に勅して誦習はせ給ひし事迹に照合して國語の格に從ひて訓みたらんことを想ふのみ。

試に『古訓古事記』の一節を抄錄して本書の脉裁とかぬて古訓の如何なるものなるかを示さん。

天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神、次高御產巢日神、次神產巢日神、此三柱神者、並獨神成坐而、隱身也。次國稚如浮脂而、久羅下那洲多陀用弊流之時、如葦芽因萌騰之物而成神名、宇麻神阿斯訶備比古遲神、次天之常立神、此二柱神亦獨神成坐而隱身也

文字の排列は尨雜の躰なれども其の訓のみを誦すれば流石に悪しきさまならず國語の本質たる流麗なる中に素樸遒強の風を帶ぶ。就中其の上卷は諸神の言語を直寫せる處多きを以て中下の卷に優れり。此の書元來祝詞宣命等とは其の目的を異にしたれば彼等の韻語めきたる文の修飾を具へずと雖とも更に變化に富めりされば散文として當に一歩を進めたりとこそ謂ふべきなれ。尤も是は所謂『古訓』を正確なるものとして與へたる批判なり。前にいふ如く當時に於ける眞の訓讀は知るべからずと雖も蓋し大差なからん。兎に角漢文に長じたる撰者が殊更にかゝるさまに文字を排列したる苦心の蹟は想像すべく殊に漢學流行の世の中にありてはかゝる文章は人の注意を惹れがたきは明著なる事實なりしに拘はらず偏に古傳說の保存に心を委ねられたる忠實の程は感嘆すべきなり。

『古事記』編輯の目的は上に引用せる自序に詳なる如く純ら古傳說のまゝを錄するにあり而して撰者の周匝なる注意は能く其の目的を達したるが如し。かゝれば此の書の貴重すべきは問はずして明なるべきに實際は大に之れと反して近世に至るまで空しく高閣の中に束ねられて蠹魚を養ふ料となれりき。おもふに是は

強ち此の書の價値を無視せしにあらざるべきも此の書出でゝより八年新に『日本書紀』といふ漢文の歷史編纂せられ剩へ當世の嗜好に投じて太く世にもてはやされしかば其の名殘遠く後の世までも繼續して終にかゝる始末とはなりけるなり。故に一朝若し彼此の書を對照して其等の眞價を考査するものあらば彼れは必ず此の書の『書紀』よりも數等優りて貴重すべき點あるを發見するならん。勿論『書紀』にも優れる點絕えて無きにあらず縱令ば其の體裁の極めて整然たる若しは一書として衆說を網羅したる如きは到底此の『古事記』の企及するところにあらず。されども其の文悉く華麗なる漢文をもて寫さんと努めたるが故に恐らくは文藻の修飾に妨げられて傳說の眞を失へるも多からん。開卷第一に天地開闢の說を記せるあたりすら明かに支那の理學說を其のまゝに援用せる跡ありとは先哲の既に唱道せるところなるが其の他かゝるところ枚擧するに遑あらず。且大躰の上よりいふも『書紀』の記するところは餘りに精細に過ぎて單に古傳說をのみ譯載せりとは思惟しがたき節あるを覺ゆ、年月干支を細記せるが如き其の一例なりとす。是に於いてか或史家は云ふ是は彼の書編纂のみぎり支那の年曆に附會したるも

のなるべしと或は然らん。およそ百千年を經過したる事件が萬事口承の世の中に彼の如く精細に年月までも記憶せりきとは到底信憑しがたき事なればなり。しかるに此の『古事記』は之れと反して文章は尨雜、記事は粗大(殆ど年月等なき)なる觀(記せる事無し)ありといへども傳說は時の經過につれて漸次に微細なる事柄を忘却し行くが常なれば是れぞ却りて此の書の正確なるを想はしむる媒介なるべき。さはいへ此の書とても歷代の實事を列ねたるものなりとは斷言するを得ず、是れはた傳說皆實事のみを傳へたりとは信すべからざればなり。故に予輩が茲に比較上『古事記』を正確なりといふも正史として一點の批難すべき箇所なしといふ意味にていへるに非ず換言すれば其の記事悉く現實に生滅流轉せし事件なるべしといふ意味にていへるにあらず只傳說を直寫せる點に就きて下せる斷案のみ。かく云はゞ史たる此の書の價値を蔑にするに似たれども決してさにあらず。予輩は此の書が上古の事蹟を(縱令ひ朧氣なからも)傳へし重要の書なりと信ずるや厚し。況や史たる以外に一種の重んずべき上古の消息を齎すを認むるをや。上古の消息とは何ぞ、傳說其のものが詩歌小說の表する如く或時代の思想感情想像の一斑を表明することと是れなり。詳言すれば此書の記事が悉く其の各時代に現實なりし事件にあらざるも此の記事の表す如き感想を或時代の人々が必然思ひ浮べきといふことだけは動かすべからざる事實として斷言するを得。此の意味にては又此の書を指して或部分は詩なりと謂はんも不可なからん。而して斯かる感想を抱懷したるは此の書の編修せられたる時代の人々なりしか又は其れより以前に於ける各時代の人々なりしか其はいまにしては知るべくもあらず。さはれ骨子は前代よりのものにて肉皮は漸次に形成したるものなるべきか影の形に隨ふことを知るものは必ず此の推測を認容せん。予輩は實に此の推測の允當なるを信ず。

さて此の書の記事には頗る不可思議なる說話多し。殊に神代の卷を繙けばさながら『舊約全書』を讀むらん心地す。されば(ミシワザ)にや古來神道家は此の書を以て一の神典と見做し奇跡の不可思議なるは神の御仕業なるに依ると思惟したりき。されど又神說を事實とすると同時に其の怪異なる說話をは全く比喩に出でたるものなりと解するもあり或は全く實事にあらずとするもありき。要は共に其等の說

話の奇怪なるを承認するに外ならず。今奇跡の中にて尤も面白しと思はるゝ一節を掲げて其の一例を示さん。

此の大國主神の兄弟、八十神坐しき。然れども皆國は大國主の神に避りまつりき。避りまつりし所以は其の八十神各々、稲羽の八上比賣を婚はむの心ありて共に稲羽に行きける時に大穴牟遲神大國主神に俵を負せ從者として率て往きゝ。こゝに氣多の前に到りける時に裸なる菟伏せり。八十神其の菟に言ひけらく汝將爲は此の海鹽を浴み風の吹くに當りて高山の尾上に伏したまと云ふ。故其の菟、八十神の教ふるまゝにして伏しき。こゝに其の海鹽の乾くまゝに其の身の皮悉に風に吹拆し故に痛みて泣伏せれば最後に來ませる大穴牟遲神其の菟を見て何由汝泣伏せると問給ふに菟答言、僕游岐島に在りて此の國に度らまく欲りつれども度らん因なかりし故に海の和邇を欺きて言ひけらく吾と汝と族の多き少きを競てむ。故汝は其の族の在の悉率て來て此の島より氣多の前まで皆列伏し度れ吾其の上を踏みて走りつゝ讀度らむこゝに吾族と孰れ多きといふ事を知らむ。かく言ひしかば見欺て列伏せりし時に吾其の上を踏みて讀度り來て今地に下りむとする時に吾汝は我に欺かえつと言ひ竟れば即最端に伏せる和邇我を捕へて悉に我が衣服を剝ぎき。此に因りて泣き悲ひしかば、先だちて行きましゝ八十神の命以て海鹽を浴みて風當り伏せれと誨へ給ひき。故教の如せしかば我が身悉に傷えつと告す。こゝに大穴牟遲神其の菟に教へ告はく今急此の水門に往きて水以て汝身を洗ひて即其の水門の蒲黄を取りて敷散らして其の上に輾轉てば汝身本の膚の如、必ず差えなむものぞと教へ給ひき。故教の如爲しかば其の身本の如くになりき。これ稲羽の素菟といふ者なり今に菟神となもいふ。故其の菟大穴牟遲神に白さく此の八十神は必ず八上比賣を得給はじ俵を負ひ給へれども汝命ぞ獲給ひなむと白しき。

其の他尾ある神、物言ふ鼠、天上、黄泉さては伊邪那岐命の頸飾の葡萄の房となれる等の事擧げて數ふべからず。そも〳〵撰者は是等の說話を全く實事なりと信じて記載したるか分明ならずといへども蓋し或時代の人々の想像したる小話に屬すべきものならん。是等を一種の想像說として見る時は此の書は實に上古人の

偉大にして豐富なる想像力を持てりし事を語るものなり。さはれ其の想像多くは超自然の事にして稍無禁なるかの觀ありと謂ふべし。また上古人が特質として萬事純潔を貴ぶ風ありとは既に前期の散文を論ずる條下に云ひたりしが其の性情著く本書の記事中にも表れたり。

之れを要するに此の書には史的事實と見るべきものと詩的想像と見るべきものとの二あるべし。此の書元來史として編修せられたるものなりといへども史としての價値は寧ろ後者に下れり。故に此の書を史として研究せんものは如何なる度までが正史たるに適するかを審判せざるべからず然らすば案外なる悖理に陷ることもあらん。彼の頑陋なる好古學者が一々に率强なる解釋を施して自ら滿足するが如きは予輩が關する所にあらずと雖も而も開明なる智見は決して事實の悖理を許さゞるべし。本書を繙かん者は當に此の心得こそあらまほしけれ。

第四節　風土記及び氏文

風土記の性質　文躰　作例　高橋氏文

元明天皇の和銅六年五月畿内並びに七道の諸國に制して郡郷の名に好字を著けしめ又其の郡内に生ずるところの銀銅彩色草木禽獸魚虫等の物具さに色目を錄し及び土地の沃塉山川原野の名號の由るところ又古老相傳ふる舊聞異事を史籍に載せて言上せしめたる言ありき。此の制に應じて諸國より奉りしもの之れを風土記とはいふなり。されば風土記とは地誌の類にして傍ら其の國々の歷史を兼ねたるものなる事既に明瞭なりとす。當時は諸國より奉りたる風土記も許多ありけんを今は大方亡佚して殘るは只僅かに一部の『常陸風土記』あるのみ而も其の三郡を缺けり。また『出雲風土記』は卷末に天平五年二月三十日之れを勘へつくると見えたれば『常陸風土記』よりは三十年ばかりも後の作にやあらん。肥前、豐後の風土記はた出雲のと同じ頃に作れるか其の體裁稍〻相似たり。さはれ其の文躰出雲のよりも後れて見ゆるからに延長三年の官符を奉行して撰進したるものなるべしといふものあり。蓋し延長三年十二月の大政官符に五畿七道の諸國司に令して風土記を勘進せしめたる事あるによるめり。

延長三年十二月十四日の大政官符。五畿七道諸國應二早速勘進風土記事一、右如レ聞諸國可レ有二風土記文一、今被二左大臣宣偏宣仰二國宰一令上勘進之一、若無底探求郡内尋問古老早速言上者、諸

是れ一理なきにあらずと雖も眞實には孰れ當れるにかあらん。すべて風土記は各國より撰進せるものなれば撰者の異なるに隨ひて文躰はた等しからねば孰れを何時の代に撰進したりとは定かに知るよしあらぬなり。あかのみならず肥前、豐後の風土記をば後説に從ひて延長の頃の撰進に係るとするも悉く其の頃の作に係れりとは斷定しがたきふしもあり。何となれば延長三年に下せる官符の趣旨は前に撰進したる風土記の案あるべきを校訂して上れ若しそれ無くば更に郡内を探求し古老に尋問して言上すべきよしを制令したるものなり、故に此の時上れるは前に奉りし風土記の案を勘進ぎたるものあるべく又新に古老の舊聞を探求して撰進したるも多かるべければなり。其の他『筑紫風土記』『土佐風土記』『備中風土記』『日向風土記』等の名稱は『萬葉集』の古註さては『釋日本記』等に往々散見したれども何れも逸文にして全豹を窺ふによしなし。『總國風土記』といふもの亦然り。

風土記は大方は漢文躰に書かれたるが中に古老の舊聞を錄せるあたりは流石に國語をさながらに寫されたり。此の點より云へば其の文躰は多少『古事記』に類すれども漢文の法によれる事負に彼れに超えたり。其の書中の記事は物名等を列記せる事多きが故に概しては無味淡泊にして殆ど文學上の價値なき程なり。而して又古傳に屬せる記事は往々怪異に過ぎて今日の人には信じがたき點あるを免れず。さはいへど予輩は之れによりて當代の人心の詩的想像に富めりし一端を卜知するを得べし。次に掲ぐるは『出雲風土記』中なる國引の故事を記せる一節なり學者須らく熟讀して其の想像の如何ばかり豐富に如何ばかり奇怪なりしかを知れ。

意宇（出雲の地名）と名づくる所以は國引きませる八束水臣津野命の詔り玉はく八雲たつ出雲の國は狹布の稚國なるかも、はつ國小さく作らせり。故作り縫はんと詔り玉ひて栲衾（枕詞）新羅の三崎を國のあまりやと見れば國のあまりありと詔り玉ひて童女の胸鉏（童女の胸の如く細き鋤）取らして大魚の（如）きだみ（つき別）けて波すゝき（枕詞）穂ふり（切り別）けて三つよりの綱打かけて霜ついらくるに（枕詞）くるやゝ〳〵に河船の（如）も（添辭）そろ〳〵に國來、國來と引き來縫へる國は去豆（地名）の

打ちたへい（俗にかゞレと）よりして、やはに（冠詞）杵築の岬なり。かくて堅め立てしかば石見の國と出雲の國との堺なる名は佐比賣山（サヒメ）是れなり。又持ち引ける綱は薯（ソン）の長濱是れなり。亦北門崎（キタガサキ）の國を餘りありやと見れば國のあまりありと詔り玉ひて童女の胸鉏取らして大魚のきだつき別けて旗すゝきほふり別けて三つよりの綱打ちかけて霜ついらくるや〳〵に河船のもそろ〳〵に國來々々と引き來縫へる國は多久（地名）の打ちたへよりして狹田の國是れなり。亦北門まなみの國を國の餘りありやと見れば國の餘りありと詔り玉ひて童女の胸すき取らして大魚のきだつき別けて旗すゝきほふり別けて三つよりの網打ちかけて霜ついらくるや〳〵に河船のもそろ〳〵に國來々々と引き來縫へる國は手波縫（地名）の打ちたへよりして闇見の國是れなり。亦高志（コシ）のつの三崎を國の餘りありやと見れば國の餘りありと詔り玉ひて童女の胸鉏取らして大魚のきだつき別けて旗すゝきほふり別けて三つよりの網打ちかけて霜ついらくるや〳〵に河船のもそろ〳〵に國來々々と引き來縫へる國は三穂（ミホ）の崎なり。持ち引く綱は夜見島是れなり。堅めたてしかしは伯耆（ハキ）の國なる大神岳是れなり。今は國引き訖へぬと詔り玉ひて意字の森に杖つきたてゝおそ（オ）ふ歎辭いと詔り玉ひき故意字と云ふ。

右の外猶奇怪なる想像を描ける條數から（カラ）ず、常陸、肥前、豐後の風土紀にありても亦同じ。されども後に出でたるは漸次想像の分子を減じて愈淡泊無味のものと成り果て遂には國文學の價値は全く見えずなりけり。

其の頃又氏文（カバネフミ）といふものありき一家族の歴史ともいふべきものにて祖先の功業及び家系を錄せるものなり。其の書方は漢文に假字文を混用し別にてにをはを以て細字もて書たるなど云はゞ『古事記』の文と宣命書とを兼ねたる如き躰裁なり。氏文の中今日に傳はれるは獨り高橋氏文の全文のみにて餘は悉く亡佚しぬ。高橋氏文は其の祖先たる磐鹿六猴（カムサカ）命（景行天皇の頃の人）の事蹟を始め其の裔孫の世々膳部（カシハ）の職を奉仕せし由來さては若狹國を領じたる事など錄したるものなり。此の書は延暦十一年高橋安曇の二氏神事の時庭上の行立の前後を爭ひしをりに上進せし者なりといふ。蓋し祖先より傳はれる傳說又は舊紀を採りて編纂したるものか其の文古雅よく當時の風にかなへり。

予輩は以上に奈良朝に於ける文學の大要を述べをはりぬ。いでや平安朝に入るに先ちて其の期の文學に莫大の影響を與へたる二個の大勢力に就いて多少の觀察を下さん。二個の大勢力とは何ぞ片假名の製作と印刷術の發明とは是れなり。

第五章　片假名及び印刷術

片假名は漢字の特質　片假名の製作せられし由來　五十音圖　吉備眞備　印刷術

前にも述べたる如く從來の文學は歌謠も散文も一に漢字の音訓を假りて其の表象の便に供したりき。されば我が邦いまだ嘗て一定の文字なきに當りて漢字の傳來が如何ばかり我が文學の發達に資益するところありしかは極めて明瞭なる事實にして特に云ふべき要を見ず。されども是は比較的に推斷せる觀察にて若し退いて漢字の固有せる特質を文字たる本分より査究したらんには此の文字は甚だ不便の甚だきは恐らく文字とながるべし。漢字は元來字畫多きが故に眼に見わけがたく筆に記しがたきは云はずもがあれ毎字或る一定の意義を有する意文字なるが故に畫數多きに過ぎて學ぶに易からざる弊あり。其の他漢字は二字以上の連結(草書を除きては)甚だ困難に而も訓義多樣にして音韻の別はた多端なる等其の不便は二三に止まらざるなり。而して是を我が邦に移し用ふるに當りては猶幾多の困難の加はるあり即ち彼我の語格全く相異なるを以て我が國語を漢字にて言表せんとするに往々適當せる文字の看出しがたきことある是れ其の重なるものなり。故に最初我が邦に於いて漢字を使用せるや此の特別の困難を避けんがために音訓を混用せる等種々の方法を採りぬ。又天武天皇が境部連石積等に勅して特に我が邦にのみ通用すべき『新字』四十四卷を撰定せしめ玉ひしも一に我が特有の國語を簡便に正確に寫さんの御趣意に出でたるなりき。新字は其の後多く亡せたりと雖も今もある柳、榊、辻、峠等の類はやはりふに其の遺存せるものなるべしといふ。さて此等の文字は製作の趣意彼の如くなれば多少漢字のみを假用せる不便を救濟するを得たりしは疑ふべからず。さはれ是はもと漢字の躰形を摸倣して作れるからに其が固有せる幾多の不便までも襲用したるを以て全く自由なる表象具たるに適せざりき。然るにそのいち漢學ます〳〵盛なるに隨ひて漢字の使用漸く巧妙に赴き遂に萬葉書、宣命書『古事記』の歌謠及び神話等の書法を

見るに至れり。就中萬葉書には前に擧げたる如く種々の方法ありて其用法殊に巧みなりき彼の遊戯書法の如きは文字其のものゝ中にも詩的の想を帶びたりといはゝ云ふべし。されども其書法の巧妙なるに隨うて實用上の價値は甚だ認むるを得ずなりぬべいはん。如何となればさらぬだに訓義の多樣なる漢字は萬葉書によりて更に其の歩を進めつ遂には全く訓讀しがたき者もあるに至りぬればなり。此點より見れば宣命書のてにをはを細字もて區別せると『古事記』の歌謳若しは神話等の多く字音の方を用ひたるとは倶に實用に適し隨うて文字たる本職を全うせるものと謂ふべきなり。萬葉書は宜に遊戯書法の訓讀が讀者をして困難を感ぜしむるのみならず借訓、義訓等の正訓約訓乃至は正音略音等と混用せる事多きが故に『古事記』に於ける歌謳及び神話の書法が之等を混用せる事の少く而も主として字音を用ひたるに比すれば判讀の勞大に超えたるところあり。されば にや『萬葉集』も卷初よりは卷末に至るに及びて次第に多く字音の假字を用ひたる跡あるを見る。おもふに多く字音を用ふれば自然の勢として章句の冗長に失する嫌あるを免れずと雖も最もよく國語の意義を寫出さんには是れを措きて他に

なかるべければなり。

然り字音を假るは我が國語を直寫する最眞の便法なれども比較的に簡易となれるまでにて元來漢字に伴ふ重大なる短所は全く除去するを得たるにあらねば唯一音を表象するに多畫の文字を使用せざるを得ざる不便ありて文筆に從事するものゝ煩勞は一方ならざりしなり。故に人智進歩するに及びて文筆を要する事いよ〳〵繁くなり行くまゝに此の業に從事するもの何時となく又誰となく一時の便宜を計らんがために煩瑣なる漢字の點畫偏傍を省略し一種の記號として用ふること行はれたり。例へば今日筆記を爲すものが歴を厂、摩を广、國を口と書する如く伊の扁を取りてイとし字の冠を取つてツとする類なり。今日有義に用ふる文字さへ點畫を略する程なれば單に漢字を譯字として用ひん場合に省略の必要を感じたる事は蓋し豫想の外なるべし。之れを後世片假名といふ假字の偏傍を略せるより起れる名なり。或は云ふ是は其のはじめ漢文經文などの旁に書くにより出でたる名にてカタハラカナの略なりと。此の記號的文字なる片假名は最初は其の數も定まらず字躰はたまち〳〵にて後世の如くならざりき。さらに

世の降るに隨ひて漸次に其の字數も字躰も共に一定するやうになりて今日の五十音圖の組織とはなりけるなり。故に此の文字は一人の手に成りしにあらで自然の發達に出でたるものなる事云ふまでもなし。さはれ是を五十音圖に組立てたるは世にいふが如く吉備眞備にぞあるべき眞備は久しく唐に留學して音韻の學にも精通したりきと聞くに此の五十音圖は音韻に通じたるものならでは得て爲しがたき程、よく整頓したる趣あればなり。さて又此の圖は大方梵字の排列に從ひて組立てたるものなるべしとは既に古人の唱ふる所說なりとす。五十音は全く我邦人が有せるすべての音韻を盡くせるにはあらずといへども先づ普通の音韻は之れに依りて寫すを得將來の思想界に及ぼせる影響尠少にあらざるなり。即ち此の聲のみを主とせる記號的文字廣く通用するに及びて人の思想感情想像は是れまでと異なり最と自在に發表せらるゝに至りしかば我が國文學はこゝに一新紀元を劃するまでに豐富の狀況を呈するに至りぬ。さはれ其は次期なる平安朝の現象、此の期に在りては單に其の起源を聞きしのみ。

因に云ふ片假名は平安朝に平假名の出でしのちに出來しものなりと說く學者あり。

蓋し是は形跡を見て說けるとおぼし暫く一說として掲げおくになん。

さて片假名發明せられて文學の進步を促せしと同時に他方に於いて又之れを助長したるものありき印刷術の發明是れなり。是も亦文筆の業いよ〳〵隆盛なるにつれて起りし考案なりしが與りて大に力ありしは佛者が其の法を弘布せんの必要ありしに依れり。即ち我が邦印刷術の起りしは孝謙天皇の天平勝寶年中に律三大部並びに百萬塔用陀羅尼等を印刷したるを始めとす。さりながら此の術よく其の効果を收めて眞個に文學の上に著き裨益をなしたるは亦此の次期に在りき。

第三期　平安朝の文學

第一章　總論

年代の範圍　平安朝文學の概況　言語

平安朝とは桓武天皇の延暦三年(一四三八)帝都を山城國乙訓郡長岡の地に遷させ給ひしより後鳥羽天皇の御宇文治二年(一八四六)に大將軍源頼朝覇府を鎌倉に開きて政權全く武門に歸せし頃までを云ふ此の間およそ三十二代四百餘年なり。元來帝都の平安京に奠まりしは桓武天皇の延暦十二年に地を同國葛野郡宇太村にトして其處に宮城を營み給ひしに始まり一千餘年を經て明治二年(二五二九)今の東京に移らせ給ひしに終ると雖も其の間政治上並びに社會上幾多の改易あり て一樣ならざりしかば史家は特に便宜に從ひ制令の專ら平安城裡より出でし時期を劃りて上の如く分かつを通例の區劃とす。故にとゝに平安朝の文學といふも則ち普通の區劃に從ひて其の間に現れし文學を指せるなり。

此の期の文學は奈良朝時代の趨勢を保續して益〻隆昌を極めぬ。國史の撰修、漢學の流行みな然らざるはなし而して國文學の發達進歩は猶特に記すべきものあり。

之れを散文にしては物語、草子、日記、紀行等前古未聞の文學出で之れを歌謳にしては『古今』『後撰』の歌集以て後世の摸範となりぬ。尙仔細に云はゝ神樂催馬樂等異樣なる歌謳の出でたるも此の朝にあり『大鏡』『榮花物語』等一種の史躰の現れしも此の期にありき。是等は大方貴紳の手になり若しくは宮媛の手になれりしから に多くは艶麗優美の風を帶びつ。故に此の朝の文學を以て奈良朝に比すれば彼れは男子の征矢手挾みて秋風に吟ずるが如く是れは上臈の朱欄に倚りて春月に對するに似たり。然れども當代の狀勢は特に是等の文學をして日に優美に趨かしめ是等の文學は當代をして月に柔弱に向はしめつゝ因々相頼り相助けて遂に共に妖艶にして氣力なく浮靡にして操節なき風姿を呈出するに至りき。作者には在原業平、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑、紀有則、僧遍正、源經信、藤原公任、源俊賢、藤原行成、小野小町、紫式部、清少納言、赤染衛門、和泉式部、伊勢大輔等當代の秀才と稱せられ著書には『伊勢物語』『竹取物語』『土佐日記』『源氏物語』『枕草子』『古今集』『後撰集』等最も世に賞せらる。

言語もまた前期の方向をとりて進み漢學佛教の流行につれて外國語の混交漸く

多きを致したり。則ち此の期にありては其の輸入せらるゝもの皆に從來の如く體言等の止むを得ざる場合にのみならず作用言等のさもなきものさへ其の儘に使用せらるゝもありき。是等は孰れも其の音韻の我が國語に融合すべき限りを取りたること勿論なりしが其を輸入する多きにつれては此方よりも亦調和せん、の必要ありて自然に國語の音調若しは組織等の上に多少の變化を生ずるに至りぬ。いめ(夢)のゆめ、あかとき(曉)のあかつきと變じさきはひ(幸)のさいはひ、なほし(直衣)のなうしと化したる如き類は枚擧に遑あらず。其の他上古に用ひし言語にして全く其の跡を絶ちたるもあり若しくは上古には見えざりし羅行頭音、濁頭音の著く增加したるもあり。されども拗音のまゝに發聲すべき言語は此の期にありても未だあらざりき。今是等の變化によりて生じたる國語の性質を考察するに質朴にして強きはすべて流麗にして弱きに變りたるが如し。されば是等の變化は隨うて文章の上にも著大の影響を及ぼし簡勁率直の語勢はやう〳〵滑脫妖艶の姿となりぬ。此の期に見えたる限りにても早きと後れたるとは此の差別またきわやかなり。其は『伊勢』『竹取』等の物語に比べては『源氏物語』などの遙に優美なるにても明なり。

尙詳細に此の期の文學を知らんと欲せは當代に於ける社會の狀態を知悉するを要す讀者須く次章に之れを說くを參看すべし。

第二章　社會の概況

皇室と藤原氏と　縉紳華奢の風　地方の騷擾　男女の戀愛

佛敎　漢學

初め桓武天皇の帝都を平安京に奠め給ひしは中央集權の制を鞏固にせんがためなりと聞こえしが奈良朝末葉の弊風は此の期に入りていよゝ烈しく吹きすさみぬ。遠荒の地は未だ服せざるに尙侍樂子の亂は蕭墻の內に起り藏人所、使聽の職は未だ擧らざるに大寶の官制は早く虛設の姿となりぬ。藤原氏が其の所出の皇子を擁立し外戚の勢を藉りて政權を弄するに及びては其の弊更に嘆ずべきものあり。彼の基經外舅を以て關白となり廢立を謀り詔勅を動かしゝたぐひは寧ろ小事、其の曾孫兼通兼家兄弟の如きは眼中殆ど帝王を見ざる程なりき。是を以て歷代の天皇の中には宇多、醍醐、村上諸帝の如き勵精事に從ひ給ひしもおはせぬに

あらずと雖も毎に權臣のために妨げられて其の御志を果し給はざりき。殊に冷泉天皇以後は政權全く外戚に歸し天皇は唯垂拱して其の制を受け給ふのみ況や親王諸王の如きをや時に拮抗を試むるものあるも淪落を免るゝは稀なり。而して執權者たる藤原氏は孰れも權を爭ひ父子叔姪兄弟の親すら相鬩ぎては仇讎の如く彝倫壞敗して道義地に墜ち紀綱次第に弛びて皇室はた漸く衰へたり。兼家の子道長の世となりては累世の權威に加ふるに其の五女を四帝一皇子に納れ三帝の外祖父たりしかば專横遙に祖先の所爲に超ゆるものありけり。私第を營造するに國司に課役し凝殿一間毎に受領一人を充てつゝも猶飽き足らでや遂には諸國司に令して寧ろ王事は緩くすとも此の役を怠る勿れといへりきとぞ。藤原氏僭上の程大率ね此の如し。道長かつて其の勢威の程を歌ひけらく

この世をば我が世とぞおもふ望月の虧けたる事もなしと思へば

と、されども藤原氏の榮華は此に至りて極まれりと謂ふべし。其の子頼通教通等も僭恣なりきと雖も後三條天皇剛健にして世故に通じ給ひ藤原氏の不臣を憤り努めて之れが抑制を圖り給ひしかば流石の權家も是れより次第に屏息の姿あり。

其の後また白河、鳥羽、後白河の三皇は禪讓のゝち專ら院中に在りて天下に制令し給ひしからに實權漸く王室に回收せられしが院宣の勢は詔勅より重く院宣はた多くは近昵の侍臣より出でゝ兒戲に類するもあり。而して積年の弊習は遂に平氏の一門を喚ひ起し六十餘州の國土は大半其の所領とぞなりにける。是においてか平氏の威權は旭日の昇るが如く其の族にあらざるものは人にあらずといふほどなりしが幾何もなくして倨傲の心を生じ剩へ藤原氏の驕奢に倣ひしかば榮華の夢は僅に廿年遂に源家のために破られて空しく西海の藻屑となり天下の大權は遂に源家の手に移れり。

かゝる中にも平安京は常に華美の中心として奢侈の風盛に上下の間に行はれぬ。先づ邸宅に大内裏の宏壯は云はずもあれ王族權門おの〳〵意匠を凝らして臺閣水石の巧を競へり。河原左大臣の宇治、嵯峨、六條の別莊、藤原冬嗣の閑院、同良房の堀河第、基經の枇杷第、兼家の東三條第、道長の上東門の第、などはありしが中にも一きは美しきものとこそ聞け。月殿蕭梁の粉色は金銀の色を爭ひ前栽の花木には玉もて飾りしもありきとかや。されば又飲食、衣服に膏粱美味綾羅錦繡は常の事

なり大饌盛裝一意及ばざらんをのみ恐れき。其の遊興には蹴鞠、管弦、香、雙六、曲水の宴、紅葉の賀、さては大井河の春の朝、鴨河の秋の夕、龍頭鷁首の舟を泛べて花に歌ひ月に舞ふなど四季をり〳〵の歡樂はげに天上界の有樣も之れには過ぎじと思はれたり。其の他詩歌の遊びには歌合、詩合、詩歌合は誰も知るところ探韻、韻ふたぎ等の競技また行はれぬ。堀河天皇の世にありては艶書合といふものさへありぬ。男女相集りて綢繆の文詞を取りかはし以て戀情の至切を考較せり。

かくも世は浮華に奔り驕奢に流れてければ朝紳は其の田祿を以て一家の歲計を支持するに足らず爲に民をおひたげ公を害ふもあり。諸國の莊園はあらゆる手段によりて私領せられ請託賄賂賣官の沙汰は白晝にさへ公行せり。されば上に倣ふ下の事とて諸司諸院の人も亦漸く其の風に化して群飲佚樂の弊を釀成し新任の人あれば强請して飲まんとを求む。權家の從僕は主人の勢を恃みて道路往復の車駕を强借し若し聽かれざれば則ち暴行するを例とせり。而して諸衞の將士は兵馬の演習を舍てゝ容儀服裝に心を注ぎ曲技雜藝を習練して專ら宴遊の興を添ふるのみ實際兵器を執りて征戰に從事するは賤夷の業として之れを疎んじたり。有司曠職の程以て想ふべし。かくても猶庶民鼓腹して太平の德を謳歌すべしや。延喜天曆の政は世に太平極治と稱せられ歌舞管弦の聲洋々として平安城裡に響きしかども京畿の地にさへ產を失うて流宕するものありきとぞ。

地方の諸國には權門勢家の田莊次第に增殖するに從ひ奸猾の民機に乘じて權謀を逞うするもの甚だ多かりき。或は土地を權貴に託して莊園となし以て賦稅を輸さゞるあり或は田園を寄進と詐り宅舍を賣與と名けて課役を免るゝもあり甚しきは威權を挾みて拒捍鬪爭を事とせり。おかして國司郡司等は其の情を知れども權貴を憚りて禁ずることなく良好の民却て陷穽せられて永く其の業を失ふもありき。朝廷おば〳〵之れを制すれども其の弊を增すのみにて遂に改まらず班田收授の制何時しか壞れて諸國浮浪の民愈〻多く貢賦日を追うて減少を告げぬ。かくて牧民の職既に其の權を失ひ政令次第に行はれずなりしかば諸國の豪族は兼併使漁の勢いよ〳〵加はり私鹽を樹て弓馬を蓄へ以て各所に雄長を誇り遂には戈を朝廷に向くるものさへ出で來たれり。朱雀天皇の天慶年中に平將門は東國を撼がし藤原純友は西國を震ひ相呼應して叛旗を飜しつ。圓融天皇の朝

には群賊諸方に横行して放火殺傷到らざるなく後一條天皇の御宇には平忠常の亂また狂暴を逞うせり。其のゝちに至りては兵寇殆ど相繼ぎ後冷泉天皇の朝にして始めて平定に歸するを得たり。されども此の際にありて常に征討に與りしは諸國の武士のみ諸衛の將士は前にも述べたる如く風流韻事にこそ多少の心得もありつれ刀劍を執りては小兒にも劣る程孱弱のものゝみなれば、あれども無きが如き有樣なりき。況や上達部殿上人など呼ぶ貴公子に於いてをや。彼等は地方の困弊は毫も知らざる如く詩歌管弦の歡樂の暇には花鳥の使を馳せて只管ら慰懇を通ずる事のみ務めたり。戀愛のためには一身を犧牲とするをも厭はず情人のためには公務を廢してもいとはんとす容貌の美醜心性の好惡は素より關するところにあらず男といふ男、女といふ女只、多くを契るを以て此上なき名譽と考へたるが如し。されば閨閤の紊亂はこの時より甚だしきはなく上達部殿上人の晝夜を別たず後宮に入りて宮女と戲るゝはまだしも怨すべし有夫の婦女を偷むもの、繼母子の姦するものさへ尠からず其の甚だしきは戒律を守るべき僧侶の高貴の閨房に出入して不義の情慾に一時を貪るものもありき。大寶の制度には一夫多妻は禁ぜられしにも拘らず縉紳にして二三人の正妻を有ち名媛にして同時に二人の夫に見えたるものありと聞くも豈に珍事として喋々しく語らんや。かゝれば當期の文學が如何ばかり此の時代の狀態と相涉るところありしかは改めて云はずとも讀者は大方推測せしならん。されども此の時代に又此の期の文學に直接間接相因緣して尠からざる影響を與へしは佛敎と漢學となるべし。

佛敎は前期の末に既に旺盛の姿を現ぜしが此の時代に至り桓武、嵯峨兩帝の世に最澄（後、傳敎大師と謚す）空海（後、弘法大師と謚す）等の名僧出でゝ弘敎に努めたりしかば朝となく野となく崇佛の風ます〳〵人心を傾かしめぬ。最澄は延曆廿一年入唐し台敎の奧義を究め歸朝の後近江なる比叡山に延曆寺を建立し天台宗を開始して顯密二敎の義を說きつ。空海は延曆廿三年に入唐し密敎の旨を學び歸朝のゝち平安九條の東寺に居り後また紀伊國高野山に金剛峰寺を營み盛に眞言宗の敎旨を弘めつ。是に於いて我が邦には三輪、法相、華嚴、律、俱舍、成實等の古宗の外天台、眞言の二宗大に行はれたり。殊に嵯峨天皇二僧を信仰し給ふこと篤く諸〻弘敎の便宜を與へら

れしかば本邦の佛教ために一新し此の二宗の盛なる前古共に比すべきものなかりき。

そも〳〵天台宗に顯密二教を說き眞言宗に密教をのみ說くは表面上其の宗とするところを異にせるは勿論なれども其の根底に顯密二教の差別ある事は二宗共に是認するところなり。故に二宗は法身（大日如來）應身（釋迦如來）を說き本地垂跡の救を信じ遂に神佛習合の說を唱へつゝ神道を以て直に佛教の中に混化し去らんと務めたり。神佛習合の說は蓋し敬神の念に篤き我が國民をして容易く佛に入らしめんがために起りしものか。此の說は早く聖武天皇の朝に於いて僧行基の唱道するところなりしが是に至りて大成するを得永く神佛一躰本地垂跡の說世上に傳はりぬ。されば是れより佛教の傳播は昔日に異り幾程もなくて舉國みな其の教義を尊奉せり。さかれども其のゝち我が國民佛教を排斥せず好みて崇拜するに至りては僧侶また昔日の如く弘教のために精力を盡すものなく剩へ名僧も出でざりければ何時しか深遠なる玄理は失せて皮相の妄語虛式のみ人の心を領したり。僧は經文を讀誦すれども法を說くものなく俗人は佛像を拜すれども教義を解するものなし。加ふるに柔弱なる世の習ひとて人々死を懼れ生を希ふ心強かりしかば上下惑信を抱くもの多く物忌（ものいみ）、方違（かたたが）、物怪（もののけ）等の習俗盛なりき。故に疾病あるものは云ふに及ばず冠婚葬祭等に臨みては必ず僧侶巫祝を招きて加持祈禱をなさしめ其の功德によりて諸〻の災禍を攘はんとこそ願ひけれ。かゝればまた朝廷の公事も大半法會供養を以て充たされ天災地妖はもとより征討防禦に至るまで變事あれば必ず禁中若しくは諸國に於いて諸寺の僧侶を招きて加持修法を行はしめき。この際上は至尊より下は庶民に至るまで髮を剃りて出家するもの甚だ多かりき。萬乘の君にては淸和天皇を始め奉り宇多、花山、白河、鳥羽、後白河の諸帝いづれも灌頂受戒し祝髮して佛に歸し給へり人臣にしては限りなし云ふに及ばんや。さかれども三綱の職（僧正、僧都、律師、僧寺を監督する官）漸く曠く度牒の制次第に壞れてよりは諸寺の私度多く且延曆（叡山）興福（奈良）園城（三井）などの諸寺國家鎭護の功に誇り互に其の勢位を張らんがために惡僧を集へて武技を講じければ是れより無賴の徒相投じて緇衣群を爲し掠奪殺傷盜賊にも過ぐ佛教の本旨は遂に尋ぬべからざるに至れり。是に至りては朝廷武人も制することを能はず一天萬乘の君さへも膝を

屈して其の狂暴に從はざるを得ず想へば其の昔兵寇あるに際して調伏を祈りし僧徒はやがて朝廷の累となりぬ。白河法皇歎息して宣く「天下に朕が意の如くならざるもの三つ鴨河の水、雙六の采、山法師これなり」と僧侶人爲を以て左右しがたきものと共に數へらる狂暴不逞の狀以て想察するに足る。

されども此の時期に於いて佛敎が與へし功また絕えて無からずやは。前に記せし最澄空海等を初め僧徒にして弘敎の必要より人心を收攬せんがために池溝を開き道路橋梁を修繕する等公益をなせしこと決して尠からず。美術上文學上の功勞また筆すべきものありき。義術上に繪畫彫刻等の佛者の手によりて發育せしは前期に於けるを見ても知らるべし文學上に平假名の發明といひ今樣歌の創始といひ殊に言文の乖離を妨止せるが如き其の功の重なるものなるべし。尙此等の事につきては後に記すところあるを見よ。

漢學は前期既に大學國學の設けありて專ら子弟の學習に便せしが桓武天皇の頃には一層盛大を極め從來の學田のみにては其の費用の辨じがたきより新たに是れを增加し給ひたる程なりき。其の後も數世の間は歷代の天皇意を用ひて漢學を奬勵し給ひ朝紳はた私學館を設けて子弟の敎育を務めてければ漢學の隆盛は其の頂點に達せり。私學館の重なるものを和氣廣世の弘文院、藤原冬嗣の勸學院、在原行平の奬學院、恒貞親王の淳和院、橘氏の學館院、菅原大江兩氏の文章院、僧空海の綜藝種智院等とす。學者には都良香、菅原道眞、三善清行、小野篁、僧空海等最も著く詩文集には『凌雲集』『文華秀麗集』『經國集』『本朝文粹』『續文粹』『朝野群載』『菅家文草』『性靈集』等の書今に稱せらる。當時漢學とし云へば紀傳道に限る有樣なりしが是等詩文集は大方『文選』『白氏文集』等の書に倣はざるはなし。されば其の所載の文章は專ら六朝の四六駢儷の躰を帶び巧緻纖細、文字のために思想を箝制せられ造句のために感情を撿束せられたる跡いと多し。勅撰の歷史には桓武天皇の朝に『續日本紀』仁明天皇の朝に『日本後紀』『淸和天皇の朝に『續日本後紀』陽成天皇の朝に『文德實錄』醍醐天皇の朝に『三代實錄』ありき。是等は『日本書紀』に加へて本朝六國史といふ事前に述べたり孰れも漢文を以て漢史躰に朝廷年中の行事、叙任天變地妖等を年序を追うて列記せるに過ぎざれども史學上必須の書なりとす。『續日本紀』以下の中に宣命の文のみ國語のまゝに寫したるは特に世の貴重するとこ

ろ洵にさもありぬべし。『類聚國史』は宇多天皇の朝に菅原道眞の上りたるもの又世に名あり。その他雜書にては桓武天皇の朝に『古語拾遺』『大同本紀』嵯峨天皇の朝に『弘仁格式』『新撰姓氏錄』淳和天皇の朝に『令義解』清和天皇の朝に『貞觀格式』醍醐天皇の朝に『延喜格式』等ありき。

醍醐天皇以後は朝政次第に弛みて國用給せず朝紳はた佚遊を事として學事に留意するものなかりしかば公私の學校共に荒廢し漢學の攻究やゝ衰へたり。此を以てこの天皇以後には從來引つゝきて撰錄せしめ給ひたる漢文の歷史も絕え果てつ。されども詩文を作る事のみは前代の餘勢を承けて尙さばかりは衰へざりしが終にはそれすら遊戲の一具となりて只〻形式を傳へしのみ。若しそれ道德仁義の學は何處を尋ねてか見當るべき淫猥巧緻なる『遊仙窟』此上なき寶典として珍重せられし世の中には嚴正なる孔孟の敎は好む人も無かりしは驚くべき事ならじ。白河堀河二帝の頃には卿相にして尺牘を作り得ず漢學を知らざる人もありきとぞ。されば此の頃漢文に醇粹の文格を守るもの少く漸次後の書牘文の如く和漢雜糅の躰を馴致したり。

第三章　平假名

平假名製作の由來　僧空海　いろは歌

我が國語を寫すに當り漢字を單用する事の不便なるよしと其の不便を削減せんがために片假名の出來たりし由緣とは既に第二期第五章に於いて叙陳せり。而してまた同章に於いて片假名の發明が如何ばかり我が文學の進步を助成すべきかをも併せて記載するところありき。されども凡そ一事の普く流行するに至るまでには尠からぬ歲月を要する如く片假名が實際に文學の上に其の効力を現ずるに至りしも亦久しきのちなりけり。蓋し自然の必要は漢字の偏傍を省略せしめやがてまた彼の片假名を創作するに至らしめきといへども當時の人は元來根底より漢字の不便なる所以を看破して故意に此の記號的文字を創作せしにあらねば是を使用するは唯一時の便宜を計るに過ぎず故に公文書類は勿論私書類にても少しく正式を要する場合には漢文をもてし若しは漢字をもて國語を寫す事一般に行はれしなるべし。まかのみならず當時は漢學隆昌の折りとて尚くも學者を以て任ずるほどのものにして單に記號的文字たる片假名を使用せんは面伏

せなる感もあるめれば務めて漢文を綴り漢字をもて國語を寫さし次第にてもあるべし。さるに漢字は點畫複雜なるからに筆記に不便なりとの一事は他方に筆記用として草躰の文字あらしむるに至りき。草躰の文字は支那にても早くより用ふるものなりしが多少點畫を省略するところあるにより漢字を聲字として取扱ふ我が邦に在りては其の必要を感ずること殊に莫大なりき。されば此の草躰の文字を使用すること愈〻多きにつれてます〳〵其の字畫を省略し終に一種の簡易なる字躰を作りいたすに至れり。これを平假名といふ草躰の文字より脱化せるゆゑを以て又一に草假名とも呼ばれたり。平假名は嵯峨天皇の頃に僧空海の「いろは」歌四十七文字に始まりぬと傳ふれども其の說果して然るべしや。空海は眞言宗の開祖にして學和漢梵を兼ね殊に絶技の能書家なりきと聞こえたれば四十七文字を撰擇して一首の今樣歌に作り佛說を弘めんとて爲さしわざがゆくりなくも當世の標準文字となりて平假名の字躰を定めしものとぞ思はるゝ。よしや平假名の文字は皆ながら空海の創作にあらざるも僅々四十七文字の中に幽玄深邃なる佛說を籠め而も同音の文字を用ひずして容易く平假名の字躰を定めしは嘆賞するに足れり。

さて前にも述べしが如く由來語格の全然相違せる我が邦において漢字を有意文字として使用せんこと素とより難く聲字として用ひんも猶また不便鮮からざりしに前に片假名の發明ありこゝにまた平假名の製作ありしかば是れより人の思想も感情も想像も自由に描寫するを得たり。されども平假名はもとより片假名も我が國語の中に存する音韻を悉く精密に寫し得たるものならねば文字として些の批難なきものとは云ふべからず彼の羅馬字等の屈折變化の自由なるに比すれば大に劣るところあるや疑ひなき事實なり。唯是等の文字を以て漢字に比す彼れに於いて特有なる不便は多く是れにより免るゝを得べし。おもふに是等の文字の不完全を難ずるは言語の發達著き今日より與へたる見解當時にありては如何なる言語か是れによりて寫し得ざるべき僅に四十七文字乃至五十の文字をだに知了せば如何に複雜なる思想も如何に紛糾せる感情も如何に深刻なる想像も手に從ひて表明するを得べきなり。さればにや當初は專ら漢字を用ひたる人々も世の下るにつきて是等の文字を用ふること漸く多く遂には全く假名のみの

文章をも生ずるに至りたり。是れにつけても諷唱すべき歌謳が奈良朝の文學を支配し筆記すべき散文が此の朝の文學を占領したる所以も明了なるべくや。又從來或る狹小なる範域に箝制せられたる散文の自由自在に放奔飛躍の狀態を呈するに至りしも自然に諒察せらるべくや。

第四章　歌謳

詩賦の流行　和歌の勃興　『古今集』の撰進　其の歌思及び歌躰

萬葉集との比較　歌序　歌人　『古今集』以後歷代の勅撰歌集

歷代勅撰歌集の合評

當期の初つ方およそ七八十年の間は漢文學極盛の時期にして殊に嵯峨天皇の御宇などには大學なる紀傳道の學生等が科試にも專ら詩賦を以て及第仕官せしむる有樣なりしかば上下を擧げて詩を賦し漢文を屬する事のみ熾に行はれぬ。かくて和歌繁榮の時代なりし奈良朝の餘響は全く尋ぬるすべなきまで其のころ歌といふもの衰へたり。蓋し桓武天皇の頃には彼の『萬葉集』の編者の一人と算へられたる大伴家持を初めとし其の集に載れる歌人の中には生存したるものもありぬべきに其の歌の一も傳はらぬは詩賦の流行に壓せられて世にまた歌の事を云ふもの無かりしに依るなるべし。かゝれば奈良朝文學の精粹たる彼の『萬葉集』の如きも空しく高閣に束ねられて蠹魚の住家となり果て人の繙き見ること絕えてあらざりき。其の一斑は淸和天皇が或時文屋在季を召されて『萬葉集』はいつばかり作れるぞと問はせられしにても知らるべし。さはれかゝる中にも早く反動の微光は此の天皇の頃よりやう〳〵現れつゝ一時は詩賦の流行と拮抗の勢を呈せしが漢文學の衰微につれて和歌再榮の機運に會しぬ。此の機運に先驅せし俊秀なる歌人を僧正遍昭、文屋康秀、宇治山の僧喜撰、小野小町、在原業平、大伴黑主等とす。是等の人々は孰れも『古今集』の序文中に載せられて世に六歌仙と稱せらる。在原行平などもまた一世の名手なるべし。宇多天皇の寬平の頃よりは此の機運ます〳〵熟し公卿宮媛の間には歌合と稱ふる歌會頻りに行れたり。是は漢學隆昌の際において詩賦の心得あるもの一堂に會して探韻し絕句を賦して即興を遣れりし類に倣ひたるにて歌人等相集りて題を設け思を構へて即吟し其の作歌の詞思を評隲して優劣を批判するものなり。されば是れより詠歌の盛行したるは

云はでもの事なれどかゝる遊戯的謳詠の行はるゝに從ひ其の風調は見るもの聞くものにつけて起こりし美感を歌へる從來の歌謳に比していたく異樣のものとなりぬ。此の際また長歌衰へて短歌のみ獨り榮ゆるに至りぬ蓋し即座に題を出だして詠ぜんに數十句を聯ぬる長歌は決して能く爲し得べきにあらねば勢ひ短歌のみ詠み出てしがやがて習ひとなりけるにや。詩賦に絶句の行はれしも亦間接の一因なるべし。仁明天皇嘉祥二年三月興福寺の法師等天皇の寶算四十に滿たせ給へるを賀し奉りて佛像四十軀を作り是れに副へて獻れる長歌一篇は未だ奈良朝を距ること餘りに遠からず隨うて古色の稍〻見るべきところなきにあらずと雖も『萬葉集』のに比べては詞思共に劣りにたり。それより後なるは云ふに及ばし詠み出づることもやう〳〵稀になりたれども風姿風情は殊更に粗笨、詞をならべ句を續けたるところに一種の句拍子あるは長歌に似たりといはゞ云ふべけれども寧ろ平語めきたりと云はん方妥かなるべくぞ覺ゆる。また長歌の躰古は大かた五音七音の句を聯ねて更に終りを七音に結ぶを常として其の格調を紊ることなかりしに此の期の長歌は打見たるところのみは其の昔の形を存すれども實際には七五の句調を帶ぶるが多かりき。

短歌はさすがに句を練り思を搆へて巧を競ひたる程ありて藝術としては一歩を進めたるは勿論なれど唯古歌の眞心より湧出する換言すれば天來の詩想より化現したるには似で輕佻の風あるを免れざりき。則ち其の句法の婉曲にして纖細なるに引きかへ其の着想は複雜なれども眞率人を動かすの概少かりき。想ふに其の句法若しくは用語の優美艶麗なりしは此の時代の言語のまかくありしにもよるべけれども殊更に努めてさるべきを撰ぶやうになりたるぞ重なる源因なるべき。まかして其の着想の複雜なりしは時勢の進歩の然らしめしは云はずもあれ一首の中に成るべく多種の感想を包容せしめんとまたるにもよるべし。また眞率ならぬは即ちかゝるより起こりし自然の結果にして美情中に動かざるに强いて咏出せんと努めたる弊ならずばあらず。此の期の歌謳に奈良時代の歌の氣魄見るべからず浮華に流れ行きしも洵にことわりなるかな。されども是は概評のみ一層細しく云はゞ此の。ころには猶古歌の想を傳へて眞率質樸なるものも稀には見えたりき。